新潟県埋蔵文化財調査報告書　第259集

一般国道８号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ｘ

小　峯　遺　跡

２０１５

新　潟　県　教　育　委　員　会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道８号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ｘ

小峯（こみね）遺跡

２０１５

新　潟　県　教　育　委　員　会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育員会は、国道建設などの道路事業に伴う発掘調査を行っており、その成果を発掘調査報告書として公表してまいりました。本書は一般国道８号柏崎バイパス建設に伴い実施した、柏崎市小峯遺跡の発掘調査報告書です。

一般国道８号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都に至る総距離 561.2km の主要幹線道路です。新潟県と北陸地方および京阪地方を結び、新潟県の産業・経済・文化の交流と発展に大きな役割を果たしています。

しかし、現在の柏崎市域では市街化の進展及び交通需要の増加に伴い、慢性的な交通混雑を引き起こしているのが現状です。柏崎バイパス建設事業は、このような問題を解決し、広域地域との交流促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画されました。

小峯遺跡は平安時代から鎌倉・室町時代を中心とする遺跡で、発掘調査の結果、掘立柱建物や井戸、水田・水路・畑作溝などが検出され、当時の集落や農地の開発の様子の一端が明らかとなりました。

今回の報告書が、地域の歴史を解明する資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と知識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を頂いた、柏崎市教育委員会ならびに地元住民の方々、発掘調査報告書から報告書刊行に至るまで格別の配慮を賜りました国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2015 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長　高　井　盛　雄

例　　言

1　本報告書は、新潟県柏崎市半田３丁目 10 番地 10 ほかに所在する小峯遺跡の発掘調査記録である。

2　本発掘調査は、一般国道８号柏崎バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。

3　本発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼し、1998（平成 10）～ 1999（平成 11）年度に実施した。

4　埋文事業団は、掘削作業などを、株式会社帆苅組に委託し、発掘調査を実施した。

5　整理作業及び報告書作成にかかる作業は、県教委が埋文事業団に委託し、主に 2014（平成 26）年度に実施した。

6　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

7　遺物の注記は、「コミネ」とし、調査年度（西暦下二桁）・出土地点・層位などを併記した。

8　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

9　遺物番号は通し番号とした。本文及び挿図・観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

10　引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅵ章については章末に掲載した。

11　各種図版・挿図作成や本文編集は、有限会社不二出版に委託した。

12　土壌の分析（プラントオパール分析・花粉分析）は株式会社パレオ・ラボ（鈴木　茂）に委託した。

13　本書はの作成は、「第Ⅵ章　自然科学分析」が鈴木　茂（パレオ・ラボ）、ほかは春日真実（埋文事業団　課長代理）がこれにあたり、編集は春日が担当した。ただし、「第Ⅳ章　遺構」については、渡辺尚紀・和泉宏行・坂上法子・海津　知・尾崎高宏・白井利夫・片岡千恵の作成した遺構カードを基に春日が加筆編集した。

14　図版中の網掛けは、各図版に凡例を示した。また、断面黒塗りの土器実測図は古代の須恵器を表す。

15　調査成果の一部は現地説明会資料［1998］、埋蔵文化財事業団 年報平成 10・11 年［1999・2000］、埋文にいがた第 24・26 号［1998・1999］などで公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。

16　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く感謝申し上げます。（敬称略　五十音順）

伊藤啓雄　　上越市教育委員会　　新潟市教育委員会　　妙高市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 経 過 …… 2

A　試掘確認調査 …… 2

B　本発掘調査 …… 2

3　調 査 体 制 …… 3

A　試掘確認調査 …… 3

B　本発掘調査 …… 3

4　整 理 作 業 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

1　地理的環境 …… 5

2　歴史的環境 …… 7

A　柏崎周辺の古代・中世概観 …… 7

B　小峯遺跡周辺の遺跡 …… 9

C　柏崎平野周辺の古代遺跡 …… 11

第Ⅲ章　遺　　跡 …… 15

1　グリッドの設定と地区名 …… 15

2　基 本 層 序 …… 16

第Ⅳ章　遺　　構 …… 18

1　概　　要 …… 18

2　各　　説 …… 18

第Ⅴ章　遺　　物 …… 24

1　概　　要 …… 24

2　土器・陶磁器 …… 24

A　土器陶磁器の概要 …… 24

B　各　　説 …… 27

3　土製品・石製品・金属製品・木製品 …… 29

4　試掘確認調査出土遺物 …… 29

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 31
1　プラント・オパール分析 …… 31
2　花 粉 分 析 …… 36
3　小峯遺跡の植生変遷 …… 39

第Ⅶ章　ま　と　め …… 42
1　土器・陶磁器 …… 42
2　遺　　構 …… 42

≪引用・参考文献≫ …… 46
≪観　察　表≫ …… 49
遺　　構 …… 49
土器・陶磁器 …… 51
土製品・石製品・金属製品・木製品 …… 54

挿 図 目 次

第 1 図　柏崎バイパスの法線と遺跡の位置…… 1
第 2 図　試掘確認調査トレンチ位置と地区名称 …… 2
第 3 図　小峯遺跡の位置 …… 6
第 4 図　刈羽郡域の荘・保と主な城館 …… 8
第 5 図　小峯遺跡周辺の遺跡……10
第 6 図　柏崎地域の主要遺跡の消長……12
第 7 図　遺跡分布図 ……13
第 8 図　各地域の時期別遺跡数 ……14
第 9 図　グリッドの設定と地区の呼称 ……15
第 10 図　基本層序 ……17
第 11 図　遺構の平面・断面形態、堆積状況の分類 ….18
第 12 図　土器・陶磁器の分類……25
第 13 図　試掘確認調査 31 トレンチの位置と
出土遺物 ……30
第 14 図　試料採取地点……32
第 15 図　プラント・オパール分布図 1 ……34
第 16 図　プラント・オパール分布図 2 ……35
第 17 図　花粉化石分布図 ……37
第 18 図　小峯遺跡のプラント・オパール ……41
第 19 図　土器・陶磁器の変遷……43
第 20 図　遺構の変遷 1 ……44
第 21 図　遺構の変遷 2 ……45

表　目　次

第 1 表　須恵器胎土の分類 ……24
第 2 表　古代・中世の土器陶磁器 ……26
第 3 表　試料 1g あたりのプラント・オパール個数 ‥33
第 4 表　産出花粉化石一覧表……38

図 版 目 次

【図面図版】

図版 1　調査区位置図
図版 2　全体図
図版 3　分割図 1（A・B・C1・D1・D2 区）
図版 4　分割図 2（A 区）
図版 5　分割図 3（B 区・D1 区）
図版 6　分割図 4（B 区・C1 区・D2 区）
図版 7　分割図 5・個別図 1
図版 8　分割図 6
図版 9　個別図 2
図版 10　分割図 7
図版 11　個別図 3
図版 12　分割図 8
図版 13　個別図 4
図版 14　分割図 9
図版 15　個別図 5
図版 16　分割図 10
図版 17　個別図 6
図版 18　土器・陶磁器 1
図版 19　土器・陶磁器 2
図版 20　土器・陶磁器 3
図版 21　土器･陶磁器 4、土製品、石製品、金属製品、木製品

【写真図版】

図版 22　調査区近景・A 区全景
図版 23　基本層序
図版 24　SK1・2・3
図版 25　18E4 土器出土状況、SD4・6・10・12・13
図版 26　SD7・9・11・36、畦畔 14・18・19
図版 27　SD8、P16・20・21・25・26
図版 28　D1・2 区近景、D1 区完掘
図版 29　SD83、畦畔 84、杭検出状況、D1 区遺物出土状況、作業風景
図版 30　B 区近景、SK42、SE46・48
図版 31　SK50、P52、SB86、9･10JKL 遺構検出状況･完掘
図版 32　9・10IJKL 遺構完掘、SD41・43・44・45・47
図版 33　SD40・75・77・78、畦畔 49、C2 区完掘
図版 34　D2 区遺構検出状況・完掘、SD40・41・100・101、SK105
図版 35　C2 区完掘、7KL・8JKL 遺構検出状況・完掘
図版 36　8JKL 遺構検出状況・完掘、SD40・201・202、畦畔 49・226、SK220
図版 37　SD200・201・203・204・207・212・214・215・219・221
図版 38　土器・陶磁器 1
図版 39　土器・陶磁器 2
図版 40　土器・陶磁器 3、土製品、石製品
図版 41　金属製品、木製品、試掘確認調査出土遺物

第Ⅰ章　序　　説

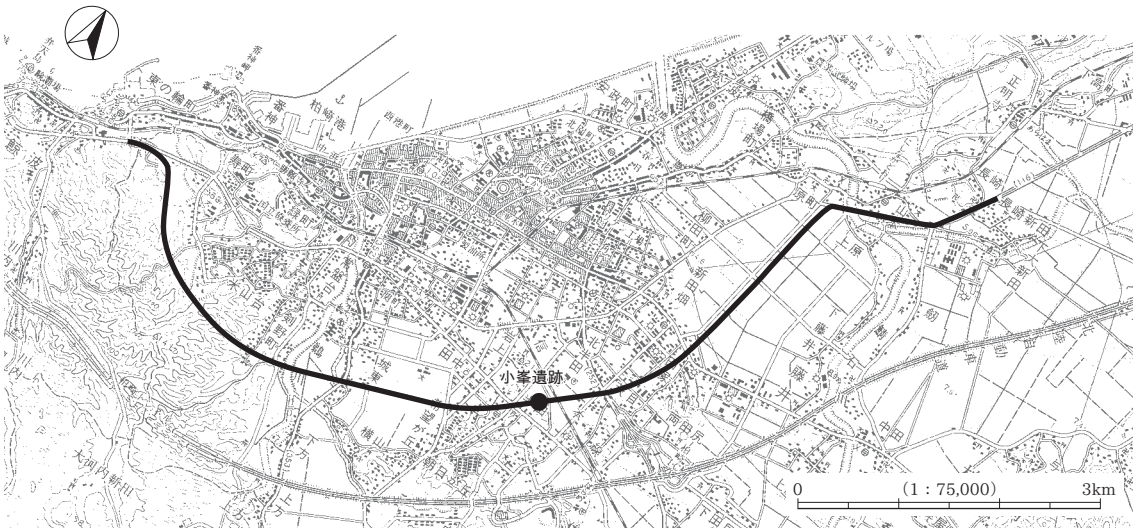
1　調査に至る経緯

一般国道８号柏崎バイパスは、柏崎市長崎を起点に、同市鯨波に至る延長 11.0km の幹線道路である。交通混雑の解消、広域地域との交流促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画され、1987（昭和 62）年に事業化された。1991（平成３）年度から用地買収、1993（平成５）年度から工事着手して整備が進められている。これを受けて、建設省（現国土交通省、以下、国交省）と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

柏崎市茨目（国道 252 号）～柏崎市城東１丁目（国道 353 号）間のバイパス法線予定地の分布調査は、県教委から依頼を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下埋文事業団）が 1994（平成６）年３月 16・17 日に実施した。分布調査の結果を受け、県教委は、周知の箕輪遺跡の範囲が拡大する可能性が高く、他にも未周知の遺跡が存在する可能性が高いことから、80,000m^2 の試掘確認調査が必要であることを国交省に報告している。1995（平成７）年２月に実施した国交省・県教委・事業団三者による埋蔵文化財の取り扱いに関する調整会議では、1995（平成７）年度に試掘確認調査を実施し、本発掘調査が必要な場合は 1996（平成８）年度以降に実施することで合意した。

埋文事業団は県教委の依頼を受け、1995（平成７）年 10 月 13 日～ 10 月 27 日に試掘確認調査を実施した。調査対象面積は 10,000m^2 で、本発掘調査面積は 9,000m^2 と回答している。小峯遺跡は、この試掘確認調査で新たに発見された遺跡である。

協議の結果、小峯遺跡の本発掘調査は 1998（平成 10）年から 1999（平成 11）年にかけて実施することとなった。



第１図　柏崎バイパスの法線と遺跡の位置
（国土地理院発行「柏崎」「岡野町」1：50,000 を縮小）

2 調 査 経 過

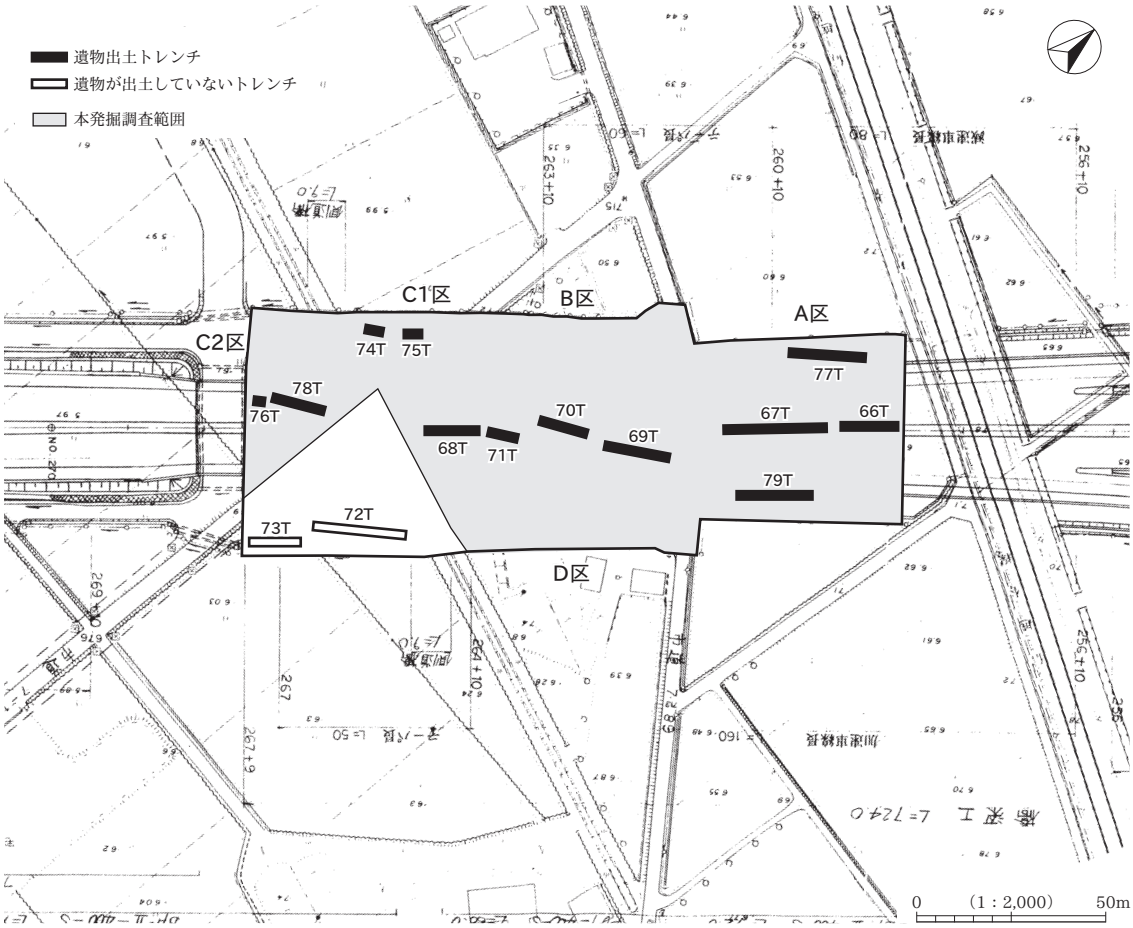
A 試掘確認調査

試掘確認調査は1995（平成7）年10月13日から10月27日にかけて実施した。調査対象面積は、10,000m²、調査面積は400m²で試掘確認率は4%である。調査の方法は、事業用地内にトレンチを任意に設定し、掘削用重機および人力で掘削・精査を行い、土層堆積状況、遺構・遺物の検出状況、トレンチの位置などを図面・写真に記録するものである。

調査の結果、66～71・74～79トレンチから古代・中世の土器・陶磁器が出土し、66～69・71トレンチから溝などの遺構を検出した。小峯遺跡は古代から中世の遺跡で9,000m²の本発掘調査が必要と判断した。

B 本 発 掘 調 査

1998(平成10)年6月10日から開始し、冬期の中断期間を挟んで1999(平成11)年8月3日に終了した。2年間の調査面積の合計は9,000m²である。



第2図　試掘確認調査トレンチ位置と地区名称

（国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所作成した地図を使用）

1998（平成10）年度　A区・B区の調査を実施した。調査期間は6月10日から12月16日である。基本層序のⅠ～Ⅱb層（第Ⅲ章2参照）を掘削用重機で掘削し、Ⅲa・Ⅲb層は人力で掘削し遺構・遺物の検出に努めた。8月27日に柏崎市教育委員会職員15名が遺跡の見学を行った。また、11月14日には現地説明会を行い176名の参加があった。航空写真撮影は11月5日に実施した。

1999（平成11）年　C・D区の調査を実施した。調査期間は4月19日～8月3日である。1988（平成10）年度と同様、Ⅰ～Ⅱb層を掘削用重機で掘削し、Ⅲa・Ⅲb層は人力で掘削し遺構・遺物の検出に努めた。昨年度の調査成果から、遺物包含層・遺構が削平されていると判断したD区微高地部（12～14JK付近）は調査を実施しなかった。またC2区は沼地状の土層堆積がみられ、遺構は検出されなかった。航空写真撮影は8月3日に実施した。

3　調　査　体　制

A　試掘確認調査

調査期間　1995（平成7）年10月13日～10月27日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）
調　　査　財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括　藍原直木（事務局長）
管　　理　山上利雄（総務課長）
庶　　務　泉田　誠（総務課主事）
調査総括　亀井　功（調査課長）
調査指導　寺﨑裕助（調査課調査第二係長）
調査担当　中澤　毅（調査課主任調査員）
調査職員　大滝正人（調査課文化財調査員）

B　本 発 掘 調 査

1998（平成10）年度
調査期間　1998年6月10日から12月16日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　野本憲雄）
調　　査　財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括　須田益輝（事務局長）
管　　理　若槻勝利（総務課長）
庶　　務　椎谷久雄（総務課主任）
調査総括　本間信昭（調査課長）
調査指導　高橋　保（調査課調査第二係長）
調査担当　渡辺尚紀（調査課文化財調査員）
調査職員　和泉宏行（調査課主任調査員）
　　坂上法子（調査課文化財調査員）
　　海津　知（調査課嘱託員）

1999（平成 11）年度

調査期間　1999 年 4 月 19 日から 8 月 3 日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　野本憲雄）

調　　査　財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　須田益輝（専務理事・事務局長）

管　　理　若槻勝利（総務課長）

庶　　務　椎谷久雄（総務課主任）

調査総括　本間信昭（調査課長）

調査指導　高橋　保（調査課調査第二係長）

調査担当　尾崎高宏（調査課文化財調査員）

調査職員　坂上法子（調査課文化財調査員）

白井利夫（調査課嘱託員）

片岡千恵（調査課嘱託員）

4 整 理 作 業

遺物の水洗・註記は可能な限り現地で実施した。1998（平成 10）・1999（平成 11）年度の冬期間は本格的な整理作業に向けての基礎整理（遺構図面修正・遺構カード作成・各種台帳作成など）を実施した。本報告作成のための本格的な作業は、2014（平成 26）年度に新潟県埋蔵文化財センターにおいて実施し、印刷・刊行した。整理の体制は以下のとおり。

整 理 期 間　2014（平成 26）年 4 月 1 日～ 2015（平成 27）年 3 月 31 日

整 理 主 体　新潟県教育委員会（教育長　高井盛雄）

整理実施機関　公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　土肥　茂（事務局長）

管　　理　熊倉宏二（総務課長）

庶　　務　仲川国博（総務課　班長）

整 理 総 括　高橋　保（調査課長）

整 理 担 当　春日真実（調査課　課長代理）

整　　理　田辺恵美子・伏見敦子

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

位　置

小峯遺跡は、柏崎市半田３丁目 10 番地 10 ほかに所在し、北緯 37 度 21 分 36 秒、東経 138 度 34 分 38 秒に所在する。柏崎市は、新潟県の海岸部中央やや南西よりに位置し、2005 年５月１日に刈羽郡西山町・高柳町と合併し、現在の市域が形成された。市の北西は日本海に面し、北東を三島郡出雲崎町、東を長岡市、南を十日町市、南西を上越市と接する。江戸時代は、北国街道と長岡街道（北国街道と魚沼街道を結ぶ街道）の分岐点があり、現在も国道８号から分岐する国道 116 号、JR 信越本線から分岐する JR 越後線の起点であり、陸上交通の要衝となっている。また、日本海が東西日本をつなぐ重要な通路であることはいうまでもない。

地　勢

小峯遺跡の所在する柏崎平野は、鵜川と鯖石川、鯖石川の支流である別山川によって形成された幅約 7km、長さ約 18km の沖積平野である。その東・西・南の三方は、東頸城丘陵、刈羽・三島丘陵と刈羽三山と呼ばれる米山（標高 992.6m）、黒姫山（標高 889.5m）、八石山（標高 518m）などに代表される山地に囲まれている。こうした、山地・丘陵の縁辺には沖積地や一部日本海に面し段丘面が局地的な広がりを見せる。また、海岸部には砂丘（荒浜砂丘）が発達し、標高が 70m を超える地点も存在する。砂丘の内陸には湿地性の沖積地が展開する［鈴木 1988・1989］。

柏崎平野周辺の地形的特徴は、平野を北流する鵜川・鯖石川によって東部・中央部・西部に三区分できる。東部は鯖石川以東の地域で、丘陵や沖積地・砂丘が発達している。刈羽・三島丘陵などの丘陵地帯、八石山から続く山地（三島山地）、別山川・長鳥川流域の沖積地、日本海沿岸の砂丘地が北北東－南南西方向にのびる。

中央部は鯖石川・鵜川に沿って黒姫山から続く山地（黒姫山地）や丘陵が南－北方向にのび、その縁辺では段丘面の発達が比較的顕著である。段丘は樹枝状に開析され、縁辺は沖積地に接している。

西部は鵜川左岸一帯で、砂丘や沖積地は少なく、米山から続く山地（米山山地）が発達する。米山山地の西部は海岸に達し断崖をなすが、東部では狭小な段丘面が確認できる。平野や砂丘が比較的広範囲に展開する東部・中央部とは対照的な地勢である［大野・徳間 1990］。

小峯遺跡周辺の地形

小峯遺跡は柏崎平野の西部、丘陵先端付近の沖積地に位置し、上記の３区分では「中央部」に所在する。標高約 8.3 ～ 6.1m、西方約 2.5km に鵜川、東方約 3km には鯖石川が北流する。海岸線からは約 3km 内陸である。また、周辺に小規模な独立丘陵が点在する。

北側には柏崎の市街地が広がる。市街地と小峯遺跡の間には「鏡の沖」と呼ばれる湖沼がかつて存在したとされる。南側は丘陵である。遺跡と丘陵の間には源田川、横山川が流れる。これら２つの河川はいずれも鵜川の支流の小河川で、源田川は鯖石川の左岸地域へ、横山川は南側の丘陵に存在する藤橋東遺跡群や軽井川南遺跡群などの製鉄遺跡へつながっている。

第３図　小峯遺跡の位置

（国土地理院発行「長岡」「高田」1：200,000）

2　歴 史 的 環 境

A　柏崎周辺の古代・中世概観

1）古　　代

越後国

越後国などの北陸道の諸国は、越国を分割することにより成立した。分割の時期は不明であるが、天武一二年から一四年（683 ～ 685）に行われた国境策定作業時と推測されている［鐘ヶ江 1993］。成立当初の越後国は、阿賀野川以北の地域であり、箕輪遺跡の所在する柏崎平野は越中国に属していた。柏崎平野周辺が越後国に含まれるようになるのは、大宝二年（702）に越中国の四郡（頸城郡･魚沼郡･蒲原郡･蒲原郡）が越後国に編入されてからである［米沢 1980］。

三嶋郡

柏崎平野周辺は当初古志郡に属していた。古志郡は現在の柏崎市・刈羽村、長岡市の大半と見附市の南部に及ぶ広大な範囲を有していたと推定できる。柏崎平野周辺は 9 世紀前半頃に三嶋郡として分立する。三嶋郡における郷名としては 10 世紀に成立したとされる『倭名類聚鈔』に「三嶋」･「高家」･「多岐」の三郷が記され、地名や式内社やその論社などの検討から、三嶋郷が鵜川流域、高家郷が鯖石川・長鳥川流域、多岐郷が別山川流域と推測している［金子 1990］。この指摘に従えば、小峯遺跡は三嶋郷に所在した遺跡と推定できる。

『延喜式』に記された北陸道の駅家のうち、「三嶋」と「多太」は三嶋郡に存在した駅家と考えられる。小峯遺跡の南西約 1km に所在する箕輪遺跡（第 5 図 6）は、一般国道 8 号柏崎バイパスに伴い 1996（平成 8）年～ 2000（平成 12）年に発掘調査が行われ、「上殿」と記された墨書土器、「駅家村」と記された木簡、黒色漆塗りの鐙などが出土しており［春日・坂上ほか 2015］、近隣に古代三嶋郡衙・三嶋駅が存在した可能性が高い。

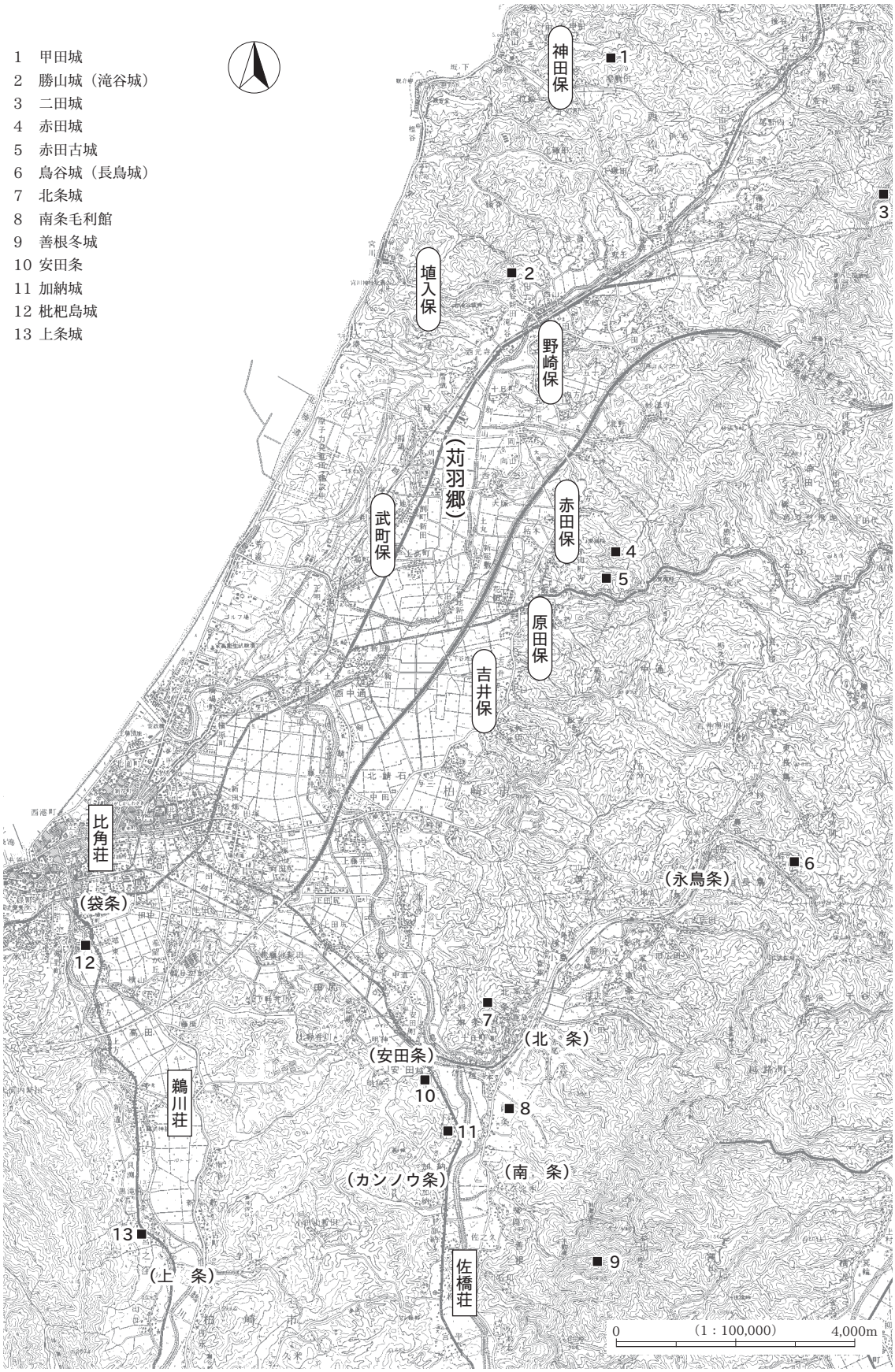
延喜式内社

延喜式神名帳には三嶋郡の神社として御嶋石部神社・物部神社・鵜川神社・多岐神社・三嶋神社・石井神社の六座が記されている。鵜川神社は小峯遺跡の西側約 2.1km に所在する宮場の鵜川神社（第 5 図 B）、鵜川の対岸にある剣野町の三島神社（同 A）は、北西約 2.5km に所在する西本町の石井神社（同 C）は延喜式内社の論社となっている［花ヶ前 2002］。

2）中　　世（第 3 図）

柏崎地域の荘・保

『吾妻鏡』文治二年（1186）三月一二日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に所在する荘園として「宇河荘」･「佐橋荘」･「比角荘」があり、これらの荘園は寄進地系荘園として 11 世紀末から 12 世紀中頃に成立したと考えられる［荻野 1986］。宇河荘は鵜川流域のほか鯖石川左岸の安田周辺も荘域としており、比角荘とは「鏡の沖」と呼ばれる湖沼により隔てられていたと推測される。中世の箕輪遺跡は宇河荘に所在していた可能性が高い。比角荘は現在の柏崎市市街地を中心とする地域に所在した荘園と推測できる荘園であるが、貞治三年（1364）以降史料上で確認できなくなる。佐橋荘は鯖石川上・中流域と長鳥川流域に所在した荘園である。



第４図　刈羽郡域の荘・保と主な城館

（［品田ほか2012］をもとに作成、地図は国土地理院発行「柏崎」「岡野町」1：50,000 を縮小）

別山川流域や北東の岸部には中世の荘園は無く中世後期から江戸時代の史料では「野崎保」・「原田保」・「赤田保」・「埴生保」などの名称が見え、また『明月記』正治元年（1199）正月廿二日条、正和二年（1313）の「源光広和与状写」には「苅羽郷」の記載があり、国衙領となっていたものと考える［品田 1996］。

中世後期の諸勢力

越後毛利氏は宇河荘安田条（柏崎市安田周辺）と佐橋荘の領主であった。越後毛利氏は長鳥川流域の佐橋荘北条の領主である北条氏、宇河荘安田条の領主である毛利安田氏などに分派し、柏崎地域における最大の勢力を誇っていた。また、安田条には 15 世紀に毛利安田氏と土地争論を起こした「不退寺」・「普躰寺」と史料に記される寺院勢力が存在した。小峯遺跡の所在する柏崎市半田周辺は鵜川荘安田条に属していた可能性が高い［品田 1996］。刈羽村赤田周辺に存在した赤田保の領主は斎藤氏である。北条氏・毛利安田氏・斎藤氏は、上杉・長尾政権下で重臣として活躍した一族である。

鵜川上流域の宇河荘上条は、上杉氏一門の上条上杉氏の拠点であった。鵜川下流域、箕輪遺跡北西約 1km には琵琶島城がある。上杉氏の被官である宇佐美氏が配置されたとする意見があるが、宇佐美氏は 16 世紀前半には小野要害（上越市柿崎区）に所在している［県史 164・3212］。なお、建治元年（1275）年の「六条八幡宮造営注文」に越後国御家人として「宇佐美平太跡」の記載があり、南北朝期以降の史料にみられる宇佐美氏はこの末裔と考えられる［高橋 1997］。

港町柏崎

「梅花無尽蔵　続群十二下」には長亨二年（1488）に柏崎を訪れた僧万里集九が「柏崎市場之面三千余家、其外深巷凡五六千戸」と柏崎の繁栄ぶりを記している。永正二～九年（1505 ～ 1512）に成立した連歌師宗長の句集「壁草」には柏崎を歌った句があり、連歌会が町人主催で催されていた可能性が指摘されている［矢田 1999］。

永禄七年（1564）上杉輝虎（謙信）は、戦乱により荒廃した柏崎港を復興するため柏崎の長役荒浜屋宗九郎に制札を発し、新役の停止と町人の帰還を命じ、同九年（1566）には再度諸税の免除と町屋の再建を促している［県史 266・588］。また天正八年（1580）に上杉景勝は「御館の乱」で戦禍を受けた柏崎の諸商業の復興のために七ヵ条の制札を発している［県史 2279］。

「梅花無尽蔵」の記述は誇張が含まれているとしても、15 世紀には柏崎が港町として発展しており、16 世紀前半には連歌会が催され、16 世紀後半には上杉氏にとって重要な港であったことが確認できる。

B　小峯遺跡周辺の遺跡

小峯遺跡周辺は、道路・工業団地・学校建設などの開発事業に先立つ試掘確認調査などによって近年多くの遺跡が存在することが明らかとなっている（第 5 図）。

平野部の微高地や丘陵裾付近には古代から中世の集落遺跡（官衙関連遺跡や中世の館の可能性があるもの含む）が多く確認できる。東原町遺跡（1）は中世前期の遺跡で、鉄製の小札、多量の埋納銭や土師質土器皿などが出土しており［山崎ほか 2005］、地域の中核的な遺跡の可能性が高い。宝田遺跡（2）では古代から中世の水田が検出されている［飯坂 2014］、山崎遺跡（3）・丘江遺跡（4）は中世後期の大規模遺跡であることが明らかになりつつある［国土交通省長岡地域整備局ほか 2014］。田塚山遺跡群（17）は独立丘陵上に立地する遺跡で中世前期の仏堂や墓地などを検出した。上述の「不退寺」・「普躰寺」と関連する遺跡とする意見がある［品田ほか 1996］。箕輪遺跡（6）は古代の三嶋郡衙・三嶋駅に関連した遺跡である［春日・坂上ほか 2015］。下沖北遺跡は古代から中世前期の遺跡で、中世前期では掘立柱建物とこれを区画す

第５図　小峯遺跡周辺の遺跡

（国土地理院発行「柏崎」1：25,000）

る溝を検出した。土師器皿が多く出土しており、東原町遺跡同様地域の中核的な遺跡の可能性が高い［山本ほか 2003］。関町遺跡（18）も中世前期の遺跡であり、比較的多くの土師質土器皿が出土している［中島 2012］。

南側の丘陵には須恵器窯や製鉄遺跡などの、火（薪や炭）と土を扱う生産遺跡が存在する。天池古窯跡（14）は 9 世紀の須恵器窯で双耳瓶を生産している越後では珍しい須恵器窯である［品田ほか 2000］。藤橋東遺跡群（15）・軽井川遺跡群（16）は製鉄遺跡で、軽井川南遺跡群は 9 世紀後半から 12 世紀の大規模な製鉄遺跡と推測されている［平吹ほか 2010］。

C　柏崎平野周辺の古代遺跡

古代遺跡の分布

第 7 図に柏崎平野周辺の古代遺跡を示した。① 柏崎平野北東の海岸部、② 別山川上・中流域、③ 別山川左岸の丘陵裾付近、④ 鯖石川・別山川の合流点付近、⑤ 鯖石川の上流域および長鳥川の流域、⑥ 鵜川の中・上流域、⑦ 鵜川の下流域などに遺跡分布のまとまりがみられる。上述の郷域の想定が正しいとするならば①・②・③は多岐郷、④・⑤は高家郷、⑥・⑦は三嶋郷となる。

古代遺跡の存続期間

第 6 図に柏崎地域の古代主要遺跡（発掘調査が行われた古代の遺跡、遺物が相当量採集された古代の遺跡）の存続期間を示した（時期区分と年代については春日［1999・2005・2010］参照）。古墳時代 4 様式Ⅱ期（古墳時代後期）の遺跡は一定量確認できるが、古代Ⅰ・Ⅱ期（7 世紀）の遺跡はほとんど確認できず、古代Ⅲ期（8 世紀初頭～前葉）から古代Ⅳ期（8 世紀中葉～ 9 世紀初頭）に遺跡が微増し、古代Ⅴ期（9 世紀前葉）に遺跡が急増し、古代Ⅶ 1 期（10 世紀初頭）には古代Ⅴ期かそれ以前に成立した遺跡の多くが廃絶し、遺跡数が大幅に減少する。

時期別遺跡数

第 6 図を基に、第 8 図に時期別の遺跡数を示した。第 8 図右列（越後合計、島崎川流域、黒川・渋海川流域、信濃川右岸（刈谷田川以南））の遺跡数は、第 6 図と同様の作業を各地域で行い、集計した遺跡数である。鵜川流域はⅢ1 期～Ⅳ2・3 期（8 世紀初頭～ 9 世紀初頭）、Ⅶ1 ～Ⅷ期（10 世紀初頭～ 12 世紀前葉）の遺跡が定量確認でき、Ⅴ期～Ⅵ2･3 期（9 世紀前葉～末）以外の遺跡数が少ない鯖石川流域･別山川流域とは異なった様相である。また、鯖石川流域ではⅥ1 期に遺跡数のピークがあるが、別山川流域ではⅤ期に遺跡数のピークがある。

柏崎地域合計と越後全体の遺跡数を比較すると、三嶋郡は越後全体に比べⅣ2・3 期（8 世紀末～ 9 世紀初頭）以前の遺跡が少ない。このことは、Ⅴ期（9 世紀前葉）に遺跡が急増していると言い換えることができる。三嶋郡ではⅣ2・3 期（8 世紀末～ 9 世紀初頭）の遺跡数は 10、Ⅴ期（9 世紀前葉）の遺跡数は 31 であり、約 3 倍となっている。これに対し越後全体はⅣ 2・3 期の遺跡数が 240、Ⅴ期の遺跡数は 373 であり、約 1.5 倍である。

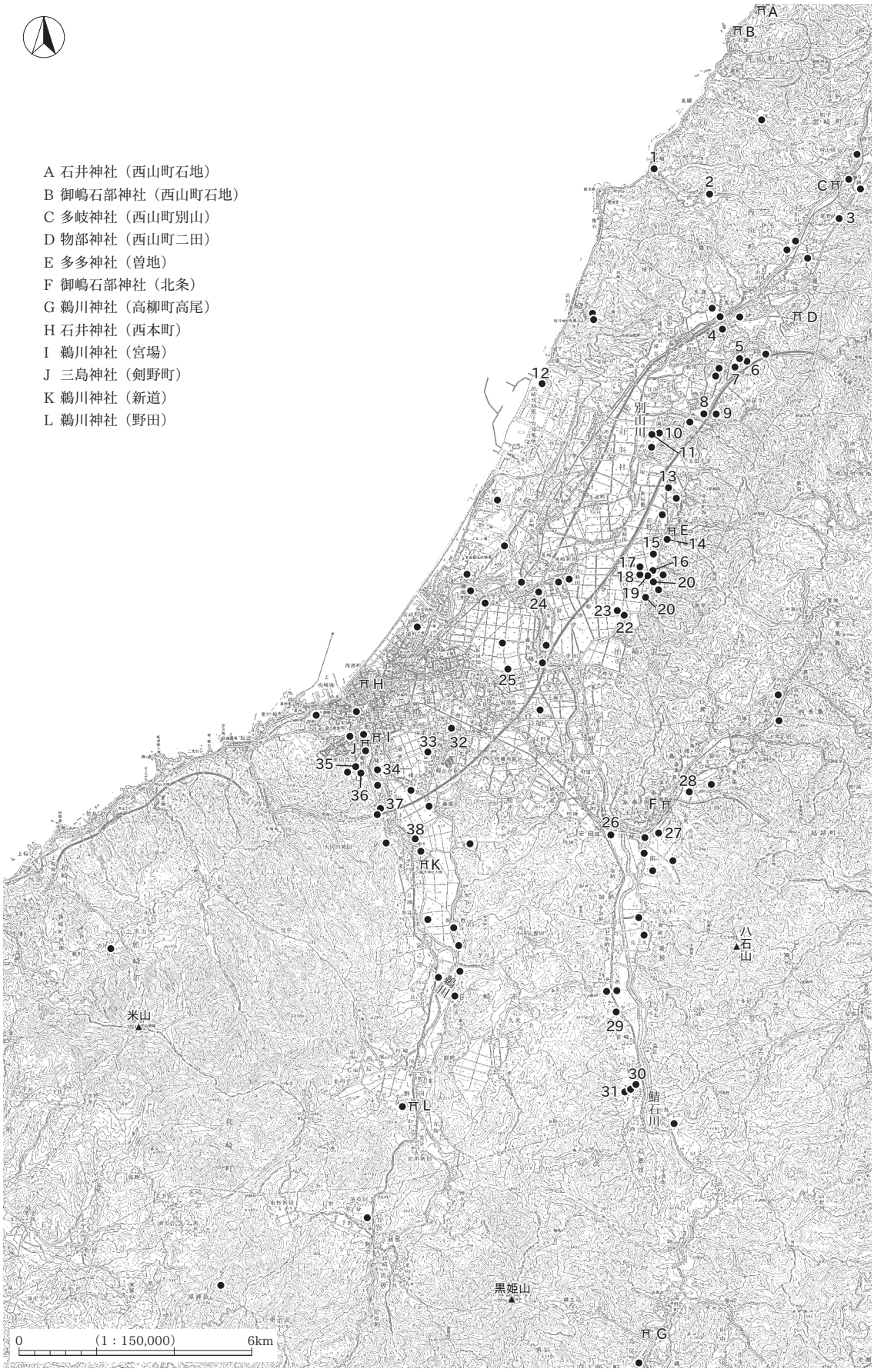
古志郡に属していたと考える島崎川流域ではⅣ 2・3 期（8 世紀末～ 9 世紀初頭）の遺跡数が 10、Ⅴ期（9 世紀前葉）の遺跡数が 22、黒川･渋海川流域ではⅣ 2・3 期の遺跡数が 1、Ⅴ期の遺跡が 5、信濃川右岸（刈谷田川以南）ではⅣ2・3 期の遺跡が 4、Ⅴ期の遺跡が 8 である。柏崎地域と黒川・渋海川流域は、Ⅴ期以前の遺跡が非常に少なく、Ⅴ期に遺跡が急増するという点では共通する。しかし柏崎地域ではⅤ期に遺跡数のピークがあり、Ⅵ1 期（9 世紀後葉）以降遺跡数が減少するのに対し、黒川・渋海川流域はⅥ2・3 期（9

世紀末）が８遺跡と最も遺跡数が多い。

また、島崎川流域でと信濃川右岸（刈谷田川以南）はともにⅤ期（9 世紀前葉）の遺跡数がⅣ2・3 期（8 世紀末～ 9 世紀初頭）の遺跡数の約２倍であるが、島崎川流域ではⅡ１期（7 世紀後葉）～Ⅲ2 期（8 世紀前葉）の遺跡が一定量存在し、Ⅲ2 期とⅣ2・3 期の遺跡数がそれほど変わらないが、信濃川右岸（刈谷田川以南）はⅠ１期（6 世紀末～ 7 世紀初頭）～Ⅲ2 期（8 世紀前葉）の遺跡がほとんど確認できず、Ⅳ1 期（8 世紀中葉～後葉）に３遺跡、Ⅳ2・3 期（8 世紀末～ 9 世紀初頭）には４遺跡となっており、Ⅳ1 期以降遺跡数が増加している。柏崎地域、島崎川流域、海川・渋海川流域、信濃川左岸（刈谷田川以南）は、9 世紀前葉以前はいずれも古志郡に属していた地域であるが、時期別の遺跡数の推移は地域によってそれぞれ異なっている。

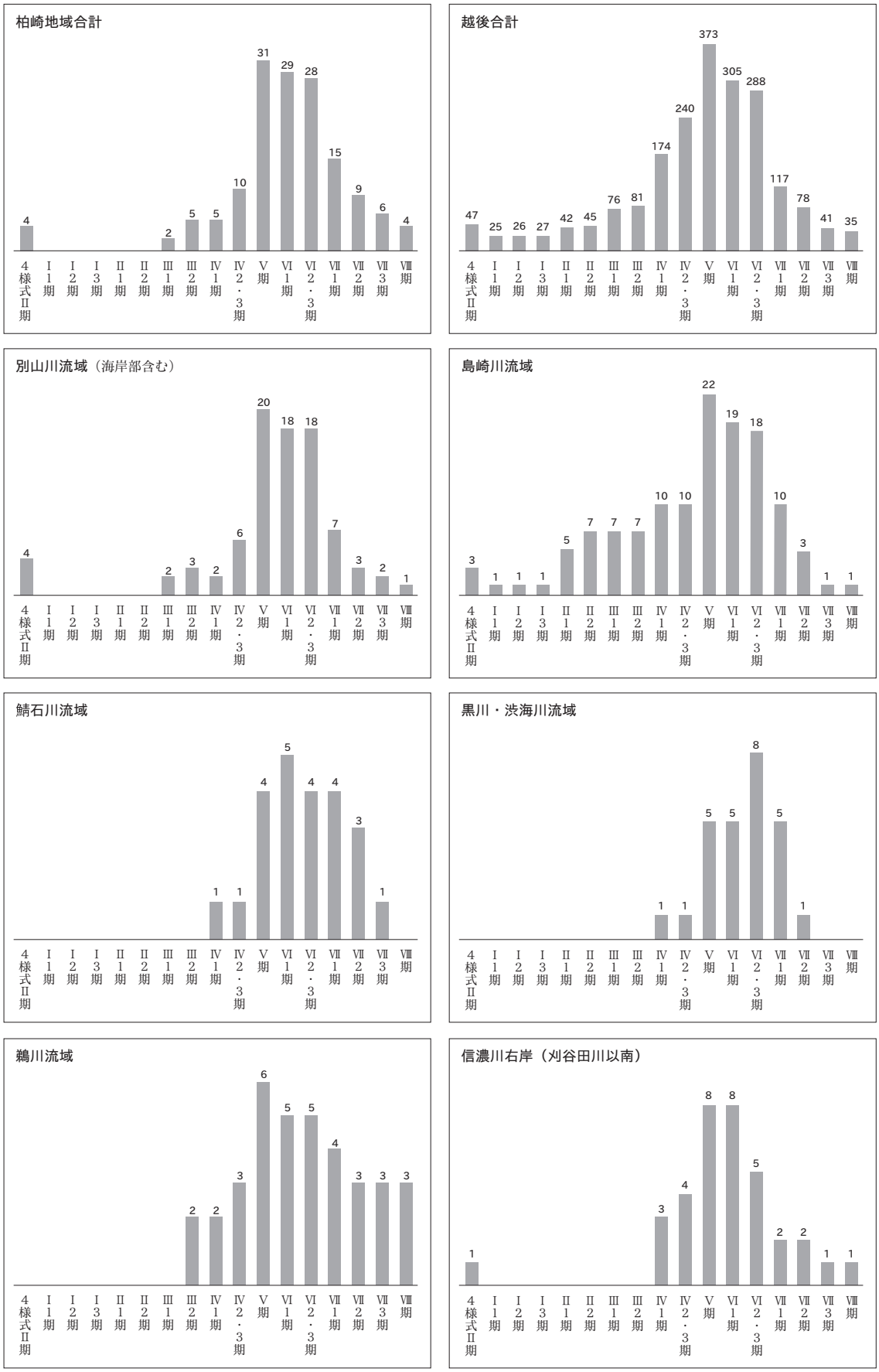
地域	番号	遺跡名	4様式Ⅱ期	Ⅰ1期	Ⅰ2期	Ⅰ3期	Ⅱ1期	Ⅱ2期	Ⅲ1期	Ⅲ2期	Ⅳ1期	Ⅳ2・3期	Ⅴ期	Ⅵ1期	Ⅵ2・3期	Ⅶ1期	Ⅶ2期	Ⅶ3期	Ⅷ期	文　献
海岸部	1	高塩Ｂ	■																	金子ほか 1983
	2	井ノ町							■	■		■	■	■	■					中島 2001
別山川流域	4	二田沖	■											■	■					中島ほか 2010
	12	刈羽大平	■						■	■										品田ほか 1985b
	18	戸口										■	■	■	■	■				品田 1987
			■								■	■	■	■	■	■	■			品田ほか 1990
	11	払川											■	■	■	■				斎藤ほか 1998
										■				■	■	■				斎藤 1999
	8	畠田									■	■	■							中島 2001
	10	山ノ脇										■	■	■	■					斎藤ほか 1998
	17	野附・萱場										■	■							品田ほか 1985a
												■	■							品田ほか 1990
	17	吉井水上											■	■						品田ほか 1985a
												■	■	■	■	■	■	■		吉村ほか 2005
	7	坂田仲沢											■	■	■					中島ほか 2010
	5	町口遺跡											■	■	■					中島ほか 2010
	6	坂田											■	■	■					長澤ほか 2007
													■	■	■					中島ほか 2009
	3	尾野内											■	■	■	■				田海ほか 1982
	24	角田											■							品田ほか 1999
													■	■	■					中野ほか 2009
	22	与三											■	■	■					中野・平吹ほか 2006
	23	江ノ下											■	■	■	■				品田ほか 2008
	15	行塚											■	■	■					品田 1992
															■					品田ほか 1985a
	16	礼坊											■							品田ほか 1985a
	13	枯木Ａ											■	■	■					斎藤 1995
	21	権田町											■							品田ほか 1985a
	14	北田											■	■	■	■	■	■	■	品田ほか 1985a
	9	宮ノ前												■	■	■				中島 2003
鯖石川流域	28	音無瀬										■	■							品田ほか 2012
											■	■	■	■						伊藤ほか 2013
	25	山崎											■	■	■					石川ほか 2012
	26	下川原											■	■	■					品田 2003
	31	宮田											■	■	■					中野ほか 2001
	27	亀の倉											■	■	■	■	■	■		柏崎市史編さん委員会 1987
	30	深町														■	■			中野ほか 2001
	29	山王前														■	■			平吹ほか 1998
鵜川流域	33	箕輪											■	■	■					高橋ほか 2002
										■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	春日・坂上ほか 2015
	34	下沖北								■	■	■	■							山崎ほか 2005
	36	剣野沢										■	■	■						石川ほか 2014
	32	小峯											■	■	■	■	■	■	■	本書
	37	鵜巻田											■	■	■	■	■	■	■	藤巻ほか 1988
	38	前掛り											■	■	■					品田ほか 1997
	36	剣野													■	■				品田ほか 2011

第６図　柏崎地域の主要遺跡の消長（番号は、第７図のドット No. と一致）



第７図　遺跡分布図

（国土地理院発行「柿崎」「柏崎」「岡野町」1：50,000 を縮小、ドット No. は、第６図の番号に一致）



第８図　各地域の時期別遺跡数

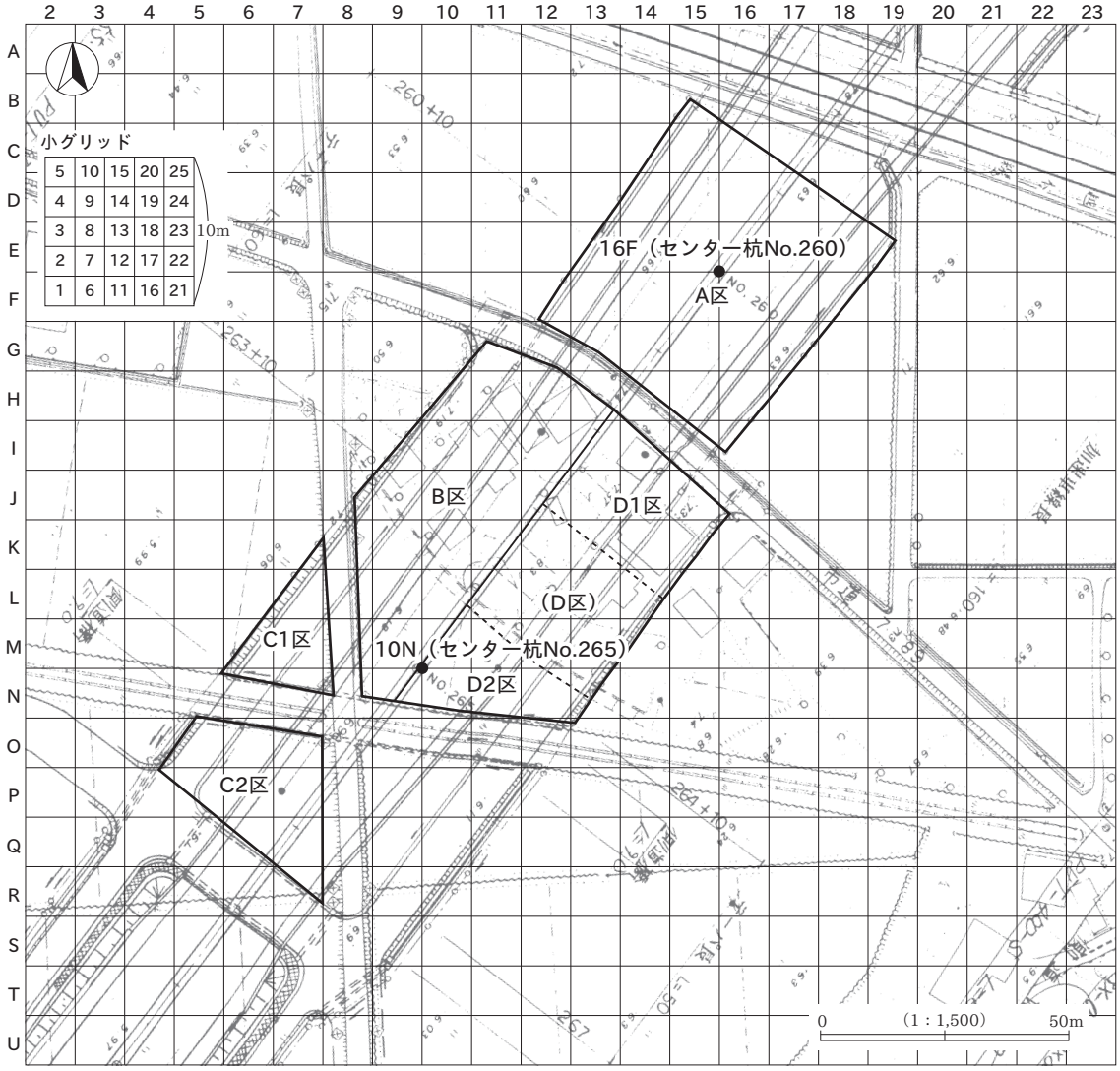
第Ⅲ章　遺　　跡

1　グリッドの設定と地区名

センター杭 No.260 を基準に国土座標に添った 10m 単位の方眼を設定した（大グリッド）。東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットの記号を付けた。大グリッドは 2m 方眼に 25 分割し、小グリッドとし 1 ～ 25 のアラビア数字を付した。グリッドの呼称は大グリッドと小グリッドを合わせ、16D20 などと表した（第 9 図）。主なグリッドの座標は以下のとおり。

16F（センター杭 No.260）　X 150577.8170、Y 7135.9184（旧測地系）

10N（センター杭 No.265）　X 150505.8986、Y 7066.3311（旧測地系）



第 9 図　グリッドの設定と地区の呼称

（国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所作成した地図を使用）

調査区は道路により分断されている。また調査が複数年に及んだため調査区を便宜的に、A 区・B 区・C1 区・C2 区・D1 区・D2 区の 6 つに区分した。

2 基 本 層 序

調査区内で最も標高が高いところはB 区の微高地部分地表面で約 8.3m（Ⅳ層上面で約 7.6m）、最も低いC1 区で約 6.1m（Ⅲｅ層上面で約 5.4m）である。B 区南西・D1 区はC1 区も近似した標高である。A 区は約 6.5m（Ⅳ層上面で約 5.8m）で、B 区の微高地部より低いが、C1 区や D2 区、B 区南西部よりは高い。

土層の堆積状況は、地点によって異なるが、古代から中世の遺物包含層と考えているⅢａ・Ⅲｂ層は、B 区の微高地部を除いたほぼ全域で確認できた（第 10 図）。遺構の多くはⅣ層上面で検出したが、Ⅲｂ層の直下にⅢｃ層・Ⅲｄ層・Ⅲｅ層が存在する場合は、直下の土層で遺構の検出を行った。

以下、層序の特徴を各々記述する。

Ⅰａ層：暗青灰色（5BG3/1）粘土。B 区･D 区微高地部では、Ⅰｂ層の黒褐色（2.5Y3/1）シルトとなる。表土である。

Ⅰｂ層：黄橙色(10YR8/8)シルト。宅地造成時の盛土(客土)である。B 区･D 区の北東側のみ確認できる。

Ⅰｃ層：暗オリーブ色（5Y4/3）粘土。盛土前の旧表土である。Ⅰｂ層同様、B 区・D 区の北東側のみ確認できる。

Ⅱａ層：青灰色（10BG5/1）粘土。明褐色の酸化した土が混じる。近年の水田耕作土。平安時代～近代の遺物が出土する。

Ⅱｂ層：暗青灰色（10BG4/1）粘土。Ⅱａ層と同時期（近年）の水田耕作土。Ⅱａ層より酸化の度合いが強く、全体的に赤味が強い。Ⅱａ層と同じく平安時代～近代の遺物が出土する。

Ⅲａ層：黒褐色(5YR3/1)粘土。平安時代～中世の土層。平安時代から中世の遺物が比較的多く出土する。

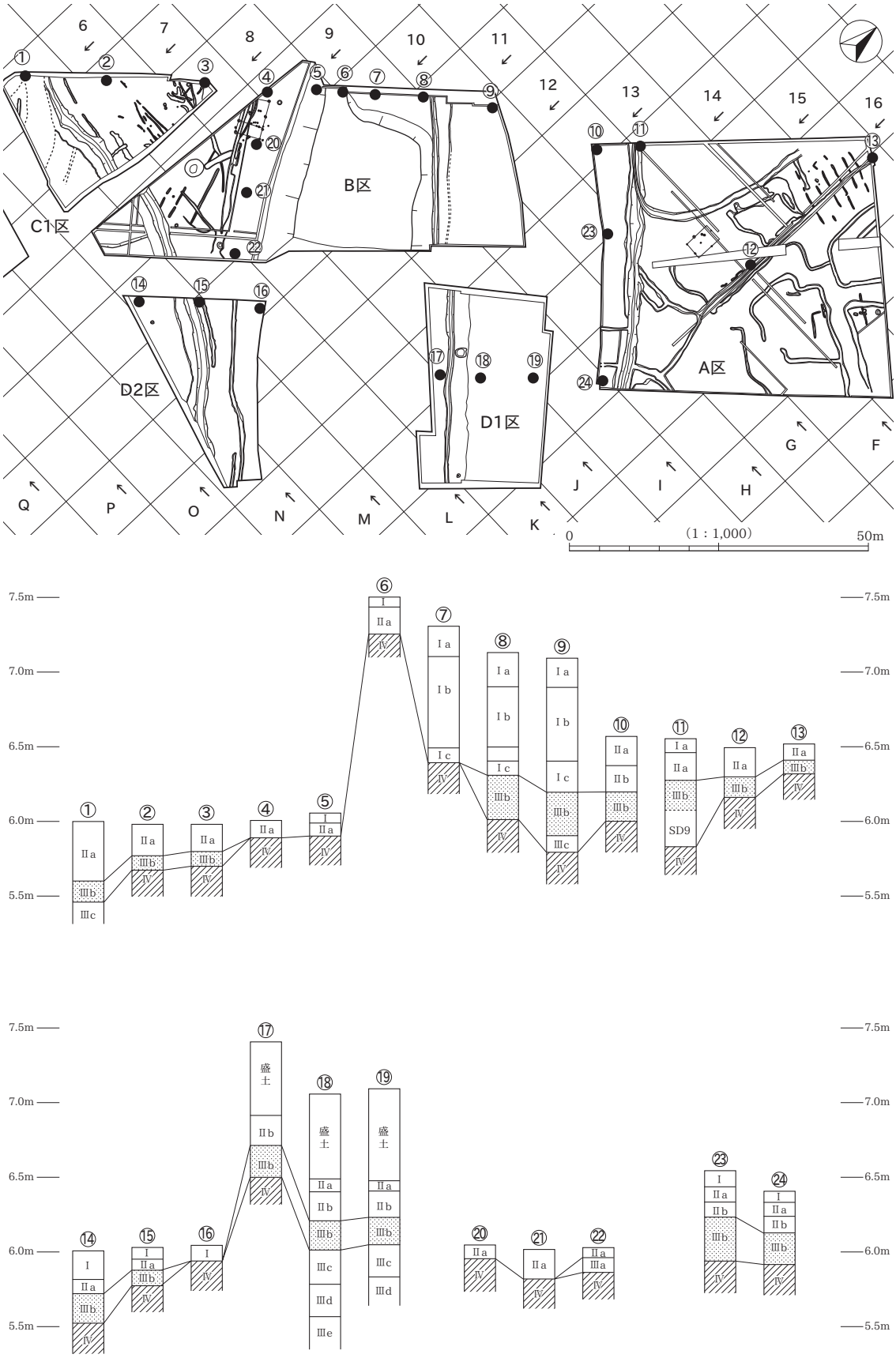
Ⅲｂ層：暗灰色（N3/）粘土。平安時代～中世の土層。溝や水田跡の覆土となる場合が多い。平安時代から中世の遺物が比較的多く出土する。Ⅲａ層とⅢｂ層は酸化・グライ化の度合いにより色調が異なるだけで基本的には同一の土層と考える。

Ⅲｃ層：黒色（7.5YR2/1）粘土。遺物を含まない。沢地に堆積した粘土層。A 区と B 区・D1 区の微高地部では確認できない。

Ⅲｄ層：明黄褐色（2.5Y7/6）粘土。遺物を含まない。沢地に堆積した粘土層。Ⅲｃ層同様､A 区と B 区･D1 区の微高地部では確認できない。

Ⅲｅ層：黒色(7.5YR2/1)粘土。遺物を含まない。沢地に堆積した粘土層。Ⅲｃ層･Ⅲｅ層同様､A 区と B 区･D1 区の微高地部では確認できない。

Ⅳ　層：明黄褐色(2.5Y7/6)粘土。地山層。下部はグライ化して明青灰色(10BG7/1)となる地点もある。B 区・D1 区の微高地部分と他の地区のⅣ層が同一の層序となる確証は無く、異なる土層の可能性もある。



第 10 図　基本層序

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

掘立柱建物 2、井戸 3、土坑 10、溝 63、ピット 25（掘立柱建物を構成するピットを除く）などを検出した。遺構の大半を占めるのが溝で、他の遺構は少ない。掘立柱建物はＡ区に１棟、Ｂ区南西に１棟検出した。井戸はＢ区南西で２基、D1 区で１基検出した。溝には耕地の区画を目的とした溝、水路、畑作溝などがある。遺構の年代は９世紀～ 15 世紀のものが大半を占めるものと考えている。

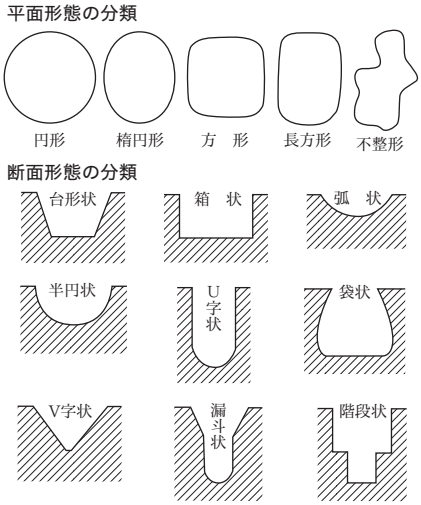
遺構種別の略号は、掘立柱建物：SB、井戸：SE、土坑：SK、ピット：P、不明遺構：SX とした。遺構番号は遺構種類に関わりなく連番としたが、C1 区では大グリッド名を冠した１～７のピットがある（8KP1 ～ 7）。本文・観察表における平面形・断面形・土層堆積状況の記載は、第 11 図に準拠する。以下、地区毎に記述する。

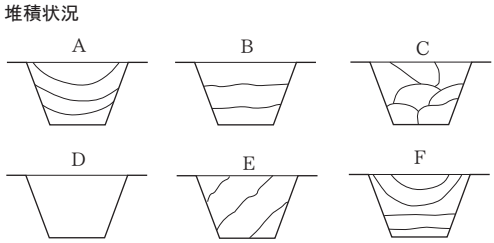
2　各　　説

A　区

SK1（図版４・８・９・24）　18E5 に所在する、東西方向に長い楕円形の土坑。覆土は２層に分かれレンズ状堆積である。断面形は東側が緩やかに立ち上がるのに対し、西側はほぼ垂直に立ち上がる。SD32 と重複し、これより新しい遺構である。土師器無台椀（図版 18　1・2）のほか長釜または鍋の胴部破片が出土した。中世の遺物は出土していない。古代の遺構の可能性が高い。

SK2（図版４・８・９・24）　18E5 に所在する南北方向に長い楕円形の土坑。覆土は２層に分かれレンズ状堆積で、底面は内彎し側壁はやや外反して立ち上がる。SD32 と重複し、これより新しい遺構である。須恵器無台椀・無台杯（図版 18　3・4）などが出土した。中世の遺物は出土していない。古代の遺構の可能性が高い。





レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
水平	複数層が水平に堆積する。
ブロック状	ブロック状に堆積する。
単層	覆土が単一層のもの。
斜位	斜めに堆積するもの。
水平レンズ	覆土下位は水平、上位はレンズ状に堆積する。

第 11 図　遺構の平面・断面形態、堆積状況の分類（春日・坂上ほか 2015 を転用）

SK3（図版４・８・９・24）　18F25・19F21 に所在する円形の土坑。覆土は３層に分かれレンズ状堆積で、断面形は弧状となる。古代の土師器無台椀のほか土師質皿 T1 類（図版 18　5・6）が出土しており、中世の遺構と考える。

SD4（図版４・８・９・25）　17 ～ 19EF に所在する溝。覆土は基本層序Ⅲa 層の単層で、規模は幅約 80cm、深さ約 15cm と幅広で浅い。底面は凹凸が著しい。須恵器有台杯・黒色土器無台椀（図版 18　27・30）などが出土した。明確な中世の遺物は出土しておらず、古代の遺構の可能性が高い。

SD5（図版４・８・９）　18DE、19E に所在する溝。SD4 と並行し、途中で「L」字状に屈曲する。覆土は基本層序Ⅲa 層の単層で、規模は幅約 95cm、深さ約 10cm と SD4 に近い。土師器無台椀・須恵器有台椀(図版 18　19 ～ 21)などが出土した。明確な中世の遺物は出土しておらず、古代の遺構の可能性が高い。

SD6（図版４・８・９・25）　16DF、17CDEF、18DE に所在する溝。途中で二股に分かれる。SD4・5・12 などと方位が直行もしくは一致し、関連する遺構の可能性が高い。覆土は基本層序Ⅲa 層の単層で、規模は幅約 90cm、深さ約 10cm である。図示した遺物は無いが、須恵器無台杯・土師器無台椀・黒色土器無台椀などが出土しており、明確な中世の遺物は出土しておらず、古代の遺構の可能性が高い。

SD7（図版４・８・10・11・26）　16CDEF、17CDEFGH に所在する A 区を斜行して南北方向にのびる溝。南端は SD9 に繋がる。覆土はⅢa 層の単層で、規模は幅約 80cm、深さ約 40cm と、SD4 ～ 6 に比べ深い。SD6・SD10-1 ～ 6 と重複し、これらよりより新しい。後述する SD11・36 と関連する遺構と考える。図示した遺物無いが、土師器長釜もしくは鍋の胴部破片などが出土しており、明確な中世の遺物は出土していない。

SD8（図版４・８・10・11・27）　14F・15EF・16DE に所在する平面が弧状にのびる溝。覆土は暗青灰色粘土の単層、規模は幅約 150cm、深さ約 25cm、底面の凹凸が顕著である。SD9・28 より新しく、古代の土師器・須恵器のほか、土師質土器皿 T1 類（図版 18　24）が出土した。中世の遺構と考える。

SD9，畦畔 18・19（図版４・10・11・26）　SD9 は 14F・15FG・16GH・17H に所在する南東・北西方向の溝。覆土はⅢb 層の単層で、幅約 250cm、深さ約 100cm である。遺物は須恵器甕が出土した。中世の遺物は出土していない。畦畔 18 は SD9 と並走する土手状の高まりであり、畦畔 19 と直行する。また 16H2 付近に土手状の高まりが切れるところがある。畦畔 19 は畦畔 18 に比べ幅が狭い。

SD10-1 ～ 6（図版４・８・９・25）　16・17CD に所在する平行する小型の溝群である。いずれも覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅 20 ～ 40cm、深さ 10cm 前後である。溝の間隔は約 180cm とほぼ等間隔である。細く浅い溝が並行して並ぶことから、畑作溝と考える。SD7 と重複し、これより古い。遺物は出土していない。

SD11・畦畔 14（図版４・10・11・26）　SD11 は 16・17H に所在する東西方向の溝。覆土はⅢb 層の単層で、規模は幅約 120cm、深さ約 20cm と広く浅い。SD9 から分岐し、SD7 に連結する。遺物は出土していない。畦畔 14 は SD11 南側に並走する土手状の高まりである。畦畔 18 に比べると幅が狭く、畦畔 19 に似た幅である。SD11，畦畔 14・19 とも SD7・9 と同時期の遺構と考える。

SD12（図版４・８・９・25）　17GH・18G に所在するゆるく蛇行しながら東西方向にのびる溝。覆土はⅢa 層の単層で、規模は幅約 50cm、深さ約 10cm である。SD4・6 の一部と方向が一致し、関連する遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SD13（図版４・８・９・25）　16DE に所在し、長辺約 11m、短辺約 8m の方形に巡る溝。覆土はⅢa 層の単層で、規模は幅 60 ～ 290cm、深さ約 5cm である。SD7 と重複するが、メインセクションベルト

に伴うトレンチ掘削によって前後関係は不明である。土師器小釜（図版 18　25）が出土した。中世の遺物は出土していない。

SD28（図版 4・8・9）　16D に所在する東西方向にのびる溝。覆土はⅢa 層の単層で、規模は幅 50 ～ 90cm、深さ 5cm と幅広で浅い。SD5・6 の一部の延長線上にあり関連する遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SD29（図版 4・8）　17CD に所在する南北方向の溝。覆土はⅢa 層の単層で、規模は幅約 100cm、深さ約 10cm と幅広で浅い。南側は確認調査時のトレンチによりどこまで伸びているか不明である。SD6 の一部と並行することから、SD6 と関連する遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SK30（図版 4・8・9）　18E5 に所在する楕円形の土坑。覆土は灰白色粘土の単層で断面は弧状となる。遺物は出土していない。

SK31（図版 4・8・9）　18E4・5・9・10 に所在する楕円形の土坑。覆土は灰白色粘土の単層で断面は弧状となる。遺物は出土していない。

SD32（図版 4・8・9）　18DE に所在する東西方向にのびる溝。覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅約 30cm、深さ約 5cm である。SK1・2、SD5 と重複し、これらの遺構よりも古い。SD33・34 と概ね平行し、覆土も類似することから、関連する遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

SD33（図版 4・8・9）　18E に所在する溝。覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅約 30cm、深さ約 10cm である。東西方向にのびるが、途中「L」字状に屈曲する。遺物は出土していない。

SD34（図版 4・8・9）　18E に所在する東西方向にのびる溝。覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅約 30cm、深さ約 10cm である遺物は出土していない。

SD35（図版 4・10・11・26）　16F に所在する南北方向にのびる溝。覆土は灰白色粘土の単層で、規模は幅約 30cm、深さ約 5cm である。遺物は出土していない。

SD36（図版 4・10・11・26）　15・16G に所在する東西方向にのびる溝。覆土はⅢb 層の単層で、規模は幅約 80cm、深さ約 15cm である。SD9 から分岐し SD7 に接する。また途中二股に分岐する。遺物は出土していない。SD7・9 などと関連する遺構と考える

SB39（図版 4・10・11・27）　P20・21・25・26・27 から構成され、15・16F に所在する 2 × 3 間の掘立柱建物。規模は長軸 4.7m、短軸 3.1m である。北東・北西・南東コーナーの柱穴は未検出であるが、これは北西・北東コーナーはメインセクションベルトとこれに伴うトレンチ、南東コーナーは試掘確認調査のトレンチが影響しているものと考える。柱穴の規模は 20 ～ 30cm のものが多く、覆土はいずれも単層で灰白色粘土で、SD10-1 ～ 6 と近似した覆土である。いずれの柱穴から遺物は出土していない。

B 区北東側・D1 区

SD83・畦畔 84（図版 5・7・12・13・28・29）　SD83 は 11GH、12HI、13J、14JK、15KL、16L に所在する北西－南東方向の溝。覆土はレンズ状堆積で、幅約 70cm、深さ約 30cm を測る。重複している遺構は無く、遺物は出土しなかった。水田に関連する水路の可能性が高い。SD9 と平行する。畦畔 84 は SD83 の北東に接し、並走する土手状の高まりであり、水田の畦畔の可能性が高い。

SK88（図版 5・7）　14J9・10・14・15 に所在する略円形の土坑。覆土はⅢb 層の単層で、他の遺構との重複は無い。深さ約 5cm と浅い。土師器小片が 1 点出土した。古代の遺構の可能性が高い。

SE89（図版 5・7）　16K21・22 に所在する楕円形の井戸。覆土は 5 層に分かれレンズ状堆積である。

土師器小片・土師器無台椀などが出土した。古代の遺構の可能性が高い。

B 区南側・C1 区・D2 区

SD40・畦畔 49・226（図版 6・14・15・16・17・33・34・35・36）　SD40 は 6 ～ 9L・10LM・11M、12MN・13N に所在する東西方向にのびる溝。覆土はレンズ状堆積で、規模は幅約 270cm、深さ約 75cm と大きい。出土遺物は土師器・須恵器のほか土師質土器 R1 類・T1 類・R2 類や青磁・白磁などが出土している（図版 18　7 ～ 18）。下限となる遺物は 8・9（土師質皿・小皿 R2 類）で年代は 15 世紀代頃と考える。水田に関連する水路の可能性が高い。畦畔 49 は S 水路 D40 の南側を並走する土手状の高まりで、畦畔 226 は畦畔 49 から派生し規模が小さい。ともに水田の畦畔となる可能性が高い。3 遺構とも相互に関連する遺構で、時期は中世と考える。

SD41（図版 6・14・16・17・31・32・34）　9・10L、11LM、12M、13MN に所在する東西方向の溝。覆土はⅢa 層の単層で、幅約 35cm、深さ約 10cm である。遺物は土師器・須恵器のほか青磁椀・珠洲焼擂鉢（図版 18　22・23）が出土している。SD40 の北側をほぼ並行してのびる。中世の遺構と考える。

SK42（図版 6・14・15・30・31）　9K12・13・17・18 に所在する円形の土坑。直径約 3m と大型だが、深さは約 10cm と浅い。須恵器無台杯（図版 18　26）などが出土した。古代の遺構と考える。

SD43（図版 6・14・15・31・32）　9JK に所在する南北方向にのびる溝。覆土はⅢa 層の単層で、規模は幅約 120cm、深さ約 10cm で、幅広で浅い溝である。SD44・45・47・76 と重複する。SD44・45 の前後関係は不明で一連の遺構の可能性が高い。SD76 より新しいが、SD47 との前後関係は不明。土師器片・須恵器甕片などが出土し、明確に中世とわかる遺物は出土していない。

SD44（図版 6・12・13・14・31・32）　9K に所在する東西方向の溝。覆土はⅢa 層の単層で、規模は幅約 30cm、深さ約 10cm である。SD43 と重複するが、前後関係は不明。SD43 と一連の溝である可能性がある。また、SD45 とは同一の溝である可能性が高い。土師質小皿 R1 類（図版 18　29）が出土した。

SD45（図版 6・14・15・31・32）　9K に所在する東西方向にのびる溝。覆土はⅢa 層の単層で、規模は幅約 60cm、深さ約 10cm の浅い溝である。SD43 と重複するが、前後関係は不明。一連の溝である可能性がある。また、SD44 とは同一の溝である可能性が高い。土師器片・須恵器甕片などが出土し、明確に中世とわかる遺物は出土していない。

SE46（図版 6・17・18・30）　10L4・9 に所在する円形の井戸。覆土は 6 層に区分できレンズ状堆積である。4 層は植物遺体を多く含む土層で、藁灰が多く確認できた。遺物は出土していない。

SD47（図版 6・12・13・14・31・32）　9JK・10K に所在する北西－南東方向にのびる溝。覆土はⅢa 層の単層で、幅約 110cm、深さ 10cm と幅広で浅い。SD44 と重複しているが前後関係は不明。古代の土師器・須恵器が比較的多く出土しているが、小片が多く図化した遺物は無い。古代の遺構と考える。

SE48（図版 6・12・13・30）　9I23・24 に所在する井戸。覆土は 6 層に区分でき、土層堆積状況は水平レンズである。5 層にはイネ科植物の茎が多量に混入していた。平面形は径約 90cm の円形で、土師器・須恵器片が出土し、中世の遺物は出土していない。SB86 に近接し、関連する遺構の可能性が高い。SB86 は中世の掘立柱建物の可能性が高く、関連するとすれば SE48 も中世の遺構となる。

SK50（図版 6・16・17・31）　9L15 に所在する楕円形の土坑。灰色粘土の単層である。底面はやや彎曲し、内彎気味に立ち上がる。遺物は出土していない。覆土の状況から古代の遺構と考える。

P52（図版 6・9・31）　9L3 に所在する円形の小穴。覆土は灰色粘土の単層である。覆土上層から土師

器小釜（図版 18　28）が出土した。古代の遺構と考える。

SD75・76・77・78・79・80（図版 6・14・16・17・31・33）　9KL・10L に所在する溝。いずれも覆土は灰褐色粘土の単層で、幅 20 ～ 40cm、深さ 10cm 弱の細く浅い溝で並行する。細く浅い溝が並行して並ぶことから、畑作溝または畑作に関連する遺構と考える。溝の間隔は 2 ～ 3m と SD10 に比べ広い。SD75・79 は SD41 と重複し、ともに SD41 より古い。また、SD76 は SD43・45 と重複し、これらより古い。いずれの溝からも遺物は出土していない。

SD81（図版 6・12・13・31）　9J・10K に所在する南北方向の溝。覆土はⅢa 層の単層で、幅約 50cm、深さ約 5cm の浅い溝。SD47 と一部重複するが前後関係は不明。遺物は出土していない。

SD82（図版 6・12・13）　9J に所在する南北方向の溝。覆土はⅢa 層の単層で、幅約 30cm、深さ約 5cm の溝。SD47 と重複するが前後関係は不明。遺物は出土していない。

SB86（図版 6・12・13・31）　9IJ に所在する 2 間（以上）× 3 間の掘立柱建物。P53・54・55・56・63・64・69・71 により構成される。いずれのピットも覆土はⅢa 層の単層である。P55 からは珠洲焼壺 R 種の胴部破片が出土した。中世の遺構と考える。

SD100（図版 6・16・17・34）　11・12M に所在する北西－南東方向の溝。覆土はⅢb 層の単層で、幅約 80cm、深さ約 10cm と幅広で浅い。他の遺構との重複は無く、SD40 と並行する。土師器無台椀・長釜または鍋などのほか土師質土器皿 T1 類が出土した。中世の遺構と考える。

SD101（図版 6・16・17・34）　13N に所在する北西－南東方向の溝。覆土はⅡb 層・Ⅲb 層のレンズ状堆積である。幅約 50cm、深さ約 10cm と幅広で浅い。他の遺構との重複は無い。土師器無台椀などが出土し、明確な中世の遺物は出土していないが、SD41 と並行することから中世の遺構の可能性が高い。

SK105（図版 6・16・34）　10M25 に所在する略円形の小型の土坑。覆土はⅢb 層の単層である。遺物は出土していない

SD200（図版 6・14・15・37）　6LM に所在する北西－南東方向の溝。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層で、幅約 60cm、深さ約 10cm と幅広で浅い。他の遺構との重複は無く、SD9・83、畦畔 84 などと並行する。遺物は出土していない。

SD201（図版 6・14・15・36・37）　6・7L に所在する東西方向の溝。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層で、幅約 40cm、深さ約 5cm である。他の遺構との重複は無く、SD202 の延長線上にある。遺物は土師器無台椀もしくは有台椀の口縁部破片が出土している。

SD202（図版 6・14・36）　7L に所在する東西方向の溝。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層で、幅約 50cm、深さ約 20cm である。SD40 と重複し、これより古い。SD201 の延長線上にある。遺物は出土していない。

SD203（図版 6・14・37）　8L に所在する南北方向の溝。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層で、幅約 60cm、深さ約 10cm である。SD40・204 と重複し、SD40 より古く、SD204 との前後関係は不明で、同時期（一連）の可能性もある。SD201・202・204 などに直行する。遺物は出土していない。

SD204（図版 6・14・15・37）　7・8L に所在する東西方向の溝。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層で、幅約 100cm、深さ約 10cm である。SD203 と重複するが、前後関係は不明で、同時期（一連）の可能性もある。SD201・202 などと並行し、SD203 に直行する。土師器小片が出土した。

SD205（図版 6・14・15・35）　8K23・24 に所在する北東－南西方向の溝。覆土はⅢb 層の単層で、幅 74cm 以上、深さ約 10cm である。他の遺構との重複は無い。遺物は土師器無台椀もしくは有台椀が

出土した。古代の遺構と考える。

SD206（図版 6・14・15・36）　7・8K に所在する途切れる溝。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層で、幅約 20cm、深さ約 5cm である。他の遺構との重複は無い。遺物は出土していない。

SD207（図版 6・14・15・37）　7・8K に所在する東西方向の溝。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層で、幅約 25cm、深さ約 10cm である。他の遺構との重複は無い。遺物は出土していない。

SD208・209・210・211・212・213・214・225（図版 6・14・15・35・37）　7・8K に所在する東西方向の溝。いずれも覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層で、幅 20cm 前後、深さ 2 ～ 5cm である。遺物は出土していない。細く浅い溝が並行して並ぶことから、畑作溝あるいは畑作に関連する遺構と考える。溝の間隔は 50cm 前後である。時期は中世の可能性が高い。

SD215（図版 6・14・15・36）　8JK に所在する「T」字状の溝。覆土はⅢb 層の単層で、幅約 70cm、深さ約 5cm である。SD218 と重複し、これより古い。遺物は小破片が多いが、須恵器甕、土師器小皿・無台椀・長釜もしくは鍋などが出土し、中世の遺物は確認できない。古代の遺構と考える。

SD216（図版 6・14・36）　8JK に所在する東西方向の溝。北西方向に細い溝が分岐するが、切り合い関係は確認できなかった。覆土はⅢb 層の単層で、長軸 310cm、短軸 150cm、深さ約 10cm である。SD217・218 と重複し、これらより古い。SD215 と形状が似る。遺物は小破片が多いが、須恵器無台杯・甕、灰釉陶器小片、土師器小皿・無台椀・長釜もしくは鍋などが出土し、中世の遺物は確認できない。古代の遺構と考える。

SD217（図版 6・14・15・36）　8J に所在する東西方向溝。覆土はⅢb 層の単層で、幅約 40cm、深さ約 10cm である。SD216・218 と重複し、SD216 より新しく、SD218 より古い。遺物は小破片が多いが、須恵器壺瓶類、灰釉陶器小片、土師器無台椀・小釜・長釜もしくは鍋などのほか土師質土器皿 R1 類が出土している。SD45 と同一の遺構の可能性が高い。

SD218（図版 6・14・36）　8J に所在する南北方向の溝。覆土はⅢb 層の単層で、幅約 20cm、深さ約 10cm である。SD215・216・217 と重複し、これらよりも新しい。遺物は土師器小片が出土している。

SD219（図版 6・14・15・36・37）　9K3・4 に所在する平面形が弧状になる東西方向の溝。覆土はⅢb 層の単層で、幅約 25cm、深さ約 2cm、ほかの遺構との重複は無い。遺物は土師器小片が出土している。

SK220（図版 6・14・15・36）　8J17 に所在する円形の土坑。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層である。SD221 と重複するが前後関係は不明である。土師器長釜か鍋の胴部破片、土師器小片が出土している。

SD221（図版 6・14・17・36・37）　8J に所在する北西－南東方向の溝。幅約 40cm、深さ約 5cm である。覆土はⅢb 層の単層である。SD45 と同一の溝の可能性がある。土師器長釜か鍋の胴部破片、土師器小片が出土している。

SX222（図版 6・14・17・36）　8J に所在する落ち込み。大半が調査区外となるため形状は不明である。覆土はⅢb 層の単層である。須恵器甕・土師器小釜が出土している。

8K-P2（図版 6・14・17・35・36）8K7 に所在する平面形が円形で、断面形が弧状の遺構。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層である。遺物は出土していない。

8K-P3（図版 6・14・17・35・36）　8K7 に所在する平面形が円形で、断面形が弧状の遺構。覆土はⅣ層のブロックが混じったⅢb 層の単層である。遺物は土師器小片が出土した。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

遺物には土器・陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品がある。出土量は土器・陶磁器が多く、平箱（内法 54cm ×幅 34cm ×深さ 10cm）で 28 箱、金属製品（鉄滓含む）が 3 箱、木器 1 箱、石製品・土製品 0.5 箱である。土器・陶磁器は古代と中世のものが、縄文時代・古墳時代の土器も少量確認できる。土器・陶磁器→土製品→石製品→金属製品→木製品の順に報告する。

2　土器・陶磁器

A　土器・陶磁器の概要

古代の土器・陶器は、小片が多く全形が分かるものが少ない。また、土師器は遺存状況が悪く、調整が確認できないものも多い。そのため土器・陶器の分類は、種類と器種による大まかな分類しか行っていない（第 12 図）。

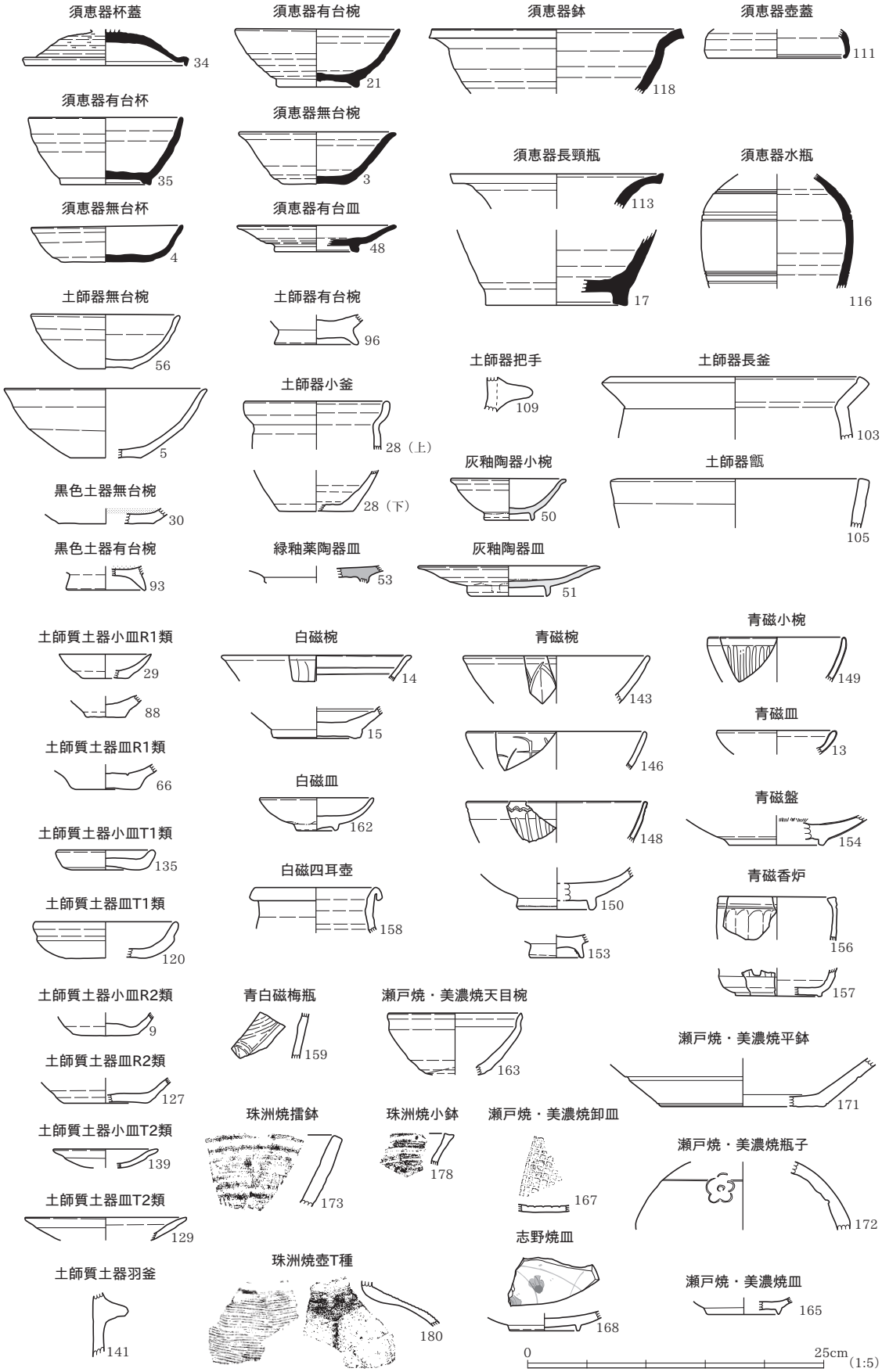
種類と器種には、須恵器杯蓋・有台杯・無台杯・有台椀・無台椀・有台皿・鉢・壺蓋・長頸瓶・水瓶・甕、土師器無台椀・有台椀・小釜・長釜・甑・鍋・把手、黒色土器無台椀・有台椀、灰釉陶器小椀・皿、緑釉陶器皿（須恵器甕・土師器鍋は図示していないが出土している）などが確認できる。須恵器の胎土分類は箕輪遺跡［春日・坂上ほか 2015］に準拠する（第 1 表）。なお、箕輪遺跡で少量確認できた胎土 A 群は小峯遺跡では確認できなかった。

中世の土師質土器皿・小皿については、品田・水澤などの論考［品田 1991・1999ab、水澤 2005］に従い、成形技法･形態などにより、R1 類･R2 類･T1 類･T2 類の 4 種に細分した。ただし、土師質土器皿･小皿 R1 類の中には、古代の土師器無台椀と区別が難しいものが一定量存在する。

その他の土器・陶磁器は第 12 図には種類と器種による大まかな分類を示したが、必要に応じ輸入陶磁器は山本［2000・2010］・上田［1982］・森田［1982］・小野［1982］の分類、瀬戸焼・美濃焼（大窯含む）は藤澤［1993・2008］の分類・編年、珠洲焼は吉岡［1994・2003］の分類・編年を用いる場合がある。

分類	特　　徴
A群	石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の鉱物を多く含む粗い胎土。阿賀北地域の須恵器窯の主体的な胎土。
B群	軟質の白色小粒子を定量含む胎土。きめ細かい B 1 と、砂質の強いB 2 の 2 種がある。有台杯Ⅰ・無台杯にはB 1、その他の器種にはB 2 が主に用いられる。佐渡市（旧佐渡郡羽茂町）小泊窯跡など佐渡市南西部の須恵器窯の胎土。
C 1 群	小型の石英・長石を少量含む比較的精良で粘土質の強い胎土。上越地域では高田平野東側の末野・日向窯跡群で主体的な胎土。他地域では新潟市東部の新津（丘陵）窯跡群、長岡市東部の東山（丘陵）窯跡群でも主体的な胎土である。阿賀北の須恵器窯の一部にも見られる胎土。
C 2 群	砂質もしくはシルト質で均質な胎土。高田平野関川左岸に点在する須恵器窯に主体的にみられる。
C 3 群	海綿骨針を定量含む砂質の強い胎土。長岡市西部の旧和島村から三島郡出雲崎町にかけて分布する西古志窯跡群や渋海川流域に点在する須恵器窯に主体的にみられる。

第 1 表　須恵器胎土の分類



第 12 図　土器・陶磁器の分類

区分	種類	器種	残存率 /36	比率(残存率)	破片数
食膳具	須恵器	杯蓋	8.0	0.5%	5
	須恵器	無台杯	154.0	8.8%	187
	須恵器	無台杯？	−	−	2
	須恵器	無台椀	41.5	2.4%	11
	須恵器	有×無台椀	96.0	5.5%	79
	須恵器	有台皿	8.0	0.5%	2
	須恵器	有台杯	23.0	1.3%	47
	須恵器	有台椀	6.0	0.3%	11
	須恵器	有台椀×皿	−	−	1
	須恵器	鉢	2.0	0.1%	4
	土師器	無台杯	3.0	0.2%	15
	土師器	無台椀	29.0	1.7%	1,195
	土師器	有×無台椀	683.0	39.2%	448
	土師器	有台鉢	−	−	3
	土師器	盤	1.0	0.1%	1
	土師器	有台椀	21.0	1.2%	46
	土師器	台杯鉢	−	−	3
	黒色土器	鉢	−	−	3
	黒色土器	無台杯	−	−	5
	黒色土器	無台椀	−	−	67
	黒色土器	有×無台杯	−	−	2
	黒色土器	有×無台椀	63.0	3.6%	214
	黒色土器	有台椀	3.0	0.2%	13
	灰釉陶器	小椀	10.0	0.6%	3
	灰釉陶器	皿	5.0	0.3%	7
	灰釉陶器	皿×椀	0.0		2
	灰釉陶器	椀	21.0	1.2%	12
	灰釉陶器	椀×皿	1.0	0.1%	26
	灰釉陶器	壺瓶類	−	−	7
	緑釉陶器	皿	−	−	3
	食膳具小計		1,178.5	67.6%	2,424
貯蔵具	須恵器	長頸瓶	4.0	0.2%	32
	須恵器	壺瓶類	3.0	0.2%	210
	須恵器	水瓶	−	−	13
	須恵器	横瓶	−	−	27
	須恵器	甕	1.0	0.1%	335
	貯蔵具小計		8.0	0.5%	617
煮炊具	土師器	小釜	151.0	8.7%	249
	土師器	長釜	15.0	0.9%	23
	土師器	鍋	−	−	1
	土師器	長釜×鍋	391.0	22.4%	1,946
	土師器	把手付煮炊具	−	−	2
	土師器	非ロクロ釜類	0.0	−	1
	土師器	甑	−	−	3
	煮炊具小計		557.0	31.9%	2,225
その他	土師器	小片	−	−	11,652
	土師器	小型	−	−	6
	黒色土器	小片	−	−	1
	黒色土器	小片	−	−	25
	須恵器	小片	−	−	14
	その他小計		−	−	11,698
総　計			1,743.5	100%	16,964

区分	種類	器種	残存率 /36	破片数	比率(破片数)
輸入陶磁器	白磁	椀	−	5	1.0%
	白磁	皿	7.0	9	1.9%
	白磁	杯	−	2	0.4%
	白磁	皿×杯	−	1	0.2%
	白磁	蓋？	−	1	0.2%
	白磁	四耳壺	8.0	1	0.2%
	白磁	小片	−	2	0.4%
	青白磁	梅瓶	−	1	0.2%
	青磁	椀	32.0	27	5.6%
	青磁	皿	7.0	1	0.2%
	青磁	杯	1.5	1	0.2%
	青磁	盤	−	3	0.6%
	青磁	香炉	11.5	4	0.8%
	青磁	小片	−	3	0.6%
	青花	皿	−	3	0.6%
	青花	椀	−	5	1.0%
	青磁	椀×小椀	−	1	0.2%
	輸入陶磁器小計		67.0	70	14.6%
瀬戸焼・美濃焼	瀬戸美濃	平椀	−	1	0.2%
	瀬戸美濃	天目椀	12.0	7	1.5%
	瀬戸美濃	皿	−	2	0.4%
	瀬戸美濃	鉢	−	2	0.4%
	瀬戸美濃	瓶子	−	3	0.6%
	瀬戸美濃	おろし皿	−	1	0.2%
	瀬戸美濃	平鉢	−	1	0.2%
	瀬戸美濃	燭台	12.0	1	0.2%
	志野	皿	0.0	1	0.2%
	瀬戸焼・美濃焼小計		24.0	19	4.0%
瓷器系陶器	瓷器系陶器	甕	0.0	1	0.2%
	瓷器系陶器	甕×壺	−	18	3.8%
	瓷器系陶器	壺	1.0	3	0.6%
	瓷器系陶器小計		1.0	22	4.6%
珠洲焼	珠洲焼	甕	−	8	1.7%
	珠洲焼	壺Ｋ	−	1	0.2%
	珠洲焼	壺Ｒ	−	13	2.7%
	珠洲焼	壺Ｔ	−	6	1.3%
	珠洲焼	甕×壺Ｔ	−	65	13.6%
	珠洲焼	小鉢	4.0	2	0.4%
	珠洲焼	擂鉢	14.5	38	7.9%
	珠洲焼	小片	−	1	0.2%
	珠洲焼小計		18.5	134	28.0%
瓦器	瓦器	鉢など	−	5	1.0%
	瓦器	風炉	−	2	0.4%
	瓦器小計		0.0	7	1.5%
土師質土器	土師質	小皿	89.5	122	25.5%
	土師質	皿	143.0	102	21.3%
	土師質	皿×小皿	−	2	0.4%
	土師器	羽釜	−	1	0.2%
	土師質土器小計		232.5	227	47.4%
総　計			343.0	479	100%

項目	残存率	比率(残存率)	破片数
須恵器食膳具	338.5	28.7%	349
土師器食膳具	737.0	62.5%	1,711
黒色土器食膳具	66.0	5.6%	304
施釉陶磁器食膳具	37.0	3.1%	60
食膳具合計	1,178.5	100%	2,424

項目	残存率 /36	比率(残存率)	破片数
食膳具	292.0	85.1%	295
貯蔵具	9.0	2.6%	120
煮炊具	−	−	1
調理具	18.5	5.4%	44
その他	23.5	6.9%	19
総　計	343.0	100%	479

第２表　古代・中世の土器陶磁器

B　各　　説

SK1（図版 18　1・2）　1・2 はともに土師器無台椀である。調整は内外面ロクロナデで、底部外面は回転糸切りである。

SK2（図版 18　3・4）　3 は須恵器無台椀で調整は内外面ロクロナデで、底部外面は回転糸切りである。4 は須恵器無台杯で調整は内外面ロクロナデで、底部外面は回転篦切りである。

SK3（図版 5・6）　5 は口径 17.0cm となる大型の土師器無台椀である。調整は内外面ロクロナデで、底部外面は回転糸切りで、ヘラミガキやロクロケズリなどの再調整は行われていない。6 は土師質土器皿 T1 類である。口縁端部が丸く、器壁は比較的薄い。

SD40（図版 18　7 ～ 18）　7 ～ 11 は土師質土器で、7 は皿 T1 類、8 は皿 R2 類、9 は小皿 R2 類、10・11 は皿 R1 類である。12 は土師器有台椀。10・11 と近接した時期の可能性が高い。

13 ～ 15 は輸入陶磁器である。13 は青磁皿で内外面とも無文である。8・9 などの土師質土器皿・小皿 R2 類と近接した時期となるものと考えている。14・15 は白磁椀で 14 は山本分類[山本 2000]のⅤ -4 類、15 はⅣ類であり、10 ～ 12 と近接した時期の可能性が高い。

16 ～ 18 は須恵器壺瓶類の底部である。16 は小型で高台が無い。胎土は C2 群である。17・18 は長頸瓶の底部である。胎土はＢ群である。

SD5（図版 18　19 ～ 21）　19・20 は土師器無台椀の底部破片である。底径は 19 が 4.0cm、20 が 5.2cm と比較的小さい。21 は須恵器有台椀で断面三角形の高台が付く。底部切り離しは回転篦切りで、胎土はＢ群である。

SD41（図版 18　22・23）　22 は青磁椀の底部破片で、上田分類［1982］のＢⅡb 類である。23 は珠洲焼擂鉢の口縁部破片で吉岡編年［1994］のⅤ期のものと考える。

その他の遺構（図版 18　24 ～ 33）　24 は SD8 出土の土師質土器皿 T1 類である。25 は SD13 出土の土師器小釜の底部破片である。26 は SK42 出土の須恵器無台杯で、口縁部の外傾度合いが大きい。胎土はＢ群である。27・30 は SD4 からの出土で、27 は須恵器有台杯である。底径が小さく、胎土はＢ群である。30 は黒色土器無台椀である。ロクロ成形で底部は厚手である。内面はヘラミガキを行う。底部外面の調整は摩耗のため不明である。28 は P52 から出土した土師器小釜である。内外面ともロクロナデで、底部は回転糸切りである。口縁端部は上方に屈曲する。カキメやヘラケズリなどの調整は確認できない。29 は SD44 から出土した土師質土器小皿 R1 類。33 は SD47 出土の須恵器有台椀である。胎土はＢ群で、21 とよく似た器形になるものと考える。

31・32 は土師質土器皿 T1 類である。31 は「9L6 溝」、32 は「17E 溝」の註記がある。31 は SD40 の遺物の可能性が高い。32 は SD6・7・13 などが考えられる。

包含層ほか（図版 18 ～ 21　34 ～ 183）　34 ～ 48・118 は須恵器食膳具である。34 は杯蓋で、頂部はロクロケズリを行う。胎土は C2 群である。35 ～ 39 は有台杯で、いずれも胎土はＢ群である。底径が比較的大きい 35 と小さい 36 ～ 39 がある。40 ～ 42 は胎土Ｂ群の無台杯で・底部切り離し技法はいずれも回転篦切りである。40・41 は底部がやや突出する。42 は 40・41 に比べ小型で底部は平底である。43 は無台椀、44 ～ 47 は有台椀、48 は有台皿でいずれも胎土はＢ群で、底部切り離し技法がわかるものはすべて回転篦切りである。118 は須恵器鉢で胎土はＢ群である。

49 ～ 52 は灰釉陶器で、49・50 は小椀、51 は皿、52 は椀または皿である。49・50 は内底面全面に

灰釉があるが、51・52 は内底面に灰釉が無い。高台の形態は 49・52 が方形、50・51 が三日月状となる。胎土・色調は、51 がやや灰色味を帯びた砂質が強い胎土で、49・50・51 が乳白色で精良な胎土である。53 は緑釉陶器皿で、高台は貼付けの輪高台である。胎土は酸化軟質で、釉調は淡い緑色である。

54 ～ 101 は土師器・黒色土器・土師質土器 R1 類の食膳具である。54・55 は底径 6.5cm 以上となる大型の土師器無台椀で、図版 18-5 と比較すると口縁部の外傾度が大きい。65 ～ 71 は土師質土器皿 R1 類である。いずれも底部がやや突出する。胎土は砂粒を多く含むものが多い。72 ～ 74 は土師質土器小皿 R1 類、75・78 ～ 89 も土師質土器小皿 R1 類の可能性が高いと考えた。76・77 は土師器無台椀の可能性が高いと考えたものであるが、他の器種の可能性もある。90 ～ 93 は黒色土器有台椀、94 も黒色土器有台椀の可能性が高い。形態は一様ではなく、底部が薄く底径が大きい 90・91、底部が薄く底径が小さい 92・93、底部が厚く底径が小さい 94 がある。95 ～ 101 は土師器有台椀。黒色土器と同様に、底部が薄く底径が大きい 95、底部が薄く底径が小さい 98、底部が厚く底径が大きい 96・97 があり、このほか底部が厚く底径が小さい 99 ～ 101 がある。

102 ～ 110 は土師器煮炊具である。102 ～ 104 は土師器長釜で、口縁端部の形態は面を持つもの（101）、わずかに内屈するもの（102）、明瞭に内屈するもの（104）がある。106 ～ 108 は小釜で、106・107 は口縁部から胴部、108 は底部である。106 は口縁がわずかに内彎し端部は丸い。107 は口縁が直線的で端部は面を持つ。105 は口縁部から胴部がわずかに外傾する。甑と考えたが他の器種の可能性もある。内外面ともロクロナデである。109・110 は把手で、鍋や甑の把手となる可能性が高い。

111 ～ 117 は須恵器貯蔵具である。111 は壺蓋、112 ～ 115・117 は長頸瓶、116 は水瓶である。胎土は 112 が C2 群、111・113 ～ 117 は B 群である。

119 ～ 131 は土師質土器皿で、119 ～ 126 は T1 類、127 は R2 類、128 ～ 131 は T2 類である。130・131 は 128・129 に比べやや小振りである。132 ～ 140 は土師質土器小皿。132 ～ 135 は T1 類、136・137 は R2 類、138 ～ 140 は T2 類である。

142 ～ 162 は輸入陶磁器である。142 ～ 153 は青磁椀・小椀であり、山本分類［2000］の龍泉窯Ⅰ類（144）、同Ⅱa 類（142）、同Ⅱb 類（143）、上田分類［1982］の C 類（145・146）、BⅣ類（147）、BⅣ' 類（148・149）などが出土している。154 は青磁盤で山本分類の龍泉窯Ⅲ類と考える。155 ～ 157 は香炉で、156・157 は同一個体の可能性が高い。158 は白磁四耳壺である。磁胎でやや灰色を帯びた釉薬がかかる。山本分類のⅢ類である。159 は青白磁梅瓶の胴部破片である。160 は白磁杯、161・162 は白磁皿である。160 ～ 162 はいずれも森田分類［1982］の D 群である。160 の外面には墨書がある。

163 ～ 167・171・172 は瀬戸焼または美濃焼である。163・164 は天目椀、165 は丸皿・稜皿などの皿、166 は燭台、167 は卸皿、171 は平鉢、172 は瓶子である。163 ～ 165 は大窯期まで下る可能性がある。他のものは後期を中心とする時期のものと考える。

173 ～ 178・180 は珠洲焼。173 ～ 178 は擂鉢または小鉢である。174・175 は吉岡編年［1994］のⅡ～Ⅲ期、173・178 はⅣ期、176・177 はⅤ期と考える。180 は壺 T 種の胴部上半の破片であるが、口縁部が無く詳細な時期は不明である。

168 は志野焼皿。内底面には鉄絵による草花文がある。年代は 16 世紀末頃と考える。169・170・179 は肥前系陶器。169 は蓋、170 は小皿、179 は擂鉢である。年代は 16 世紀末から 17 世紀前半ころのものと考える。

181 は須恵器技法を用いない釜類もしくは壺の底部破片、182 は須恵器技法を用いない小型土器もし

くは杯などの底部破片と考える。183 は縄文土器深鉢の口縁部破片で LR 縄文が施文される。詳細な時期は不明である。

3　土製品・石製品・金属製品・木製品

土　製　品（図版 21　184 ～ 193）

184 は雨垂れ形の土師質の土製品である。中央に孔があるが貫通しない。紡錘車または土錘の未成品の可能性がある。185 は陶錘、186 ～ 189 は土師質の土錘である。同一個体の可能性がある。

190 ～ 192 は転用研削具で、190 は須恵器甕の胴部破片、191・192 は珠洲焼甕または壺 T 種の胴部破片を素地とする。

193 は平面形が円形で、複数の円孔を持つ扁平な土製品になるものと推測する。酸化硬質の焼き上がりで近世以降の遺物の可能性もある。

石　製　品（図版 21　194 ～ 199）

194 は石帯の巡方で石材は蛇紋岩である。

195 ～ 197 は砥石。195 は上部に貫通する小孔がある。石材は 195 が砂岩、196 が凝灰岩、197 が流紋岩である。

198 は打ち欠き石錘で縄文時代の石器と考える。199 は敲石で側面に敲打跡が残る。198・199 の石材は 2 点とも安山岩である。

金　属　製　品（図版 21　200 ～ 207）

中世以前の銭貨を 8 点図示した。最も古いものは 202（咸平元寶）で初鋳は 998 年（北宋）、最も新しいものは 207（朝鮮通寶）で初鋳は 1423 年（朝鮮王朝）である。このほか金属製品には寛永通寶や近世（以降）の煙管・笄・鉄滓などが出土している。

鉄滓は 3,318g 出土した。鉄滓が比較的多く出土したグリッドは、10K（197g）、10L（102g）、11L（217g）、12N（337g）、18E（394g）などで、土坑や掘立柱建物跡が存在するグリッドから比較的多く出土する傾向がある。

木　製　品（図版 21　208 ～ 211）

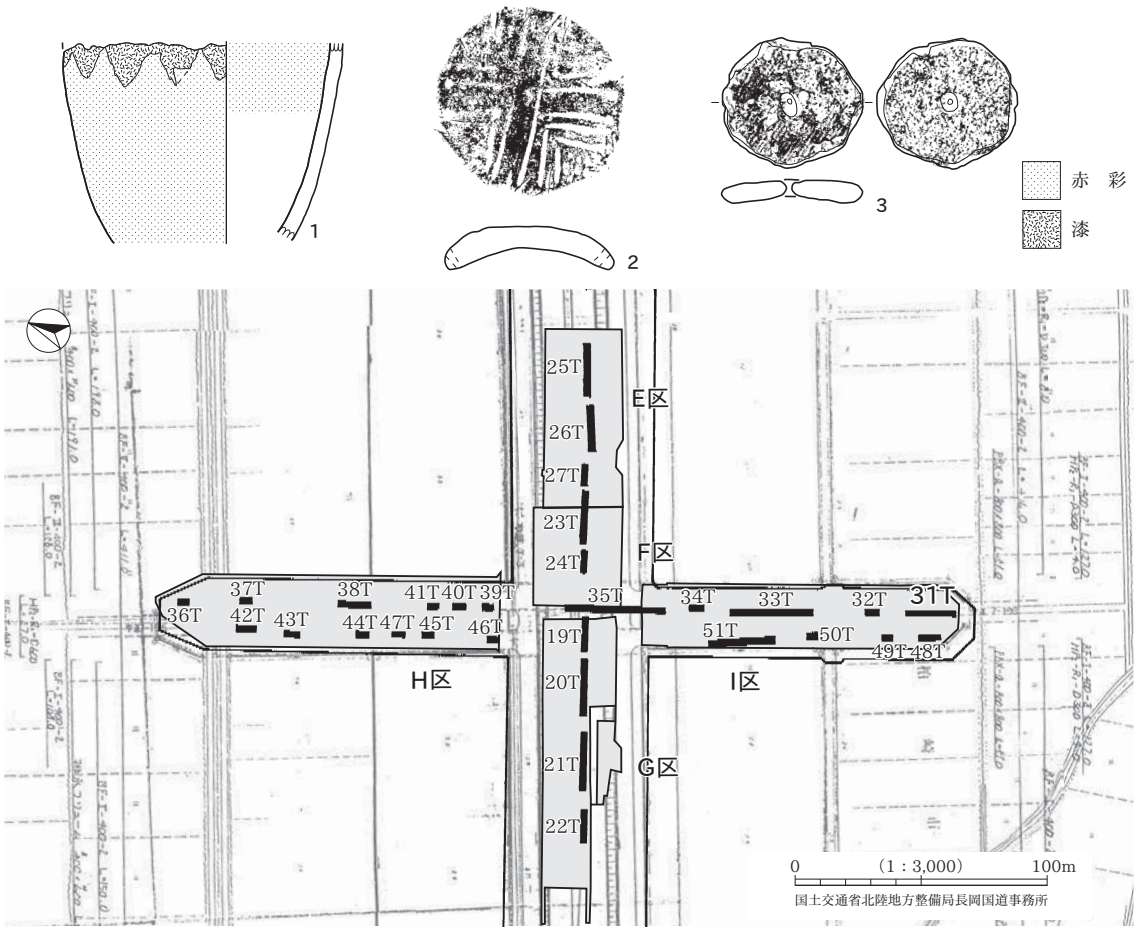
208・209 は連歯下駄。208 は遺存状況が悪く、器面の大半が摩耗している。木取りは柾目である。209 は歯の下端付近に鋸痕が残っており、近世以降の可能性が高い。210 は直径約 20cm になる 7 円形板で、木取りは柾目である。211 は漆器椀の小片で、底部は薄く高台は細いものと推測できる。内面は赤色漆、外面は黒色漆で内外面とも無文である。

4　試掘確認調査出土遺物

第 13 図には 1995（平成 7）年に一般国道 8 号柏崎バイパス建設に関連して実施した試掘確認調査の出土遺物を示した（1 ～ 3）。1995（平成 7）年の試掘確認調査では、対象面積 80,000m^2（箕輪遺跡［高橋ほか

2002、春日・坂上ほか2015］を含む）に対し79カ所のトレンチを任意に設定し、2,000m^{2}の調査を行い、平箱（内法54cm×幅34cm×深さ10cm）6箱の遺物が出土した。特に31トレンチから多くの遺物が出土している。31トレンチは箕輪遺跡のⅠ区にあたり、1998（平成10）年度と2000（平成12）年に本発掘調査が行われており、2001（平成13）年度に発掘調査報告書が刊行されている［高橋ほか2002］。箕輪遺跡で使用したグリッドではK4t・y、K5p・u周辺に設定されたトレンチである。本発掘調査では弥生時代中期の土器・石器（石器には玉作遺物含む）が比較的まとまって出土した地区である。

1～3は31トレンチから出土した土器である。1は壺の口縁～頸部で内外面とも赤彩を行う。外面上端付近には漆により鋸歯状の文様を表す。2は蓋で外面に箆描き文様がある。3は紡錘車である。内外面ハケメ調整の釜または壺の胴部破片を円形に加工し、中央を穿孔する。年代は2･3が弥生時代中期である。1は栗林式の土器の可能性があり、弥生時代中期のものと考えたい。



第13図　試掘確認調査31トレンチの位置と出土遺物

第Ⅵ章　自然科学分析

1　プラント・オパール分析

は　じ　め　に

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原［1976］や藤原・佐々木［1978］など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている［藤原 1984］。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。小峯遺跡においては水田とみられる遺構の確認、および各調査区の基本土層における水田層の検討を目的にプラント・オパール分析を行い、その結果・考察を以下に示す。

また一部同試料を用いて花粉分析を行い、その結果・考察を合わせて遺跡周辺の植生変遷についても検討した。

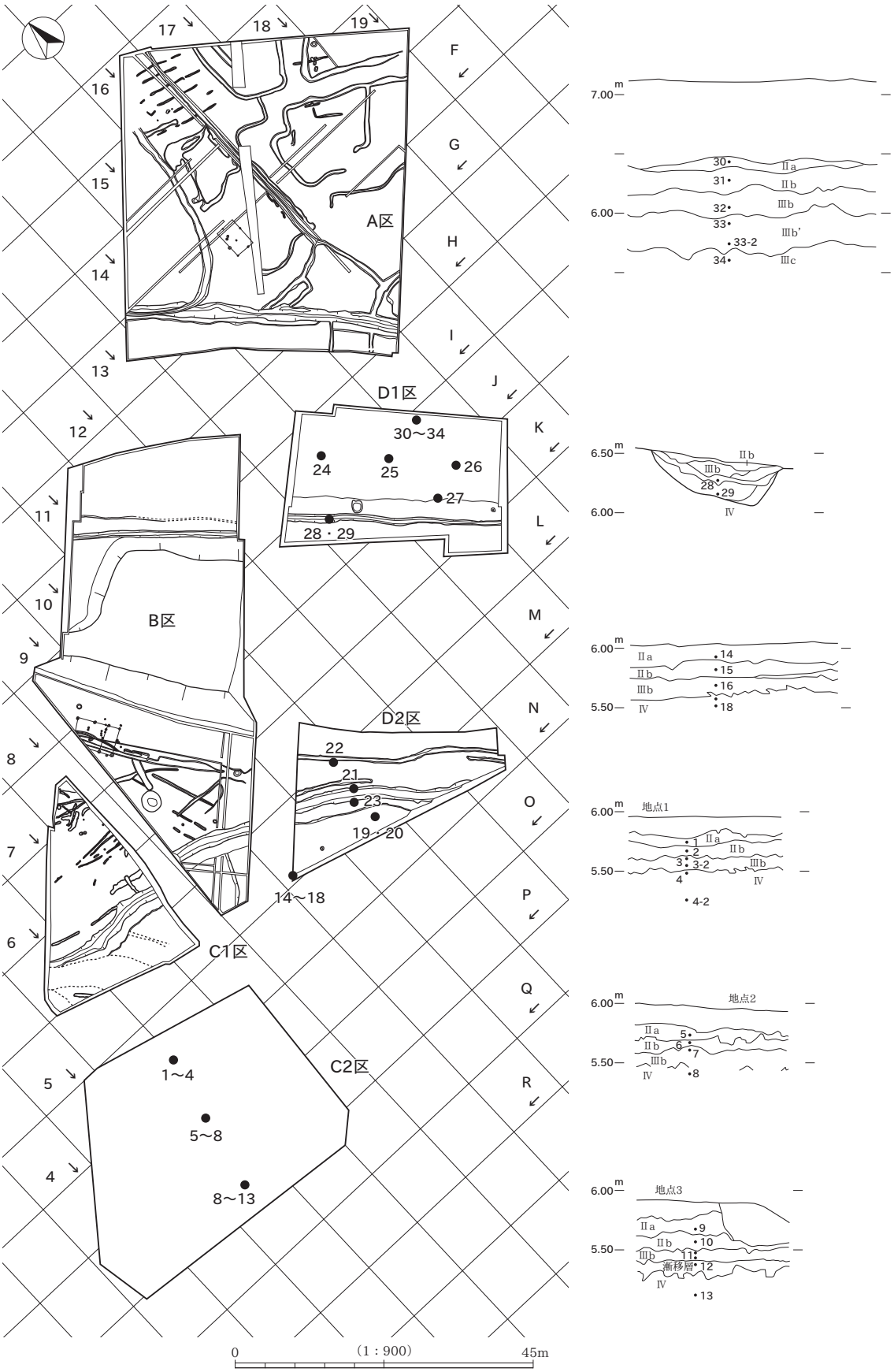
試　　料（第 14 図）

分析用試料はC2 区の基本土層 3 地点、D1 区・D2 区の基本土層および遺構面・溝覆土より採取した 38 試料である。小峯遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層からなり、各層について、最上部Ⅰ層は表土・盛土、Ⅱa 層は青灰色の砂質粘土で、近年の水田耕作土である。Ⅱb 層は暗青灰色の砂質粘土で、炭片が点在しており、赤褐色の酸化鉄が根状に多く集積している。このⅡb 層はⅡa 層と同様に近年の水田耕作土である。Ⅲb 層は暗灰～黒灰色粘土で、赤褐色酸化鉄の集積が縦方向に上部ほど発達している。このⅢb 層は平安期の水田跡・溝覆土と考えられている。Ⅲb' 層は黒灰色の砂質粘土である。Ⅲc 層は黒色の泥炭質粘土で、平安期の沢の堆積物とみられている。Ⅳ層は地山である。上部は明黄褐色の粘土で、赤褐色酸化鉄の集積が縦方向に発達しており、下部はは明青灰色の粘土で、D1 区・D2 区では黒灰色粘土塊が点在しており、レキや植物遺体も認められる。また、C2 区の地点 3 ではⅣ層からⅢb 層にいたる漸移層が認められ、層相は暗灰色粘土で、Ⅳ層が塊状・火炎状・斑状に混入している。

こうした土層より、C2 区ではⅡa 層～Ⅳ層について 3 地点の 16 試料（No.1 ～ 3・3-2・4・4-2・5 ～ 11・11-2・12・13）を採取した。D-1 区では基本土層地点からⅡa 層～Ⅲc 層について 6 試料（No.30 ～ 33･33-2･34）と、SD83 覆土の 2 試料（No.28･29）、Ⅲb 層上面の 4 地点（No.24 ～ 27）を採取した。D-2 区では基本土層地点からⅡa 層～Ⅳ層について 5 試料（No.14 ～ 18）と SD40・畦畔 49 の南側に広がる水田と推定される区域のⅣ層上面（No.19）およびその覆土（No.20）、SD100 溝覆土（No.21）、SD41 溝覆土（No.22）、SD40 溝覆土（No.23）を採取し、総計 38 試料を得た。

分　析　方　法

上記した 3 地区 38 試料について下記の方法にしたがってプラント・オパール分析を行った。秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 40 μ m）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機


A区
B区
C1区
C2区
D1区
D2区
30～34
24
25
26
27
28・29
21
22
23
19～20
14～18
1～4
5～8
8～13
地点1
地点2
地点3
7.00
6.00
6.50
5.50
Ⅱa
Ⅱb
Ⅲb
Ⅲb'
Ⅲc
Ⅳ
漸移層
0
(1：900)
45m

第 14 図　試料採取地点

物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 10 μm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

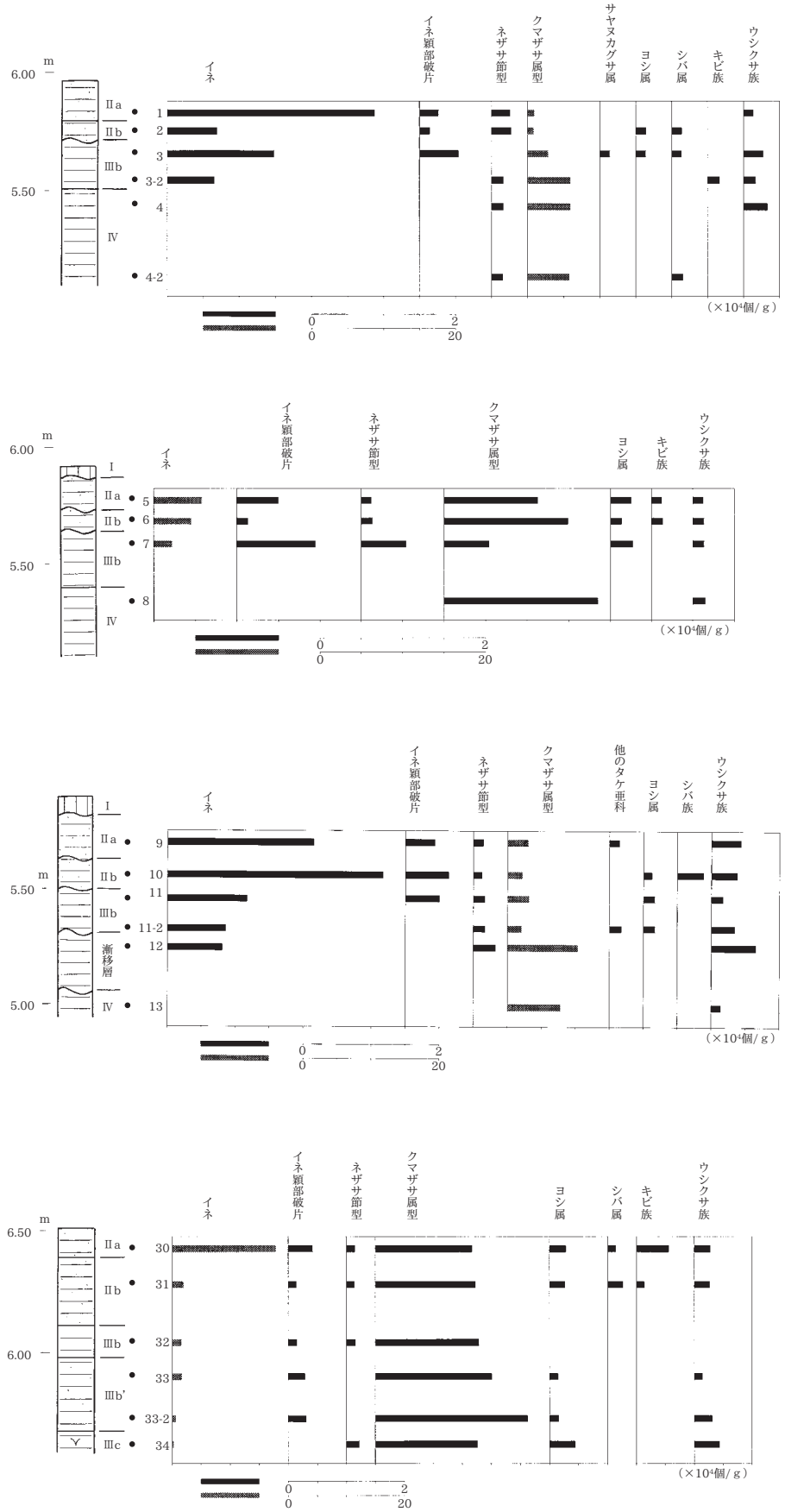
分　析　結　果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め（第 3 表）、それらの分布を第 15 図（試料 1 ～ 13（3-2・4-2・11-2 含む）・24 ～ 34（33-2 含む）C2 区・D1 区の採取資料）、第 16 図（試料 14 ～ 23：D2 区の試料）に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料 1g 当りの検出個数である。なお、イネの穎部（籾殻）の珪酸体がバラバラの状態で観察されたことから、他のプラント・オパール同様の考え方でその破片数を計数して図表に示した。よって、その数値はあくまでも破片の数であり、籾殻数ではなく、現時点では参考程度にみて頂きたい。

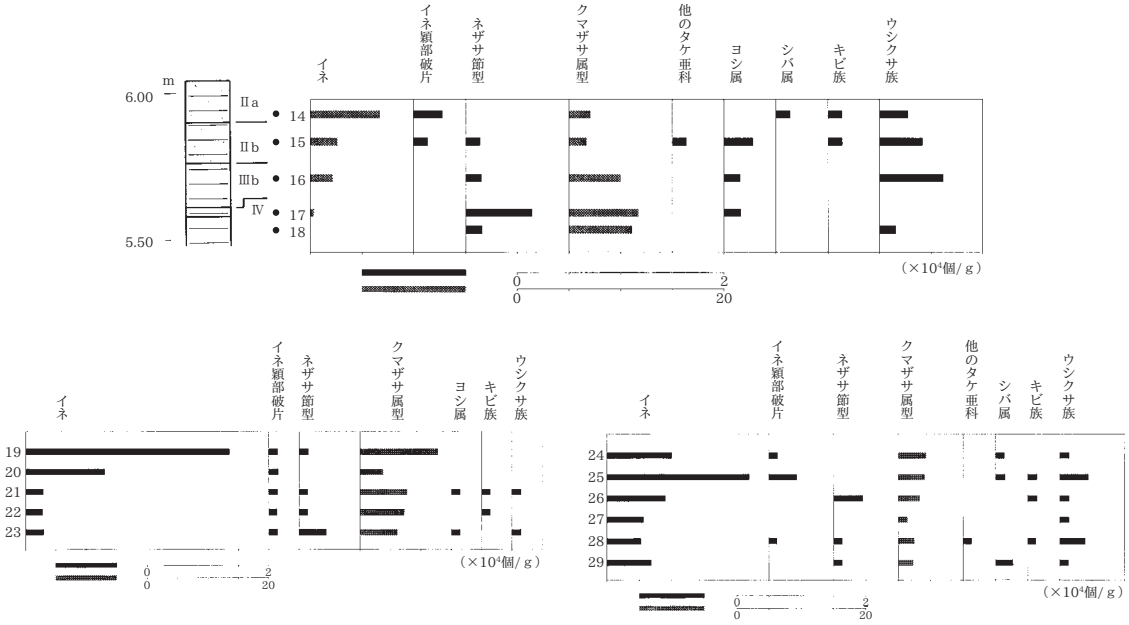
C2 区（第 15 図　試料 1 ～ 13）：3 地点ともⅤ層試料を除き多くのイネのプラント・オパールが検出され、おおむね上部に向かい増加する傾向が認められる。個数的には地点 2 の最上部試料 No.5 が最も多く約 60,000 個に達しており、少ない試料でも 5,000 を越えている。イネの穎部破片は 3 地点ともⅢb 層の上

試料番号	調査区	層位	イネ（個 /g）	イネ穎部破片（個 /g）	ネザサ節型（個 /g）	クマザサ属型（個 /g）	他のタケ亜科（個 /g）	サヤヌカグサ属（個 /g）	ヨシ属（個 /g）	シバ属（個 /g）	キビ族（個 /g）	ウシクサ族（個 /g）	不明
1	C2 区地点 1	Ⅱa 層	28,700	2,600	2,600	9,100	0	0	0	0	1,300	6,500
2		Ⅱb 層	5,500	1,100	2,200	6,700	0	0	1,100	1,100	0	0	3,300
3		Ⅲb 層上部	14,800	5,400	0	28,300	0	1,300	1,300	1,300	0	2,700	12,100
3-2		Ⅲb 層下部	6,600	0	1,600	59,100	0	0	0	0	1,600	1,600	11,500
4		Ⅳ層上部	0	0	1,600	58,900	0	0	0	0	0	3,300	3,300
4-2		Ⅳ層	0	0	1,600	57,400	0	0	0	1,600	0	0	0
5	C2 区地点 2	Ⅱa 層	57,600	5,000	1,300	11,300	0	0	2,500	0	1,300	1,300	10,000
6		Ⅱb 層	44,600	1,400	1,400	14,900	1,400	0	1,400	0	1,400	1,400	6,800
7		Ⅲb 層	21,600	9,500	5,400	5,400	0	0	2,700	0	0	1,400	1,400
8		Ⅳ層	0	0	0	18,500	0	0	0	0	0	1,500	1,500
9	C2 区地点 3	Ⅱa 層	21,500	4,300	1,400	30,200	1,400	0	0	0	0	4,300	8,600
10		Ⅱb 層	31,700	6,300	1,300	21,600	0	0	1,300	3,800	0	3,800	7,600
11		Ⅲb 層上部	11,700	5,000	1,700	31,700	0	0	1,700	0	0	1,700	1,700
11-2		Ⅲb 層下部	8,600	0	1,700	20,500	1,700	0	1,700	0	0	3,400	6,800
12		漸移層	8,100	0	3,200	103,800	0	0	0	0	0	6,500	3,200
13		Ⅳ層	0	0	0	78,100	0	0	0	0	0	1,400	0
14	D2 区基本土層	Ⅱa 層	67,300	2,700	0	20,600	0	0	0	1,400	1,400	2,700	8,200
15		Ⅱb 層	26,300	1,400	1,400	16,600	1,400	0	2,800	0	1,400	4,200	6,900
16		Ⅲb 層	21,600	0	1,500	49,400	0	0	1,500	0	0	6,200	4,600
17		Ⅳ層	3,200	0	6,400	67,100	0	0	1,600	0	0	0	1,600
18		Ⅳ層	0	0	1,600	60,600	0	0	0	0	0	1,600	3,200
19	D2 区区画 103	水田面（Ⅲb 層上面）	33,500	1,500	1,500	127,900	0	0	0	0	0	0	22,800
20		水田覆土	13,000	0	0	37,500	0	0	0	0	0	0	4,900
21	D2 区 SD100	Ⅲb 層	2,900	1,500	1,500	76,900	0	0	1,500	0	1,500	1,500	2,900
22	D2 区 SD41	Ⅲb 層	2,800	1,400	1,400	72,600	0	0	0	0	1,400	0	7,000
23	D2 区 SD40	1 層（Ⅲb 層の下位）	3,000	1,500	4,500	60,900	0	0	1,500	0	0	1,500	5,900
24	D1 区ポイント 3	水田面（Ⅲb 層上面）	10,000	1,400	0	42,700	0	0	1,400	0	0	1,400	4,300
25	D1 区ポイント 4	水田面（Ⅲb 層上面）	22,000	4,400	0	41,000	0	0	1,500	0	1,500	4,400	4,400
26	D1 区ポイント 2	水田面（Ⅲb 層上面）	9,000	0	4,500	33,100	0	0	0	0	1,500	1,500	12,000
27	D1 区ポイント 1	水田面（Ⅲb 層上面）	5,700	0	0	14,200	0	0	0	0	0	1,400	2,800
28	D1 区 SD83	Ⅲb 層崩落土？	5,200	1,300	1,300	24,800	1,300	0	0	0	1,300	3,900	9,100
29		Ⅳ層崩落土 + Ⅲb 層	6,800	0	1,400	23,100	0	0	2,700	0	0	1,400	4,100
30	D1 区基本土層	Ⅱa 層	178,200	4,200	1,400	16,700	0	0	2,800	1,400	5,600	2,800	20,900
31		Ⅱb 層	18,600	1,300	1,300	17,300	0	0	2,700	2,700	1,300	2,700	4,000
32		Ⅲb 層	14,900	1,500	1,500	17,900	0	0	0	0	0	0	4,500
33		Ⅲb' 層上部	15,800	2,900	0	20,100	0	0	1,400	0	0	1,400	7,200
33-2		Ⅲb' 層下部	6,200	3,100	0	26,200	0	0	1,500	0	0	3	9,300
34		Ⅲc 層	2,200	0	2,200	17,600	0	0	4,400	0	0	4,400	2,200

第 3 表　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数



第 15 図　プラント・オパール分布図 1



第 16 図　プラント・オパール分布図 2

部試料より上位で得られている。

イネ以外について、最も多く検出されているのはクマザサ属型で、傾向としては下部で多くイネが多産する頃より急減している。その他、ネザサ節型，ヨシ属，シバ属，キビ族，ウシクサ族などが検出されているが個数的には少なく、イネが検出される層準より得られる傾向がみられる。

D1 区（第 15 図　試料 24 ～ 34）　全試料よりイネのプラント・オパールが検出されている。個数的には基本土層の最上部試料 No.30 では約 180,000 個と非常に多くが得られ、反対に最下部試料 No.34 では 2,200 個と少なく、遺構試料では 5,000 個以上を示している。

イネ以外ではやはりクマザサ属型が最も多く、基本土層では上部に向かいゆるやかに減少する傾向が認められる。また、シバ属とキビ族が上部試料のみで検出され、ヨシ属，ウシクサ族は多くの試料より得られている。遺構試料でウシクサ族は全試料より検出され、ネザサ節型，ヨシ属，キビ族は半数の試料において若干観察された。

D2 区（第 16 図　試料 14 ～ 23）　検鏡の結果、基本土層のⅤ層試料 No.18 を除く 9 試料よりイネのプラント・オパールが検出された。最も多く得られたのは基本土層の最上部 No.14 の約 70,000 個で、上部に向かい多くなる傾向が認められる。また、水田面試料の No.19・20 においても 10,000 個以上を示しているが、基本土層の No.17 や溝覆土の No.21 ～ 23 は約 3,000 個とかなり少なくなっている。

イネ以外ではクマザサ属型が多産しており、多くの試料で 50,000 個を越え、No.19 では約 130,000 個に達している。また、基本土層では下部で多く上部に向かい急減する傾向がみられる。この基本土層でウシクサ族はピークを作るように増加･減少しており、ネザサ節型は No.17 でやや多く検出されているが、他は 1,500 個前後と少ない。その他、ヨシ属，シバ属，キビ族などが検出され、シバ属，キビ族は上部試料のみより産出している。

稲作について

上記したように、ほとんどの試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料 1g 当り 5,000 個

以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている[藤原 1984]。こうしたことから、稲作の検証としてこの 5,000 個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。小峯遺跡の水田面と考えられている遺構面試料 No.19・20・24・25 では 10,000 個以上検出されており、水田稲作を支持する結果を示している。また、基本土層においてはⅢb 層より上位の試料で 6,000 個以上を示しており、稲作が行われていた可能性が高いと判断される。なお、地山（Ⅳ層）と考えられている No.17 からも約 3,000 個のイネのプラント・オパールが検出されているが、おそらく土壌生物（ミミズ？など）や植物の根（赤褐色酸化鉄の集積）などの攪乱により上位Ⅲb 水田層から混入したものと考える。また、Ⅲc 層（No.34）においても約 2,000 個のイネのプラント・オパールが検出されているが、本層は沢の堆積物と考えられており、イネのプラント・オパールは周辺水田域よりもたらされたのであろう。これについては溝覆土試料 No.21 ～ 23・28・29 も同様である。

以上のように、今回行ったプラント・オパール分析から基本土層においては発掘調査から推察されているⅢb 層における水田稲作についてそれを支持する結果が得られた。また、水田遺構面試料においても稲作を支持する結果が得られ、溝試料においては溝周辺における稲作が予想された。

2 花 粉 分 析

試料と分析方法

花粉分析は C2 区地点の 6 試料（No.1 ～ 3・3-2・4・4-2），D1 区基本土層地点の 6 試料（No.30 ～ 33・33-2・34）と No.27，D2 区 SD40 の No.23 の計 14 試料について行った。

試料(湿重約 3 ～ 5g)を遠沈管にとり、10% の水酸化カリウム溶液を加え 20 分間湯煎する。水洗後、0.5mm 目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に 46% のフッ化水素酸溶液を加え 20 分間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸 9：1 濃硫酸の割合の混酸を加え 3 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

分 析 結 果

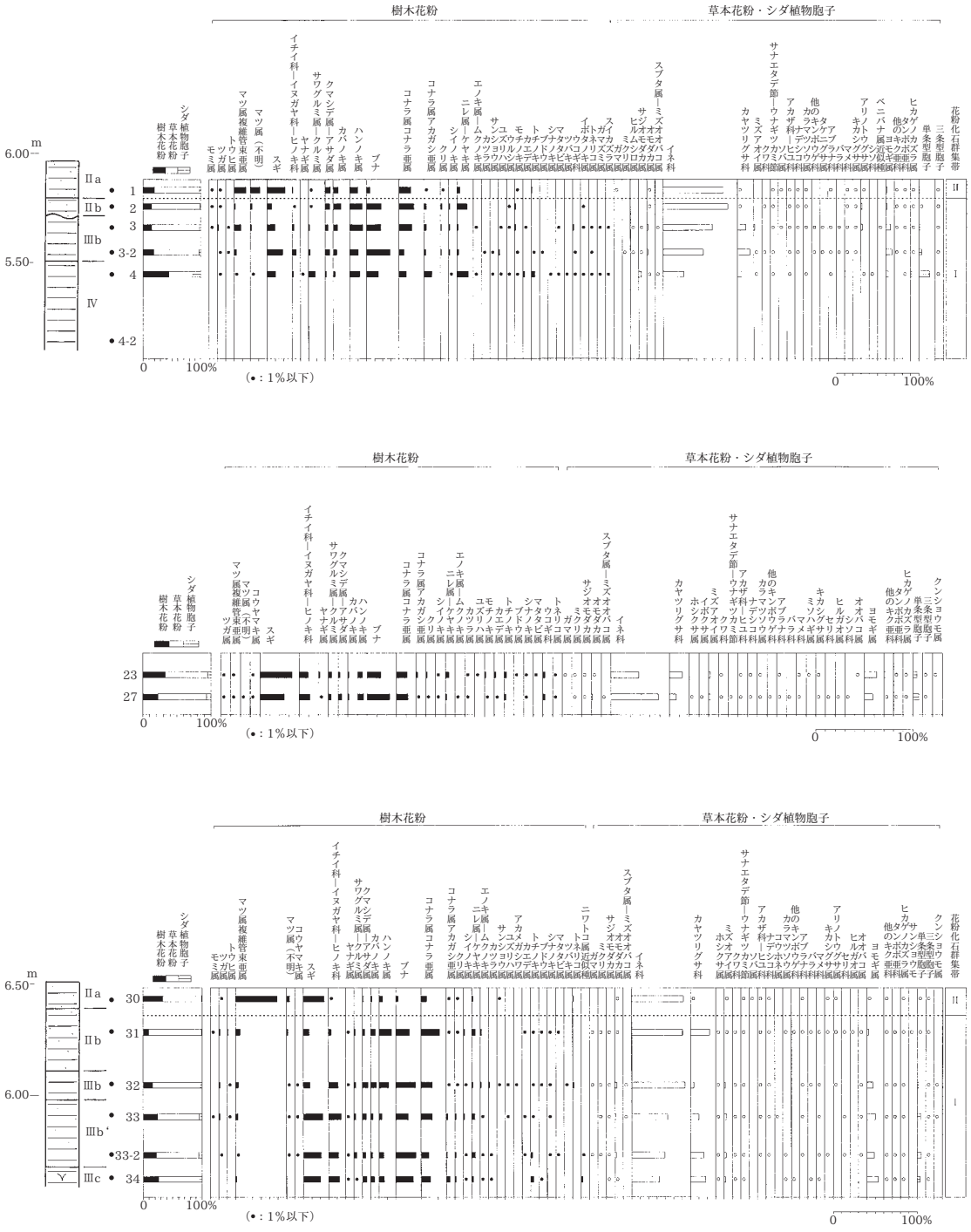
検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 48、草本花粉 40、形態分類を含むシダ植物胞子 4、藻類 2 の総計 94 である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を第 4 表に、分布を第 17 図に示した。なお、樹木花粉は樹木花粉総数を基数として、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示した。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

C2 区（試料 1 ～ 3・3-2・4・4-2）：樹木花粉の産出傾向から下位より花粉化石群集帯Ⅰ，Ⅱを設定した。花粉帯Ⅰはブナの最優占で特徴づけられるが、出現率は 20% 前後とそれほど高くはない。次いでハンノキ属，コナラ属コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ属，スギなどが 10% 前後を示している。草本類ではイネが最も多く、上部に向かい急増している。続くカヤツリグサ科はピークを作るように増加・減少しており、ヨモギ属も同様の傾向が認められる。その他、ソバ属やベニバナ属近似種が No.3 より 1 個体検出されている。また、水生植物（抽水植物）のサジオモダカ属，オモダカ属，ミズアオイ属などが多くの試料より

得られている。

花粉帯Ⅱはマツ属とスギの増加で特徴づけられ、マツ属はマツ属複維管束亜属とマツ属不明を合わせると 20% を越える。その他、コナラ亜属やハンノキ属はやや減少して 10% 前後を示し、ブナは大きく出現率を下げている。草本類は依然としてイネ科が多産しており、その他はいずれも低率出現となっている。そのなかでソバ属や抽水植物のガマ属やオモダカ属が若干検出されている。

遺構試料（試料 23・27）：C2 区花粉帯Ⅰとほぼ同様の傾向を示しており、スギが 30% 前後と最も多く、



第 17 図　花粉化石分布図

和名	学名	1	2	3	3-2	4	4-2	23	27	30	31	32	33	33-2	34
樹木															
モミ属	*Abies*	1	1	2	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−
ツガ属	*Tsuga*	1	1	3	1	1	−	2	2	1	3	3	3	2	−
トウヒ属	*Picea*	−	−	1	1	−	−	−	−	−	3	1	1	−	−
カラマツ属	*Larix*	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	22	3	18	6	2	−	1	2	169	12	7	6	2	3
マツ属（不明）	*Pinus*（Unknown）	27	3	3	−	1	−	−	2	14	4	1	1	1	−
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	1	1	1	−
スギ	*Cryptomeria japonica* D. don	33	8	21	40	20	−	67	53	85	15	18	48	44	42
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	T. - C.	2	1	6	11	3	−	19	24	3	6	25	31	24	26
ヤナギ属	*Salix*	−	−	−	−	1	−	3	1	−	1	1	2	1	1
ヤマモモ属	*Myrica*	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
サワグルミ属−クルミ属	*Pterocarya - Juglans*	1	1	3	5	17	−	7	6	−	4	5	5	7	2
クマシデ属−アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	10	8	8	12	3	−	4	8	4	7	15	10	8	11
ハシバミ属	*Corylus*	−	−	−	−	−	−	1	−	1	1	1	−	−	−
カバノキ属	*Betula*	9	14	11	9	4	−	3	3	6	12	15	6	5	9
ハンノキ属	*Alnus*	15	23	34	21	24	−	11	14	15	33	25	7	12	13
ブナ	*Fagus crenata* Blume	7	27	39	61	30	−	28	49	9	36	51	31	49	43
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	22	27	34	13	17	−	22	25	23	49	29	28	19	23
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	1	4	7	5	19	−	3	2	1	2	1	4	3	9
クリ属	*Castanea*	1	3	3	3	−	−	3	1	1	2	1	4	3	3
シイノキ属	*Castanopsis*	−	2	3	3	2	−	1	2	−	4	1	3	2	2
ニレ属−ケヤキ属	*Ulmus-Zelkova*	6	18	3	4	28	−	7	3	5	9	3	8	9	4
エノキ属−ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	−	−	1	−	1	−	−	1	−	4	3	1	1	1
カツラ属	*Cercidiphyllum*	−	−	−	1	−	−	1	1	−	−	3	−	1	1
フウ属	*Liquidamber*	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
サンショウ属	*Zanthoxylum*	−	−	−	1	1	−	−	−	1	−	1	−	−	−
キハダ属	*Phellodendron*	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	−	−	1	4	1	−	1	−	−	−	1	1	−	−
アカメガシワ属	*Mallotus*	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ウルシ属	*Rhus*	−	1	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
モチノキ属	*Ilex*	1	2	3	2	1	−	3	1	−	−	−	−	1	−
ニシキギ科	Celastraceae	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
カエデ属	*Acer*	−	−	1	−	4	−	3	2	−	1	−	2	1	−
トチノキ属	*Aesculus*	2	−	−	2	9	−	5	4	−	1	1	2	5	7
ブドウ属	*Vitis*	−	−	−	2	−	−	2	−	−	2	1	−	−	1
シナノキ属	*Tilia*	−	−	−	−	1	−	1	1	−	1	1	1	2	−
マタタビ属	*Actinidia*	−	−	1	−	1	−	1	−	−	1	−	−	1	−
ツバキ属	*Camellia*	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ウコギ科	Araliaceae	−	−	4	1	1	−	4	4	−	6	−	1	1	−
ツツジ科	Ericaceae	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ハイノキ属	*Symplocos*	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
エゴノキ属	*Styrax*	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
イボタノキ属	*Ligustrum*	−	1	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
トネリコ属	*Fraxinus*	−	−	2	2	1	−	1	1	4	−	4	−	−	−
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	4
ガマズミ属	*Viburnum*	−	−	2	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1
スイカズラ属	*Lonicera*	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
草本															
ガマ属	*Typha*	1	−	−	−	−	−	1	−	−	1	3	−	1	−
ミクリ属	*Sparganium*	−	−	−	4	−	−	3	3	−	1	2	1	1	−
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
サジオモダカ属	*Alisma*	−	−	1	7	16	−	4	5	−	1	2	2	3	2
オモダカ属	*Sagittaria*	1	1	23	15	2	−	4	10	1	22	34	11	15	5
スブタ属−ミズオオバコ属	*Blyxa - Ottelia*	−	−	1	−	1	−	−	1	−	−	4	2	−	−
イネ科	Gramineae	568	807	846	546	111	−	179	466	636	1439	876	367	361	254
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	6	151	176	24	−	82	64	10	541	52	85	146	142
ホシクサ属	*Eriocaulon*	−	−	3	−	−	−	−	2	−	6	2	1	1	2
イボクサ属	*Aneilema*	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	−
ミズアオイ属	*Monochoria*	−	−	17	7	2	−	10	18	2	3	18	23	21	13
クワ科	Moraceae	−	1	−	6	−	−	1	4	−	1	8	8	6	3
ギシギシ属	*Rumex*	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	1	3	1	1	2	−	−	1	1	1	1	1	1	2
ソバ属	*Fagopyrum*	1	−	1	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−
アカザ科−ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	4	2	3	1	−	3	2	2	7	1	3	3	−
ナデシコ科	Caryophyllaceae	3	1	1	2	−	−	1	1	1	1	3	3	1	−
コウホネ属	*Nuphar*	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
カラマツソウ属	*Thalictrum*	3	3	1	−	1	−	1	2	−	3	−	−	1	2
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	−	−	2	1	−	−	−	2	−	1	−	−	−	2
タケニグサ属	*Macleaya*	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
アブラナ科	Cruciferae	2	−	1	1	4	−	5	4	7	3	3	2	1	−
モウセンゴケ属	*Drosera*	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
バラ科	Rosaceae	−	−	1	1	−	−	−	2	−	2	1	−	−	1
マメ科	Leguminosae	2	2	5	2	5	−	2	3	−	5	5	4	6	7
ミソハギ属	*Lythrum*	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−
キカシグサ属	*Rotala*	2	1	4	1	−	−	1	1	4	2	−	−	1	−
ミズユキノシタ属	*Ludwigia*	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
アリノトウグサ属	*Haloragis*	1	12	21	−	1	−	−	−	1	13	1	−	−	−
セリ科	Umbelliferae	−	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	1	1	−
ヒルガオ属	*Calystegia*	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−
シソ科	Labiatae	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−
オオバコ属	*Plantago*	−	−	−	−	−	−	2	−	−	1	1	2	1	−
アカネ属−ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2	−
オミナエシ属	*Patrinia*	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−
ツリガネニンジン属−ホタルブクロ属	*Adenophora - Campanula*	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ベニバナ属近似種	cf. *Carthamus*	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ヨモギ属	*Artemisia*	12	13	79	85	14	−	79	83	10	49	102	88	79	102
他のキク亜科	other Tubuliflolrae	4	2	5	3	−	−	8	6	2	18	8	4	8	5
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	10	4	5	1	−	4	3	−	17	4	3	2	2
シダ植物															
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	5	4	2	5	5	−	1	4	2	4	2	3	2	1
サンショウモ	*Salvinia natans*	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
単条型胞子	Monolate spore	8	9	24	35	57	−	27	58	3	12	21	36	42	26
三条型胞子	Trilete spore	4	1	3	2	4	−	5	3	1	3	6	1	5	1
緑藻類															
クンショウモ属	*Pediastrum*	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	1	−	−
黄緑色藻類	*Botryococcus braunii* Kutzing	−	1	1	1	−	−	−	−	−	2	2	−	−	−
樹木花粉	Arboreal pollen	154	150	218	211	201	0	205	213	344	221	221	209	206	206
草本花粉	Nonarboreal pollen	608	867	1175	868	186	0	392	687	679	2142	1134	613	663	544
シダ植物胞子	Spores	17	14	29	42	66	0	33	65	6	20	29	40	49	28
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	779	1031	1422	1121	453	0	630	965	1029	2383	1384	862	918	778
不明花粉	Unknown pollen	27	23	17	24	72	0	30	34	4	19	18	27	23	17

T. -C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceae を示す

第４表　産出花粉化石一覧表

次いでブナとなっている。その他、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）やコナラ亜属が 10% 前後の出現率を示している。草本類ではイネ科が最も多く、No.23（D2 区 SD40 覆土）では 30% 弱，No.27（D1 区水田面）では 50% 弱を示している。次いでカヤツリグサ科とヨモギ属が 10% 検出されている。また、水生植物ではミズアオイ属が 1% を越えて得られており、その他ミクリ属，サジオモダカ属，オモダカ属などが両試料より産出している。

D2 区基本土層（試料 30 ～ 33・33-2・34）：本地点においても樹木花粉の産出傾向から下位より花粉化石群集帯Ⅰ，Ⅱを設定した。花粉帯Ⅰはスギとブナの多産で特徴づけられるが、スギは上部で急減している。代わってハンノキ属が増加しており、コナラ亜属も同様の傾向がみられる。草本類ではやはりイネ科が最も多く、上部に向かい増加している。次いでカヤツリグサ科が多く、傾向は上部に向かい減少し、Ⅰ帯最上部で再び出現率を上げている。ヨモギ属は最下部で 10% を越えるが上部に向かい減少し、Ⅰ帯最上部では 1% をわずかに越える程度である。その他、水生植物のオモダカ属やミズアオイ属がほぼ連続して 1% を越える出現率を示している。

花粉帯Ⅱはマツ属複維管束亜属の最優占で特徴づけられ、スギも再び出現率を上げている。一方、Ⅰ帯で増加傾向がみられたハンノキ属やコナラ亜属は減少し、ブナも同様である。草本類はイネ科の圧倒的な出現が示され、他は 1% に達していない。そのなかでソバ属や水生植物のオモダカ属，ミズアオイ属などが若干検出されている。

3　小峯遺跡の植生変遷

上記した花粉化石群集帯を基に小峯遺跡の植生変遷について記す。

花粉帯ⅠはⅢb すなわち平安期からⅡ b の現代に近い時代にわたる期間と推察される。この時期の遺跡周辺丘陵・山地部ではスギやヒノキ類の温帯性針葉樹林が成立していた。さらにブナやコナラ亜属を主体にクマシデ属－アサダ属，ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹林も広くみられた。また、コナラ属アカガシ亜属やシイノキ属も低率ながら連続して検出されており、一部にこれらの常緑広葉樹類も生育していたとみられる。その後、スギやヒノキ類に減少傾向がみられ、分布域の縮小が推測される。新潟県上越市に所在する一之口遺跡東地区より検出された平安時代の木製品の多くはスギであった［新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　1994］。このように平安時代においてはスギが有用材として多く利用され、スギ林は多大な影響をうけたことが予想される。ここ小峯遺跡でも同じことが考えられ、スギ林は縮小し、ヒノキ類も同様と思われる。

プラント・オパール分析ではクマザサ属型が多く検出されており、このクマザサ属型のササ類（チシマザサ、チマキザサ、ミヤコザサなど）については、主に林下での生育が予想され、遺跡周辺に成立していたであろう落葉広葉樹林の下草的存在で分布を広げていたと推測される。ネザサ節型のササ類（ゴキダケ、ケネザサ（ミヤコネザサ）など）については日のあたる開けたところでの生育が考えられ、先に示した水田稲作地周辺や上記森林の林縁部に生育していたと推測される。加えてウシクサ族（ススキ、チガヤなど）やシバ属（ノシバなど）も同様であり、ネザサ節型のササ類とともに草地的景観をみせていたと思われる。

低地部においては水田稲作が行われていたと考えられ、ヨシやツルヨシなどのヨシ属については水田稲作地やその周辺の水路などに生育していたと予想される。また、水生植物のサジオモダカ属，オモダカ属，ミズアオイ属などは現在の水田に普通に見られる水田雑草（サジオモダカ，オモダカ，コナギなど）を含む分

類群であり、これらの植物も水田を中心に多く見られたであろう。さらにキビ族については、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明であるが、上記したように水田稲作地が予想されていることからここではエノコログサやタイヌビエなどの水田雑草類に由来するキビ族と推察される。その他、カヤツリグサ科，ヨモギ属，シバ属なども水田内や畔に雑草類として生育していた。

この低地部の樹木類ではハンノキ属の存在が考えられる。花粉分析においては上部に向かい増加する傾向が認められ、湿地林を形成するハンノキ属は水田稲作の広がりとともに増加したことが推察される。このハンノキ属、すなわちハンノキはトネリコ（トネリコ属）とともに田の畔などに残されたり植栽され、かつては稲架として利用された樹種である。このようにハンノキ属は水路周辺や畔などに生育し、一時的に低地部で目立つ存在となった。

花粉帯ⅡはⅡa 層、すなわち現代に近い時代と推察される。この時期になると遺跡周辺山地・丘陵部ではヒノキ類や落葉広葉樹類（ブナ，コナラ亜属など）が減少した。これは人間による森林への干渉が要因と考えられ、本地域の発展にともない木材利用が増大して先の森林は破壊されたものと思われる。代わってその跡地にマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が進入・増加して二次林を形成した。また、スギの増加については植林により林分を広げたものと推察される。

一方、低地部では水田稲作が依然として行われていたが、稲作地の整備などで水田雑草類やハンノキ属は少なくなっていった。また、一部でソバの栽培も行われていたとみられる。

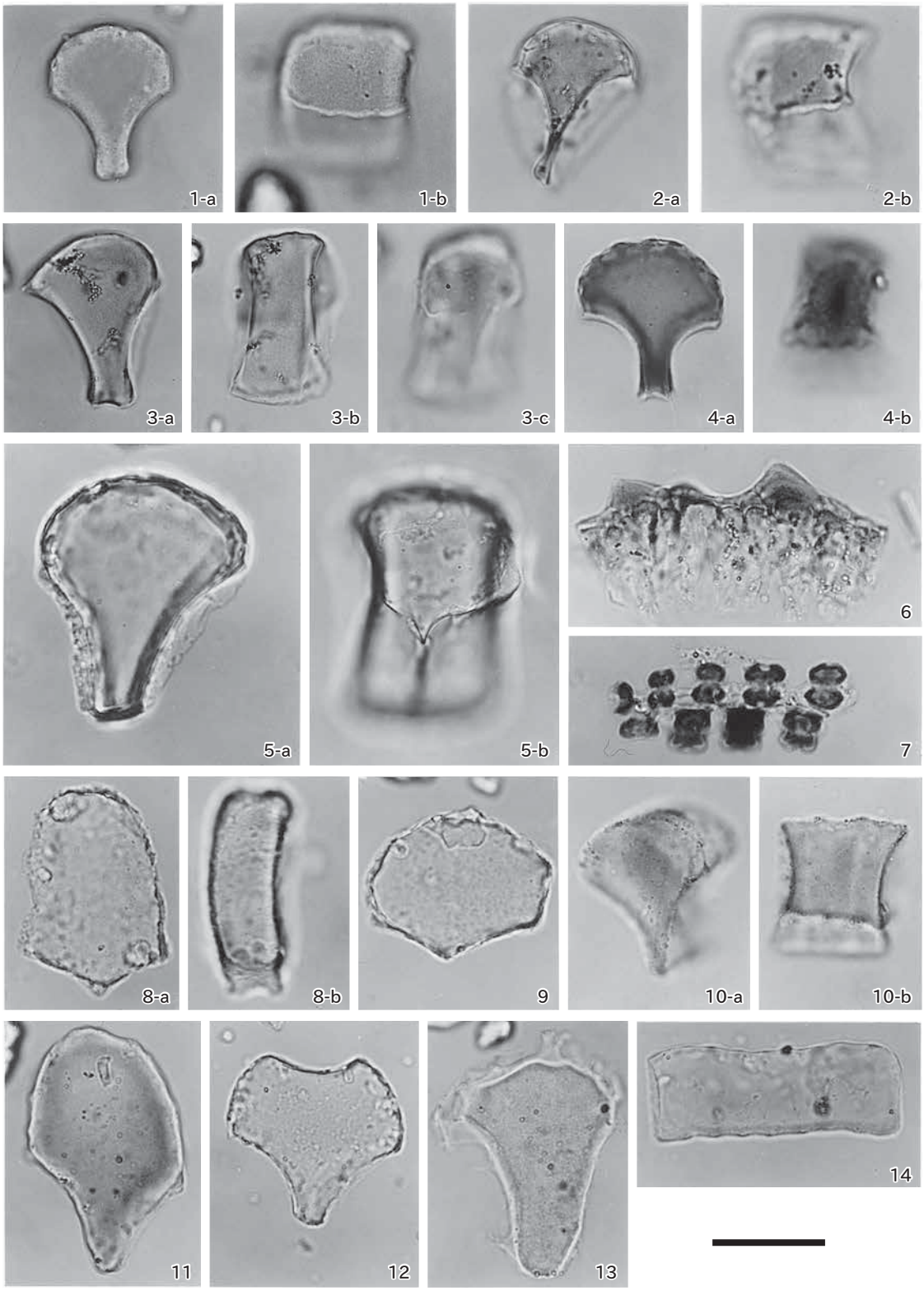
引用文献

藤原宏志　1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9　p15-29

藤原宏志　1984「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』No.227　p2-7　ニューサイエンス社

藤原宏志・佐々木彰　1978 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－」『考古学と自然科学』11　p9-20　日本文化財学会

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 60 集　一之口遺跡東地区（本文編）』 290p



1～5：イネ（a：断面、b・c：側面　1：No.3　2：No.19　3：No.25　4：No.26　5：No.33-2），
6：イネ穎部破片（No.3），7：イネ型単細胞珪酸体列（No.19），
8・9：クマザサ属型（a：断面、b：側面　8：No.19　9：No.26），
10：ネザサ属型（a：断面、b：側面 No.30），11：ヨシ属（断面 No.23），
12：シバ族（断面 No.31），13：ウシクサ族（断面 No.3）、14：キビ族（側面 No.25）

第 18 図　小峯遺跡のプラント・オパール（スケールバー：30 μm）

第Ⅶ章　ま　と　め

1　土器・陶磁器

変　　遷

小峯遺跡では古代から中世の土器が最も多く出土した。これらの土器・陶磁器は包含層から出土したものが大半であるが、既存の研究［伊藤 2001、上田 1982、小野 1982、春日 2015、小池 1999、坂井 1984・1989、品田 1999ab・2012、鶴巻 1999、藤澤 2008、水澤 2005、山本 2000・2010、吉岡 1994 など］を参考にして編年的な位置付けがある程度可能である。出土土器の編年的位置づけを確認し、遺構の変遷を検討する際の基礎とする。

古代から中世の土器･陶磁器を 4 期 6 小期に区分した（第 19 図）。1a 期から 3 期は箕輪遺跡Ⅱの編年［春日 2015］をもとに設定したもので、1a 期が箕輪遺跡の 3 期、1b 期が箕輪遺跡の 4 期（4 期古・新含む）、2 期が箕輪遺跡の 5 期（5 期古・新含む）、3 期が箕輪遺跡の 6 期に対応する。暦年代では、1a 期が 9 世紀前葉、Ⅰb 期が 9 世紀後葉～末、2 期が 10 世紀～ 11 世紀前葉、3 期が 11 世紀後葉～ 12 世紀と考えている。4 期は 13 世紀～ 16 世紀中葉頃で、2 期に細分した。山本信夫の輸入陶磁による時期区分との対応は 4a 期が D ～ G 期、4b 期は H ～ J 期と考えている。土器・陶磁器の変遷をこのように考えるならば、10 世紀後半～ 11 世紀と 12 世紀後半～ 13 世紀の資料がやや希薄な印象があるが、9 世紀前葉から 16 世紀中葉頃まで、大きな空白期間がなく継続していた可能性が高い。

箕輪編年の補足

今回の報告では、箕輪遺跡Ⅱで示した古代土器の編年案［春日 2015］を補足する成果が 2 点確認できた。1 点目は SK2 出土土器である。SK2 からは胎土 C1 群の須恵器無台椀（3）と胎土 B 群の須恵器無台杯（4）が出土している。4 は箕輪編年では 4 期（新）に位置づけられる須恵器と考えるが、箕輪遺跡Ⅱでは、4 期（新）の B 群以外の須恵器食膳具の共伴事例が明確でなかった。3 は箕輪編年 4 期（古）の胎土 C1・C2 群の須恵器無台杯と比較すると器高が高く底径が小さく、形態変化が確認できる。

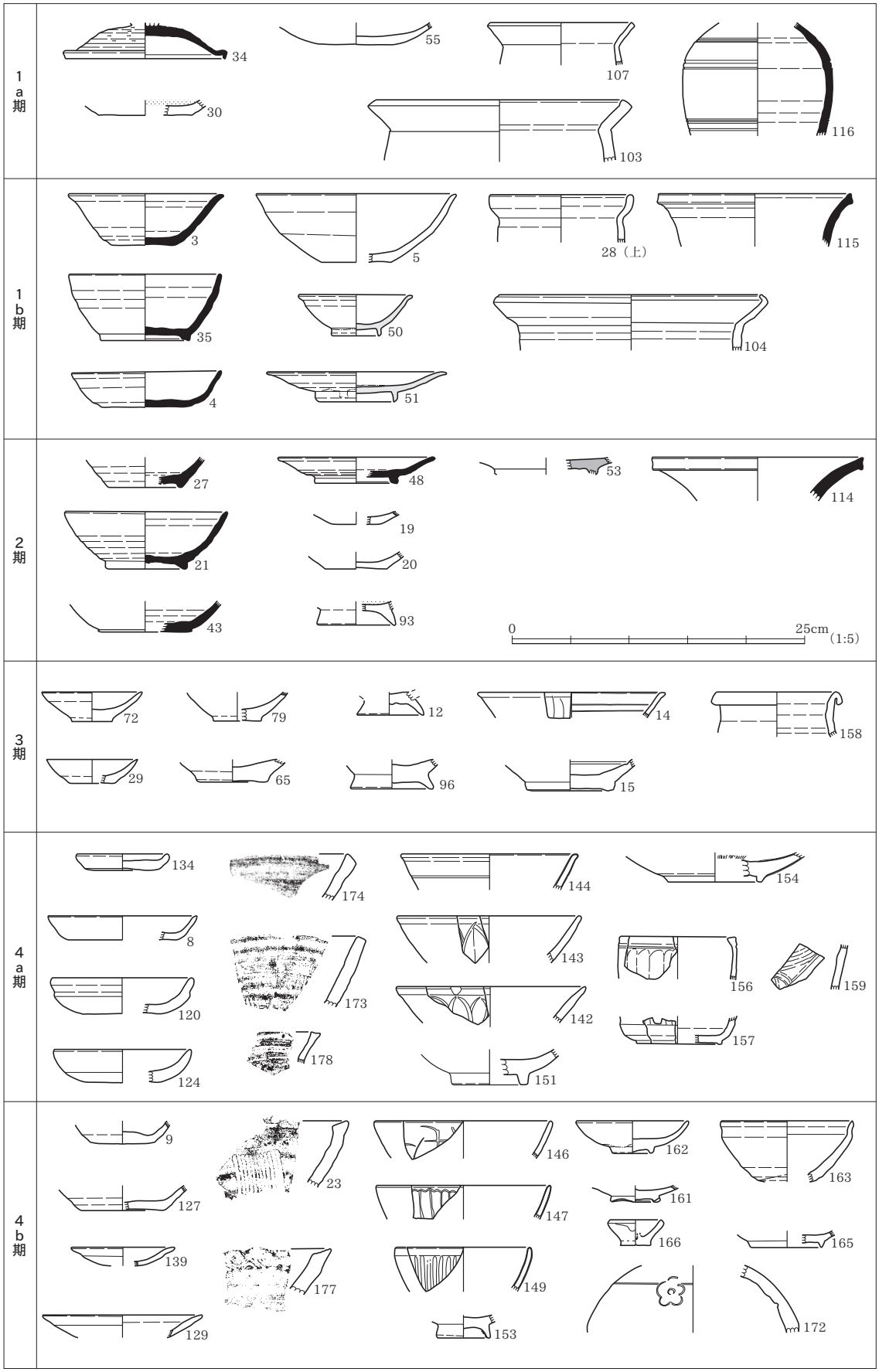
2 点目は SD5 出土土器である。SD5 からは土師器無台椀（19・20）と胎土 B 群の須恵器有台椀（21）が出土している。19･20 は底部破片のため断定はできないが、底径や器壁の厚さなどから考え、5 期（古）の可能性が最も高い。5 期（古）は箕輪遺跡Ⅱでは、須恵器食膳具の共伴が明確でなかったが、今回の小峯遺跡の成果により、21 のような胎土 B 群の施釉陶器模倣の須恵器が伴うことが確認できた。このことは、箕輪編年と他地域の土器編年との対応関係を考えるうえでも重要である。

2　遺　　構

変　　遷

遺構の変遷は土器・陶磁器の変遷と一致する 4 期に分けて把握できる（第 20・21 図）。

1 期：A 区は SD10-1 ～ 6、SB39、SK1・2 など、B 区は SD76 ～ 80、SE46、SK42・50、D1 区は SK88、SE89 などが当期の遺構になるものと考えている。A 区では小規模な掘立柱建物（SB39）が土坑



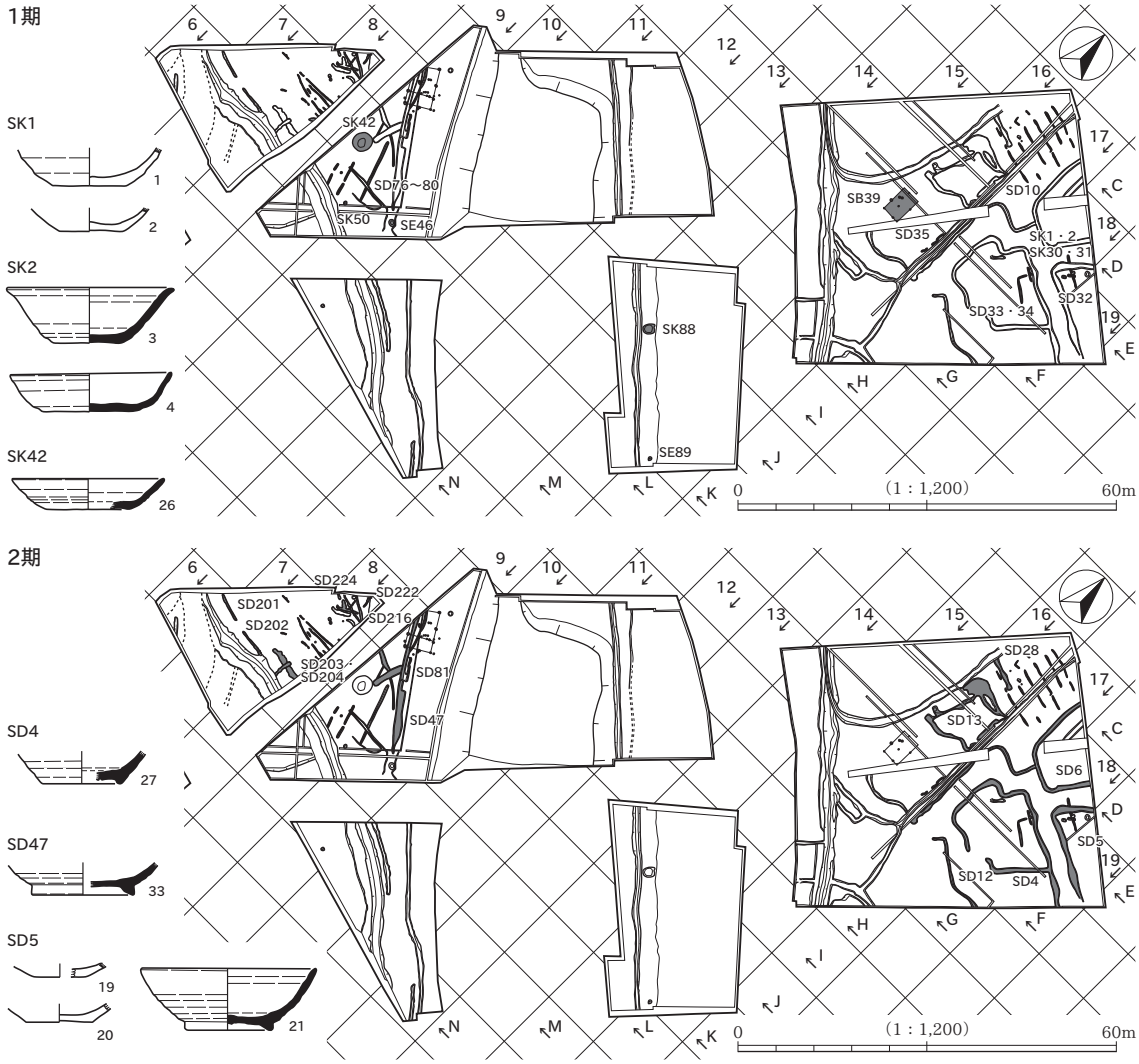
第 19 図　土器・陶磁器の変遷

(SK1･2)･畑作溝（SD10-1 ～ 6）を伴っている。B 区でも畑作溝（SD76 ～ 80）に近接して土坑･井戸があり、近隣に掘立柱建物が存在した可能性が高い。

2 期：A 区では SD4・5 から 2 期の遺物が出土しており、これらと並行する複雑な形状の溝が当期の遺構と考える。B 区では SD47 から 2 期の須恵器有台椀が出土している。C1 区では 4 期の遺構である SD40 に切られる SD201・202・203 などが 2 期の遺構の可能性がある。畑作溝・土坑・井戸・建物跡は確認できなくなり、溝によって区画された耕地が成立した可能性が高い。A 区では微地形に制約され耕地の形状は複雑な形となったものと推測する。

3 期：A 区では SD9・7・11・36、畦畔 19、B・D1 区では SD83・44、C2 区では SD200 などが当期の遺構の可能性が高い。A 区では複雑な形状の溝によって区画された耕地が確認できなくなり、微高地と低地の境に大規模な水路（SD9）が掘削され、これに連結する直線的な溝や畦畔によって区画された耕地が成立した可能性が高い。B・D1 区では SD9 に近似した規模で平行する水路（SD83）、C2 区でも並行する溝（SD200）が確認できる。

4 期：A 区では SD8、B・C1・D2 区では SB86、SE48、SD40・41・100・101・208 ～ 212、畦



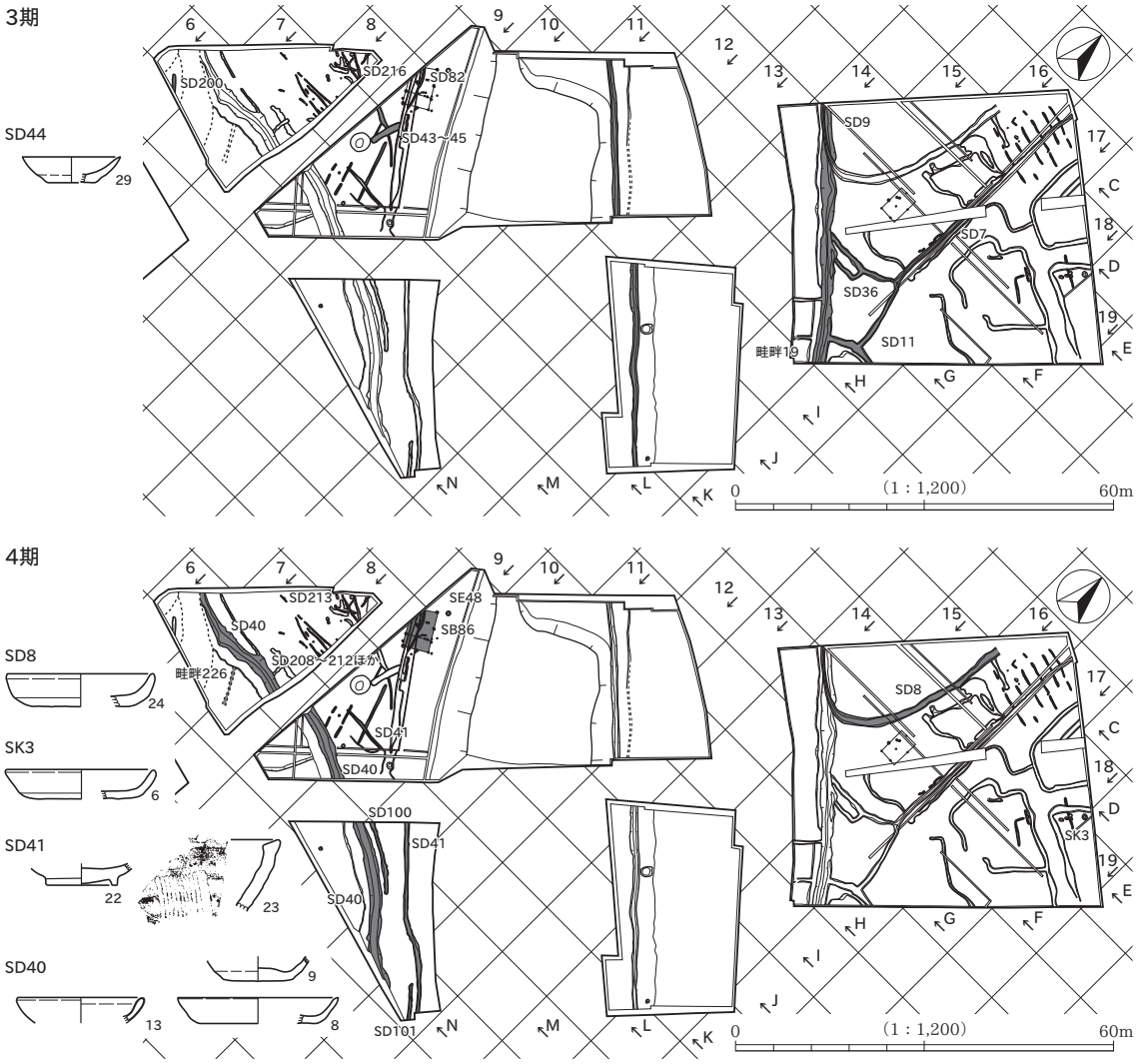
第 20 図　遺構の変遷 1

畔 226 などが当期の遺構と考える。井戸・畑作溝（SD208 ～ 212）を伴う掘立柱建物（SB86）があり、微高地と低地の境に 3 期よりも大規模な水路（SD40）が掘削され、低地部は水田として利用された可能性が高い。

遺 跡 の 性 格

本遺跡で検出した 1 期の掘立柱建物 SB39 は平面積 20m² 弱、4 期の掘立柱建物 SB83 は 30m² 弱の小規模な建物である。しかし出土土器・陶磁器には、1a 期は須恵器水瓶（116）、1b 期は灰釉陶器小椀・皿（50・51）、2 期は緑釉陶器皿（53）、3 期は白磁四耳壺（158）、4a 期は青磁盤・香炉（154・156・157）・青白磁梅瓶（159）、4b 期は瀬戸焼・美濃焼瓶子・燭台（172・166）など各時期に優品がみられる。土器･陶磁器ではないが石帯の巡方（194）は 1a 期～ 2 期のいずれかの時期のものになるであろう。また、遺跡が長期間存続した可能性が高いことを考えると、貧しく不安定な村落という評価は適当ではなく、近接して有力な集落が存在したか有力な在地勢力（が所在する集落）の出村的な性格が考慮されてもよい。

在地勢力の候補としては、1 ～ 3 期は箕輪遺跡、4 期は毛利安田氏や、毛利安田氏と土地争論を起こすこともあった寺院勢力の不退寺（普躰寺）などが想定できる。



第 21 図　遺構の変遷 2

引用・参考文献

飯坂盛泰　2014　「宝田遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成 25 年度』 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀ほか 2012　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 241 集　山崎遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀ほか 2014　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 246 集　剣野沢遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤啓雄ほか 2001　「Ⅵ-2 宮ノ下遺跡群における古代土器の様相」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 35 集　宮ノ下遺跡群』 柏崎市教育委員会

伊藤啓雄ほか 2013　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 72 集　音無瀬Ⅱ』 柏崎市教育委員会

上田秀夫　1982　「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　貿易陶磁研究会

大橋康二　1989　『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社

大野隆一朗・徳間正一ほか　1990　「大地」『柏崎市史』上巻　新潟県柏崎市史編纂委員会

荻野正博　1986　「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第 16 号　新潟史学会

岡本郁栄ほか 2008　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 53 集　坂田遺跡群Ⅱ』 柏崎市教育委員会

小野正敏　1982　「15 ～ 16 世紀の染付椀、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究会』No.2

柏崎市史編さん委員会　1982　『柏崎市史資料集』考古編 2

柏崎市史編さん委員会　1987　『柏崎市史資料集』考古編 1

春日真実　1999　「第 4 章 古代 第 2 節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院

春日真実　2005　「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について－「今池編年」・「下ノ西編年」・山三賀編年」の検討を中心に－」『新潟考古』16　新潟県考古学会

春日真実　2010　「貞観五年の地震痕跡再考－百瀬正恒氏からの批判に対する反論－」『三面川流域の考古学』第 8 号　奥三面を考える会

春日真実　2015　「第Ⅶ章 まとめ 1 土器・陶磁器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 254 集 箕輪遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実・坂上有紀ほか　2015　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 254 集　箕輪遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　1999　「第Ⅴ章 1　遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集　和泉 A 遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財事業団

鐘ヶ江宏之　1993　「国制の成立－令制国・七道の形成過程－」『日本律令制論集』上巻　吉川弘文館

金子拓男　1990　「第 6 章 第 3 節 三島郡の分立、第 5 節 交通と交通路、第 6 節 延喜式内神社」『柏崎市史』上巻　新潟県柏崎市史編さん委員会

金子拓男ほか 1983　『西山町文化財調査報告書第 1 集　新潟県刈羽郡西山町　高塩 B 遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会

小池邦明　1999　「第 5 章 中世 第 2 節 陶磁器の組成と変遷 第 1 項 中世前期」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編　高志書院

国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社吉田建設　2014　『柏崎市丘江遺跡現地説明会資料』

国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・藤村ヒューム管株式会社　2014　『柏崎市山崎遺跡現地説明会資料』

斎藤　亨　1995　『刈羽村埋蔵文化財調査報告書第 2 集　枯木 A 遺跡』 刈羽村教育委員会

斎藤　亨　1999　『刈羽村埋蔵文化財調査報告書第 4 集　払川遺跡』 刈羽村教育委員会

斎藤　亨ほか 1998 『刈羽村埋蔵文化財調査報告書第３集 払川・山ノ脇遺跡』 刈羽村教育委員会
坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『今池遺跡・下新田遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
坂井秀弥 1989 「第Ⅶ章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 53 集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会
品田高志 1987 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第８ 帝国石油新長岡ライン埋蔵文化財発掘調査報告書』柏崎市教育委員会
品田高志 1991 「越後の中世土師器」『新潟考古学談話会会報』第８号 新潟考古学談話会
品田高志 1992 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 17 行塚遺跡』 柏崎市教育委員会
品田高志 1996 「田塚山の中世仏道と墳墓」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 21 集 田塚山遺跡群』 柏崎市教育委員会
品田高志 1999a 「第５章 第３節 第１項 中世土師器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
品田高志 1999b 「越後における中世後期の土師器Ⅲ －京都系土師器第２波の流入と展開－」『中世土師器の基礎研究』XIV 日本中世土器研究会
品田高志 2003 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 42 集 下川原』 柏崎市教育委員会
品田高志 2012 「Ｖ-1 音無瀬遺跡における古代土器の様相」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 68 集 音無瀬Ⅰ』柏崎市教育委員会
品田高志ほか 1985a 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第４ 吉井遺跡群』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 1985b 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第５ 刈羽大平・小丸山』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 1990 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 13 吉井遺跡群Ⅱ』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 1996 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 21 集 田塚山遺跡群』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 1997 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 26 集 前掛り』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 1999 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 32 集 角田』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 2000 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 34 集 横山東遺跡群Ⅰ』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 2008 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 52 集 江ノ下』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 2011 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 63 集 剣野』 柏崎市教育委員会
品田高志ほか 2012 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 68 集 音無瀬Ⅰ』 柏崎市教育委員会
鈴木郁夫ほか 1988 『土地分類基本調査 岡野町』 新潟県
鈴木郁夫ほか 1989 『土地分類基本調査 柏崎・出雲崎』 新潟県
高橋一樹 1997 「越後国頸城地域の御家人－「六条八幡宮造営注文」をてがかりに」『上越市史研究』 新潟県上越市
高橋　保ほか 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 109 集 箕輪遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
鶴巻康志ほか 1999 「第５章 中近世 第２節Ｂ 中世後期」『新潟県の考古学』 高志書院
田海義正ほか 1982 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 30 尾野内遺跡 芦ヶ崎砦跡』 新潟県教育委員会
永井久美男 1994 『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』 兵庫県埋蔵銭調査会
長沢展生ほか 2007 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 50 集 坂田遺跡群Ⅰ』 柏崎市教育委員会
中島義人 2001 『西山町文化財調査報告書第５集 新潟県刈羽郡西山町 畠田遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会
中島義人 2001 『西山町文化財調査報告書第６集 新潟県刈羽郡西山町 井ノ町遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会
中島義人 2003 『西山町文化財調査報告書第７集 新潟県刈羽郡西山町 宮ノ前遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会
中島義人 2012 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 67 集 関町』 柏崎市教育委員会
中島義人ほか 2009 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 56 集 坂田』 柏崎市教育委員会
中島義人ほか 2010 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 58 集 坂田遺跡群Ⅲ』 柏崎市教育委員会

中野　純ほか 2001　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 35 集 宮ノ下遺跡群』 柏崎市教育委員会
中野　純・平吹　靖ほか　2006 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 47 集 与三』 柏崎市教育委員会
中野　純ほか 2009　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 48 集 角田Ⅱ』 柏崎市教育委員会
新潟県　　1982　『新潟県史』資料編 3 中世一 文書編Ⅰ
新潟県　　1983　『新潟県史』資料編 4 中世二　文書編Ⅱ
新潟県　　1984　『新潟県史』資料編 5 中世三　文書編Ⅲ
花ヶ前盛明 2002　『越佐の神社一式内社六十三』 新潟日報事業社
平吹　靖ほか 1998　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 28 集 山王前』 柏崎市教育委員会
平吹　靖ほか 2010　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 59 集 軽井川南遺跡群Ⅰ』 柏崎市教育委員会
藤澤良祐　1993　『瀬戸市史 陶磁史編四』　愛知県瀬戸市
藤澤良祐　2008　『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
藤巻正信　1989　「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報』第 3 号　新潟考古学談話会
藤巻正信ほか 1988　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 27 集 西田・鶴巻田遺跡群』 新潟県教育委員会
水澤幸一　2005　「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟考古学会
森田　勉　1982　「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　貿易陶磁研究会
矢田俊文　1999　「戦国期越後の守護と守護代」『中世の越後と佐渡』 高志書院
山本信夫　2000　『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集　太宰府市教育委員会
山本信夫　2010　「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』30　日本貿易陶磁研究会
山本　肇ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 125 集 下沖北遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 140 集 東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
横山勝栄ほか 1987　『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』 新潟県教育委員会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉岡康暢　2003　「珠洲焼概論」『珠洲焼概論』平成 15 年度埋蔵文化財専門職員実務研修資料集　新潟県教育庁文化行政課
吉村　晶ほか 2005　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 45 集 吉井水上遺跡群』 柏崎市教育委員会
米沢　康　1980　「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第 32 巻 6 号　信濃史学会

小峯遺跡遺構観察表（1）

遺構名	覆土 堆積状況	断面形	グリッド	長軸・長さ （cm）	短軸・幅 （cm）	深さ （cm）	主要な切り合いなど	出土土器・陶磁器	備考
SK1	レンズ状	台形状	18E5	43	27	10	SD32より新しい	土師器無台椀・長釜×鍋・小片	
SK2	レンズ状	台形状	18E5	65	50	10	SD32より新しい	須恵器無台杯・無台椀、土師器無台椀・長釜×鍋・有×無台椀	
SK3	レンズ状	弧状	18F25・19F21	93	82	10		土師質皿T1類,土師器小片	
SD4	単層	弧状	17～19EF	－	80	15		須恵器有台杯・無台杯、土師器無台椀・小釜・長釜×鍋、黒色土器無台椀、灰釉陶器椀	
SD5	単層	弧状	18DE, 19E	－	95	9	SD32より新しい	須恵器無台杯・有台椀、土師器無台椀・有×無台椀、黒色土器有×無台椀	
SD6	単層	弧状	16DF, 17CDEF, 18DE	－	90	8	SD7より古い	土師器無台椀・長釜×鍋・小片、黒色土器無台椀、須恵器甕	
SD7	単層	半円状	16CDEF, 17CDEFGH	－	80	40	SD6,SD10-1～6より新しい	土師器長釜×鍋・小片	
SD8	単層	半円状	14F, 15EF, 16DE	－	150	24	SD9・28より新しい	土師質土器皿T1類、土師器無台椀・長釜×鍋・小片、須恵器壺瓶類	
SD9	単層	半円状	14F, 15FG, 16GH, 17H	－	250	100	SD8より古い	須恵器甕	
SD10-1	単層	弧状	16・17C	－	30	5	SD7より古い		畑作溝
SD10-2	単層	弧状	16・17C	－	30	5	SD7より古い		畑作溝
SD10-3	単層	弧状	16C・17CD	－	40	7	SD7より古い		畑作溝
SD10-4	単層	弧状	16D5, 17D1	－	30	6	SD7より古い		畑作溝
SD10-5	単層	弧状	16D10, 17D6	－	30	6	SD7より古い		畑作溝
SD10-6	単層	弧状	16・17D	－	40	5	SD7より古い		畑作溝
SD11	単層	弧状	16・17H	－	120	20			
SD12	単層	台形状	17GH, 18G	－	50	12			
SD13	単層	弧状	16DE	－	290	5		土師器小釜・小片	
畦畔14	－	－	16・17H		150	－			SD11に伴う
P15	単層	台形状	16D3	20	20	10			
P16	レンズ状	U字状	16D4	60	45	30			
P17	単層	U字状	16D4	15	15	10			
畦畔18	－	－	14F, 15FG, 16GH	－	60	－			SD9に伴う
畦畔19	－	－	16H18・19・23	－	30	－			
P20	単層	台形状	15F10	40	40	25		須恵器無台杯	SB39
P21	単層	台形状	15F15	25	20	15			SB39
P22	単層	台形状	16F1	35	35	20		須恵器壺瓶類	
P23	単層	台形状	16F1	30	30	15			
P24	単層	台形状	16F6	20	20	15			
P25	単層	台形状	16F12	30	25	20			SB39
P26	単層	U字状	16F2	25	20	20			SB39
P27	単層	台形状	16F1	15	15	15			SB39
SD28	単層	弧状	16D2・7・8・9・10	－	90	5	SD8より古い		
SD29	単層	弧状	17CD	－	100	7			
SK30	単層	弧状	18E5	72	45	5			
SK31	単層	弧状	18E4・5・9・10	64	38	5			
SD32	単層	台形状	18DE	550	28	5	SK1・2,SD52より古い		
SD33	単層	半円状	18E	－	34	12			
SD34	単層	半円状	18E12・13・18	230	30	12			
SD35	単層	弧状	16F5・10・15	－	30	4			
SD36	単層	弧状	15・16G	－	80	15			
SD40	レンズ状	半円状	6～9L・10LM・11M・12MN・13N	－	270	75	SD78より新しい	土師質土器皿・小皿、青磁皿、白磁椀、須恵器長頸瓶・甕、土師器無台椀・小釜・長釜×鍋	
SD41	単層	弧状	9・10L, 11LM, 12M, 13MN	－	35	7	SD75・79より新しい	青磁椀・珠洲擂鉢・須恵器長頸瓶・甕、土師器無台椀・長釜×鍋・小片	
SK42	単層	弧状	9K12・13・17・18	320	300	8		須恵器無台杯・甕、土師器無台椀・小釜・長釜×鍋・小片、黒色土器有×無台椀	
SD43	単層	弧状	9JK	540	120	9	SD76より新しい	須恵器横瓶・甕、土師器無台椀・長釜×鍋・小片	
SD44	単層	弧状	9K9・10・15	－	30	7		土師質土器小皿R1類、土師器小片	
SD45	単層	弧状	9K2・3	－	60	7	SD76より新しい		
SE46	レンズ状	台形状	10L4・9	110	90	130			
SD47	単層	弧状	9JK, 10K	－	110	8		須恵器有台杯・無台杯・壺瓶類・甕、土師器無台椀・有台椀、・長釜×鍋、灰釉陶器椀	
SE48	水平レンズ	U字状	9I23・24	70	68	90		須恵器壺瓶類、土師器長釜×鍋・小片	
畦畔49	－	－	7・8L, 9LM, 10M, 11MN, 12・13N	－	180	－	SD40に伴う		
SK50	単層	半円状	9L15	70	40	15			
P52	単層	U字状	9L3	35	30	16		土師器小釜	
P53	単層	階段状	9J14	45	30	25		土師器無台椀・長釜×鍋・小片	SB86
P54	単層	階段状	9J8	30	27	25			SB86
P55	単層	階段状	9J12	42	40	34		珠洲壺R、土師器小片1	SB86
P56	単層	台形状	9J18	55	42	42			SB86
P57	単層	台形状	9J8	20	17	17			
P58	単層	台形状	9J8	21	19	13			
P59	単層	台形状	9J8・9	22	20	11			
P60	単層	階段状	9J9	30	26	28			
P61	単層	台形状	9J3	25	20	25			
P62	単層	台形状	9J3	27	22	15			

小峯遺跡遺構観察表（2）

遺構名	覆土 堆積状況	断面形	グリッド	長軸・長さ （cm）	短軸・幅 （cm）	深さ （cm）	主要な切り合いなど	出土土器・陶磁器	備考
P63	単層	階段状	9J2・3	45	32	33		土師器無台椀・長釜×鍋・小片	SB86
P64	単層	階段状	9I23	42	35	40			SB86
P65	単層	台形状	9J19	21	20	15			
P66	単層	半円状	9J22	33	29	13			
P67	単層	台形状	9J19	22	19	20		土師器無台椀・小片、黒色土器無台椀	
P68	単層	階段状	9J7	65	45	40		須恵器壺瓶類、土師器有台椀・無台椀	
P69	単層	台形状	9J15	32	24	24			SB86
P70	単層	台形状	9J15	27	22	27		土師器小片	SB86
P71	単層	台形状	9J4	35	32	26		土師器長釜×鍋	SB86
P72	単層	台形状	9J9	20	18	13		土師器小片	
P73	単層	台形状	9J9	19	17	9			
P74	単層	台形状	9J9	20	18	12			
SD75	単層	弧状	9KL, 10L	1040	48	6	SD41より古い		畑作溝
SD76	単層	弧状	9L2・7	－	20	3	SD43・45より古い		畑作溝
SD77	単層	弧状	9L9・14	210	36	9			畑作溝
SD78	単層	弧状	9L8・13	190	30	5	SD40より古い		畑作溝
SD79	単層	弧状	9K23, 9L3・4・9	330	28	7	SD41より古い		畑作溝
SD80	単層	弧状	9L2	120	32	6			畑作溝
SD81	単層	弧状	9J19・24・25, 10K4・5	390	50	6			
SD82	単層	弧状	9J	－	28	5			
SD83	レンズ状	台形状	11GH, 12HI, 13J, 14JK, 15KL, 16L	－	72	30			
畦畔84	－	－	11GH, 12HI, 13I, 14IJ, 15JK, 16K	－	220	－	SD83に伴う		
SK88	単層	弧状	14J9・10・14・15	190	178	5			
SE89	レンズ状	U字状	16K21・22	65	52	60		土師器無台椀・小片	
SD100	単層	弧状	11・12M	－	80	12		土師質土器皿T1類、須恵器甕、土師器無台椀・長釜×鍋・小片	
SD101	レンズ状	弧状	13N7・12・13・19	－	50	9		土師器無台椀・小片	
SK105	単層	弧状	10M25	58	49	20			
SD200	単層	弧状	6L23, 6M4	295	58	9			
SD201	単層	弧状	6L5・10, 8L6・7	460	39	6		土師器有×無台椀	
SD202	単層	弧状	7L8・9・10	－	54	20	SD40より古い		
SD203	単層	弧状	8L2・7・12	－	64	12	SD40より古い		
SD204	単層	弧状	7L10, 8L1・2・3	－	100	9		土師器長釜×鍋・小片	
SD205	単層	弧状	8K23・24	－	74	10		土師器有×無台椀	
SD206	単層	弧状	7K25, 8K17	－	22	5			
SD207	単層	弧状	7K15・20, 8K16・17	400	24	5		土師器有×無台椀・小片	
SD208	単層	弧状	8K17・18・19	－	18	2			
SD209	単層	弧状	8K18・19	－	15	3			畑作溝
SD210	単層	弧状	8K18・19	－	19	3			畑作溝
SD211	単層	弧状	8K16・17	92	22	6		土師器小釜、黒色土器有×無台椀	畑作溝
SD212	単層	弧状	8K11・12・13・14	－	23	2		須恵器無台杯、土師器無台椀・長釜×鍋	畑作溝
SD213	単層	弧状	7K13	75	14	6			畑作溝
SD214	単層	弧状	7K15, 8K11・12・13・14	－	25	3			畑作溝
SD215	単層	弧状	8J22, 8K2	318	68	6	SD218より古い	須恵器甕、土師器無台椀・長釜×鍋・小片	
SD216	単層	弧状	8J21・22・23	310	150	10	SD217・218より古い	須恵器無台杯・甕、土師器無台椀・小釜・長釜×鍋・小片、灰釉陶器椀×皿	
SD217	単層	弧状	8J21・22・23・24	－	37	11	SD216より新しく SD218より古い	土師質土器皿R1類、須恵器壺瓶類	
SD218	単層	弧状	8J17・22	－	15	7	SD215・216・217より新しい	土師器小片	
SD219	単層	弧状	8K3・4	－	42	4		土師器小片	
SK220	単層	半円状	8J17	59	50	19		土師器長釜×鍋・小片	
SD221	単層	弧状	8J17・18・24	－	37	5		土師器長釜×鍋・小片	
SD222	単層	弧状	8J13・18	－	32	7		須恵器甕、土師器小釜・小片	
SX223	不明	不明	8J13・14・19	－	－	－		須恵器甕、土師器無台椀・長釜×鍋・小片、黒色土器有台椀	
SD224	単層	弧状	8J21		17	7		土師器小片	
SD225	不明	不明	8K23	－	19	4			畑作溝
畦畔226	－	－	7L24, 7M5, 8M6・11	－	13	－			
8K-P1	単層	弧状	8K3	15	15	3			
8K-P2	単層	弧状	8K7	58	46	14			
8K-P3	単層	弧状	8K7	50	42	12		土師器小片	
8K-P5	単層	弧状	8K9	24	20	7			
8L-P6	不明	台形状	8L13	20	17	29			
8L-P7	不明	台形状	8L13	25	22	12			

小峯遺跡土器・陶磁器観察表（1）

No.	種類	器種	分類	大グリッド	小グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	調整	回転方向	備考
1	土師器	無台椀		18E	5・10	SK1 SD5				6.0	黒・白色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り	右	
2	土師器	無台椀		18E	5	SK1				5.0	白・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
3	須恵器	無台椀		18E	5	SK2		13.0	4.4	5.2	C1群?	内外ロクロナデ、底外回転糸切り	右	
4	須恵器	無台杯		18E		SK2		12.5	3.1	8.5	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り	左	A区不明
5	土師器	無台椀		18F/19F	25/21	SK3		17.0	5.9	6.0	黒・灰・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
6	土師質	皿	T1類	18F/19F	25/21	SK3		11.6	2.3	－	黒・白・赤色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
7	土師質	皿	T1類	12N	19	SD40		12.0			灰・白・赤色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
8	土師質	皿	R2類	12M	11	SD40	Ⅲb層	12.8	2.1	9.4	灰・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
9	土師質	小皿	R2類			SD40				5.6	赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		C1区
10	土師質	皿	R1類			SD40	Ⅲb層			6.0	砂粒多	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		D2区
11	土師質	皿	R1類	11M	10	SD40	Ⅲb層			5.4	砂粒多	内外ロクロナデ、底外回転糸切り	右	
12	土師器	有台椀		12M	11・18	SD40	Ⅲb層			5.6	灰・赤色粒混	内外ロクロナデ、高台貼付け		
13	青磁	皿	龍上田DⅡ類	8M・9M	1・4・5・6・9・10	SD40	Ⅲb層	10.0			－	内外無文		
14	白磁	椀	V-4類	12N	19	SD40	Ⅲb層	16.0			－	外櫛描文		
15	白磁	椀	Ⅳ類など	10M	20	SD40	Ⅱ層			7.4	－	内沈線、外露胎		
16	須恵器	壺瓶類		11M	10	SD40	Ⅱb層			5.6	C2群	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
17	須恵器	長頸瓶				SD40				12.0	B群	内外ロクロナデ、底外不調整、高台貼付け後ロクロナデ		C1区
18	須恵器	長頸瓶		9M	4・5・9・10	SD40				12.0	B群	内外ロクロナデ、底外不調整、高台貼付け後ロクロナデ	左	
19	土師器	無台椀				SD5	Ⅲ層			4.0	赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
20	土師器	無台椀				SD5	Ⅲ層			5.2	白・灰色粒混	摩耗で不明		
21	須恵器	有台椀		18E	25	SD5	Ⅲ層	14.0	5	7.0	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ		
22	青磁	椀	龍上田BⅡb類			SD41				5.6	－	見込み印刻花分、底部外面釉掻き取り		D2区
23	珠洲	すり鉢	V期	13M	18	SD41	Ⅱb層				海針、黒・白色粒混	内外ロクロナデ、内卸目		D2区
24	土師質	皿	T1類			SD8		11.6	2.6	－	白色粒・雲母混	内外ヨコナデ、底外不調整		
25	土師器	小釜		16DE		SD13				8.2	灰・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
26	須恵器	無台杯		9K		SK42		12.0	2.4	6.8	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り		
27	須恵器	有台杯		18E/19E	4・15/6	SD4	Ⅲ層			6.0	B群	内外ロクロナデ、底外ロクロケズリ、高台貼付け後ロクロナデ		
28	土師器	小釜		9L	3	P52		12.0		6.2	白・灰・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		口内炭化物
29	土師質	小皿	R1類	9K		SD44		7.8	2.1	3.8	白・黒色粒、雲母混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		口内炭化物
30	黒色土器	無台椀				SD4	Ⅲ層			8.0	白色粒混	内ヘラミガキ、外ロクロナデ、底外摩耗		
31	土師質	皿	T1類	9L	6	溝		11.6	3.1		黒・白・赤色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		B区
32	土師質	皿	T1類	17E		溝		12.2	2.4		黒・灰色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		A区
33	須恵器	有台椀		10L	18・24	SD47	Ⅲ層			8.4	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ		
34	須恵器	杯蓋					Ⅴ層	13.6			C2群	頂部ロクロケズリ、内外ロクロナデ	右	C2区、重ね焼きB2類
35	須恵器	有台杯		16D/16E/17C/17E/18D/19E	2・3・20/15/22/5/24/8		Ⅲ層	12.5	5.8	7.5	B群	内外ロクロナデ、底外ロクロケズリ、高台貼付け後ロクロナデ	左	A区
36	須恵器	有台杯		17E	2・7		Ⅲ層			6.6	B群	内外ロクロナデ、底外ロクロケズリ、高台貼付け後ロクロナデ		
37	須恵器	有台杯		19E	7・14		Ⅱ層			6.4	B群	内外ロクロナデ、高台貼付け後ロクロナデ		
38	須恵器	有台杯		13H			Ⅲ層			6.0	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ		
39	須恵器	有台杯		18G	5		Ⅲ層			6.4	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ		
40	須恵器	無台杯		17F/18D/18E/19E	5・23/23/5・25/12		Ⅲ層	11.8	3	6.5	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り		
41	須恵器	無台杯		18D	23		Ⅲ層	12.6	2.8	8.2	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り		
42	須恵器	無台杯?		18E/19E	42048		Ⅲ層			5.6	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り	左	
43	須恵器	無台椀		18E/19E/19F	10/13/9		Ⅲ層			8.0	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り		
44	須恵器	有台椀		19E	16		Ⅲ層			7.4	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ		
45	須恵器	有台椀		16G/19E	15/11		Ⅱ層			8.4	B群	内外ロクロナデ、高台貼付け後ロクロナデ		
46	須恵器	有台椀		9K	13		Ⅲ層			9.0	B群	内外ロクロナデ、高台貼付け後ロクロナデ		
47	須恵器	有台椀		19F	11・21		Ⅲ層			8.0	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ		
48	須恵器	有台皿		11M	3		Ⅲ層	12.6	2.2	7.0	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ		C1区No.1032
49	灰釉陶器	小椀	K14?	16F	18		Ⅱ層			5.0	尾張?	内面全面施釉		
50	灰釉陶器	小椀	光ヶ丘	17E・18E	2・7・20		Ⅱ層	9.6	3.5	4.0	美濃	内面全面施釉		
51	灰釉陶器	皿	K90	18E/19E	2・3・4・14・24/21		Ⅲ層	15.0	2.5	6.6	尾張	刷毛塗り		
52	灰釉陶器	皿×椀	光ヶ丘	10L	2		Ⅲ層			8.0	美濃			
53	緑釉陶器	皿		15K/16J	7/1		Ⅱb層				東海			焼成軟質
54	土師器	無台椀		18E	5		Ⅲ層			7.8	白・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		

小峯遺跡土器・陶磁器観察表（2）

No.	種類	器種	分類	大グリッド	小グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	調整	回転方向	備考
55	土師器	無台椀		18E	5		Ⅲ層			6.5	黒・白色粒混	内・外上ロクロナデ、外下・底外ロクロケズリ		
56	土師器	無台椀		13H	6		Ⅲ層	12.4	4.6	4.5	黒・白色粒、長石混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
57	土師器	無台椀		16E	2		Ⅲ層			6.4	白・灰・赤色粒混	内ロクロナデ、外不明		内面はヨコナデで土師質土器T1類の可能性あり
58	土師器	無台椀		19D	8		Ⅲ層			5.0	白・灰色粒、海針混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
59	土師器	無台椀		9M			Ⅲb～Ⅴ層			5.0	白・灰・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
60	土師器	無台椀		18E	4		Ⅲ層			4.0	白・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
61	土師器	無台椀		16D	10		Ⅱ層		1.3		白・灰色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
62	土師器	無台椀		18E	9		Ⅱ層			4.0	白色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
63	土師器	無台椀		17F	1		Ⅲ層			4.8	白・灰・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り	右	
64	土師器	無台椀		10F	11		Ⅱ層			7.0	白・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
65	土師質	皿	R1類							5.8	白色粒、海針混	内外ロクロナデ、底外摩耗		C1区 No.106・136
66	土師質	皿	R1類	9K	7		Ⅲ層			5.8	黒・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
67	土師質	皿	R1類							5.4	砂粒多	内外ロクロナデ、底外摩耗		D2区No.111
68	土師質	皿	R1類	9K	16～18		Ⅲb層			4.4	黒・白色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
69	土師質	皿	R1類	17G	18		Ⅱ層			5.0	白色粒、雲母混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
70	土師質	皿	R1類	10L	8		Ⅱ層			6.0	白・赤色粒混、雲母混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
71	土師質	皿	R1類	9J	24		Ⅲ層			4.0	黒・白色粒、雲母混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
72	土師質	小皿	R1類	12H			Ⅲ層	8.6	2.5	3.4	黒色粒・雲母混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
73	土師質	小皿	R1類	9L	15		Ⅱ層	8.8	1.9	5.2	黒・白色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
74	土師質	小皿	R1類	9L	11・6		Ⅲb層		1.7		白色粒混	内外ロクロナデ		
75	土師質	小皿	R1類	12H			Ⅲb層			3.8	黒・白色粒、雲母混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り		
76	土師器	無台椀		19E	11		Ⅱ層			4.0	黒・白色粒混	内外ロクロナデ、底外回転糸切り	右	
77	土師器	無台椀		19E	1		Ⅲ層			3.9	黒・白色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
78	土師質	小皿	R1類	10L	20		Ⅱ層			3.0	砂粒多	内外ロクロナデ、底外摩耗		
79	土師質	小皿	R1類	8L	18～20		Ⅲb層			4.0	黒・白色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		内面黒化
80	土師質	小皿	R1類	9L	3・4		Ⅲb層			3.8	白・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
81	土師器	無台椀		19E	11		Ⅱ層			4.6	赤色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
82	土師質	小皿	R1類	10L	8		Ⅱ層			2.8	白・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
83	土師質	小皿	R1類	10K	25		Ⅱ層			3.4	砂粒多	内外ロクロナデ、底外摩耗		
84	土師質	小皿	R1類	南北サブトレ中央（東側）			Ⅲb層			3.4	白・赤色粒、雲母混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
85	土師質	小皿	R1類	東西サブトレ			Ⅲb層			3.8	黒・白色粒、雲母混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
86	土師質	小皿	R1類	9K	3					3.8	砂粒多	内外ロクロナデ、底外摩耗		
87	土師質	小皿	R1類	9K	17		Ⅲb層			3.4	黒色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
88	土師質	小皿	R1類	9K	16・17・21・22		Ⅳ層上面			3.4	黒・灰色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
89	土師質	小皿	R1類				Ⅲb層			4.0	黒・白色粒	内外ロクロナデ、底外摩耗		D1区
90	黒色土器	有台椀		19K・19L	22・23		Ⅲ層				白・灰色粒、長石・雲母混	内ヘラミガキ、外ロクロナデ、高台貼付け		
91	黒色土器	有台椀		19D	8		Ⅲ層				白・赤色粒混	内ヘラミガキ、外ロクロナデ、高台貼付け		
92	黒色土器	有台椀		19K	14		Ⅲ層				黒・白色粒、雲母混	内ヘラミガキ、外ロクロナデ、高台貼付け		
93	黒色土器	有台椀		19E	7		Ⅲ層			6.6	白・赤色粒混	内ヘラミガキ、外ロクロナデ、高台貼付け		
94	黒色土器?	有台椀		10L	19		Ⅱ層			7.0	砂粒多	内外摩耗		
95	土師器	有台椀		18G	5		Ⅲ層			6.0	黒・白色粒混	内外摩耗		
96	土師器	有台椀		10K	19		Ⅱ層			7.0	白・赤色粒混	内摩耗、外ロクロナデ、底外高台貼付け後ロクロナデ		
97	土師器	有台椀		B区暗渠						8.0	赤色粒・雲母混	内外ロクロナデ、高台貼付け後ロクロナデ		
98	土師器	有台椀		10K	12		Ⅱ層	5.6	1.5	5.6	砂粒多	内外ロクロナデ、高台貼付け後ロクロナデ		
99	土師器	有台椀		19K	22		Ⅲ層			6.4	砂粒多	内外ロクロナデ、高台貼付け後ロクロナデ		
100	土師器	有台椀		9L	8・9		Ⅲb層			4.4	砂粒多	内摩耗、外ロクロナデ、底外高台貼付け後ロクロナデ		
101	土師器	有台椀		9L	22・17		Ⅲb層				黒・赤色粒混	内外ロクロナデ、高台貼付け後ロクロナデ		
102	土師器	長釜		9K	7		Ⅲ層	21.0			白色粒混	内外ロクロナデ		
103	土師器	長釜		18E	5		Ⅲ層	21.0			黒・白色粒混	内外ロクロナデ		
104	土師器	長釜		11M	7		Ⅲb層	22.0			白・赤色粒混	内外ロクロナデ		D2区
105	土師器	甑		13N	16		Ⅱb層	21.0			白色粒混	内外ロクロナデ		
106	土師器	小釜		9L	8		Ⅲ層	11.5			白色粒混	内外ロクロナデ		
107	土師器	小釜		9L	8・9		Ⅲb層	12.0			白・赤色粒混	内外ロクロナデ		
108	土師器	小釜		18E	4		Ⅲ層			6.0	白色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		
109	土師器	把手									白・灰色粒混	内外面摩耗		D1区
110	土師器	把手									黒・白・赤色粒混	内外面摩耗		D2区No.61

小峯遺跡土器・陶磁器観察表（3）

No.	種類	器種	分類	大グリッド	小グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	調整	回転方向	備考
111	須恵器	壺蓋		D2区サブトレ			Ⅲ層	11.8			B群	内外ロクロナデ		
112	須恵器	長頸瓶		17D/18E/19E	11/2・5/25		Ⅲ層	14.0			C2群	内外ロクロナデ		
113	須恵器	長頸瓶		9K	25		Ⅲ層	18.0			B群	内外ロクロナデ		
114	須恵器	長頸瓶		17H	12		Ⅲ層	18.0			B群	内外ロクロナデ		
115	須恵器	長頸瓶		16D	1		Ⅱ層	16.4			B群	内外ロクロナデ		
116	須恵器	水瓶		17E/18E/18F/19E	5・10/10・12・13/10・16/1・18		Ⅲ層				B群	内ロクロナデ、外ロクロナデ・沈線		
117	須恵器	長頸瓶		9L	3・4		Ⅲb層			6.6	B群	内外ロクロナデ、底外回転篦切り、高台貼付け後ロクロナデ		
118	須恵器	鉢						21.0			B群	内外ロクロナデ		SD40付近、C1区No.25, 1017, 1031
119	土師質	皿	T1類	11M	7		Ⅱb層	12.0			黒・白・赤色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		畦畔102上
120	土師質	皿	T1類	9L	3		Ⅲ層	12.0			白・灰・赤色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
121	土師質	皿	T1類	17H	6		Ⅱ層	12.8	3	－	黒・白色粒混	内外摩耗		
122	土師質	皿	T1類	9M	7		Ⅱ層	12.0	2.7	－	黒・白・赤色粒、雲母混	内外ヨコナデ、底外不調整		
123	土師質	皿	T1類					11.8	2.6	－	白色粒・雲母混	内外ヨコナデ、底外不調整		D2区
124	土師質	皿	T1類	17H	6		Ⅱ	11.6	2.8	－	白・赤色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
125	土師質	皿	T1類	調査区西端			Ⅲb～Ⅴ層	11.8			黒・白色粒、雲母混	内外ヨコナデ、底外不調整		C2区
126	土師質	皿	T1類	12N	3		Ⅲb層	11.8			黒・白・赤色粒、雲母混	内外ヨコナデ、底外不調整		D2区
127	土師質	皿	R2類	7P西壁サブトレ						7.0	黒・赤色粒混	内外ロクロナデ、底外摩耗		C2区
128	土師質	皿	T2類	11N	8		Ⅱb層	12.0			黒色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		D2区
129	土師質	皿	T2類	9L	13		Ⅱ層	13.6			黒色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
130	土師質	皿	T2類	18G	5		Ⅲ層	11.0	1.7		黒・白色色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
131	土師質	皿	T2類	12N	10・15		Ⅱb層	11.0			精良	内外ヨコナデ、底外不調整		
132	土師質	小皿	T1類	12N	10・15		Ⅱb層	8.0	1.7	－	黒・白色粒	内外ヨコナデ、底外不調整		
133	土師質	小皿	T1類	12M杭周辺				8.2	1.6	－	黒色粒・雲母混	内外ヨコナデ、底外不調整		D2区
134	土師質	小皿	T1類	土側溝（東北）			Ⅲ層	7.6	1.5	－	黒・白色粒、雲母混	内外ヨコナデ、底外不調整		D2区
135	土師質	小皿	T1類					8.0	1.7	－	黒・白色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		C1区No.103
136	土師質	小皿	R2類	土側溝				7.2	1.9	5.0	精良	内外ロクロナデ、底外回転糸切り	右	
137	土師質	小皿	R2類	19E	17		Ⅲ層	7.0			赤色粒混	内外ロクロナデ		
138	土師質	小皿	T2類	14J	15		Ⅱb層	9.2	2.0		黒色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
139	土師質	小皿	T2類	19E	22		Ⅲ層	8.6	1.6		黒色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
140	土師質	小皿	T2類	9L	15		Ⅱ層	7.4			黒色粒混	内外ヨコナデ、底外不調整		
141	土師器	羽釜?		9K	22		Ⅲb層				砂粒多	不明		
142	青磁	椀	龍Ⅱa類	10M	23		Ⅲ層	15.6			－	蓮弁文（鎬無し）		
143	青磁	椀	龍Ⅱb類	19E	21		Ⅱ層	15.4			－	蓮弁文（鎬有り）		
144	青磁	椀	龍Ⅰ類	18E	4		Ⅱ層	15.0			－	無文、釉薬薄い		龍上田EⅡ類の可能性有
145	青磁	小椀	龍上田C類	17F	19		Ⅱ層	12.2			－	雷文		
146	青磁	椀	龍上田C類	表採				15.0			－	雷文		B区
147	青磁	椀	龍上田BⅣ類	12M				14.8			－	篦描蓮弁文		D2区
148	青磁	椀	龍上田BⅣ'類	6P	サブトレ			15.0			－	篦描蓮弁文		漆継ぎ
149	青磁	小椀	龍上田BⅣ'類				Ⅲb層	11.4			－	篦描蓮弁文		D1区
150	青磁	椀	龍上田D×EⅡ類	17F	6		Ⅱ層			6.8	－	高台内側施釉		
151	青磁	椀	龍上田D×EⅡ類	暗渠						6.4	－	底部外面無釉		B区
152	青磁	椀	龍Ⅱc類	19E	20		Ⅱ層			8.0	－			
153	青磁	椀	龍上田Ⅳ類	18D	12		Ⅱ層			4.4	－	底部外面施釉		
154	青磁	盤	龍Ⅲ類	16K	12		Ⅱb層			8.0	－	底部外面無釉		龍Ⅲ類
155	青磁	香炉	龍	16G	5		Ⅱ層	14.0			－	外面沈線		漆継ぎ
156	青磁	香炉	龍	17G	23		Ⅱ層	10.0			－	外面瓜胴風		
157	青磁	香炉	龍	18F	25		Ⅱ層			7.0	－			
158	白磁	四耳壺	Ⅲ類	17H	12		Ⅱ層	10.0			－			
159	青白磁	梅瓶									－	外面毛彫り		
160	白磁	杯	森田D類	12M	1		Ⅱb層			3.4	－	高台無釉		底外墨書
161	白磁	皿	森田D類	7Q	西壁サブトレ					4.2	－	見込み目跡、高台無釉、割り高台		
162	白磁	皿	森田D類	19F	2		Ⅱ層	9.6	2.8	3.6	－	高台無釉		
163	瀬戸美濃	天目椀	後期～大窯	12M	19		Ⅱb層	11.2			－	内外施釉		
164	瀬戸美濃	天目椀	後期～大窯	南端表土剝ぎ			Ⅲb層			4.7	－	底部外面無釉		
165	瀬戸美濃	皿	後期～大窯	20E	21		Ⅱ層			6.0	－	全面施釉		
166	瀬戸美濃	燭台		9M	8		Ⅱ層	4.2	2.2	2.4	－	外面無釉		
167	瀬戸美濃	卸皿		18E	7		Ⅱ層				－	内外無釉		
168	志野	皿		17F	12		Ⅱ層		1.5	6.0	－	内面鉄絵草花文		
169	肥前系陶器	蓋		8M	14・15		Ⅲb層	5.2	1.4	2.1	－	内面無釉		C1区No.1040
170	肥前系陶器	小皿		15J	11		Ⅱb層	8.2	2.2	4.4	－	底内外摩耗		
171	瀬戸美濃	平鉢		17G	10		Ⅱ			13.8	－	内外無釉		

小峯遺跡土器・陶磁器観察表（4）

No.	種類	器種	分類	大グリッド	小グリッド	遺構	層位	口径	器高	底径	胎土	調整	回転方向	備考
172	瀬戸美濃	瓶子		サブトレ			Ⅲ				－	外面花文		D2区
173	珠洲	擂鉢		8・9N			Ⅱb～Ⅲb				海針			
174	珠洲	擂鉢		11K			Ⅲ				海針			
175	珠洲	擂鉢		17F	2		Ⅱ				海針			
176	珠洲	擂鉢		16D	5		Ⅱ				海針			
177	珠洲	小鉢		17D	15		Ⅱ				海針			
178	珠洲	小鉢		10K	19		Ⅱ				海針			
179	肥前系陶器	擂鉢		17D	6		Ⅱ							
180	珠洲	壺T種		15D，暗渠	15		Ⅲ				海針			
181	土師器	非ロクロ釜類		18E	19		Ⅲ			10.0	黒・白色粒混	内外摩耗		
182	土師器	小型土器?		10K	3		Ⅱ層			3.0	黒・白色粒混	内外摩耗		
183	縄文土器	深鉢		13M	22		Ⅲb				黒・白・赤色粒混	外LR縄文		

小峯遺跡土製品観察表

No.	器種	グリッド	遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	遺存状況	備　考
184	紡錘車?		SD44	Ⅱ層	4.0	3.6	3.8	42.5	下部欠	中央の穴が貫通しない。未成品か?
185	陶錘	16C5		Ⅱ層	2.7	3.5	3.5	32.0	略完	酸化硬質
186	土錘			Ⅲb層	6.0	2.8	1.5	18.1	過半欠	酸化軟質、D1区、186～189は同一個体か
187	土錘				3.4	2.7	1.3	7.6	過半欠	酸化軟質、D1区
188	土錘			Ⅱb層	6.5	3.2	1.6	17.9	過半欠	酸化軟質、D1区
189	土錘			Ⅲb層	6.6	3.3	1.9	33.0	過半欠	酸化軟質、D1区
190	転用研削具	9L1		Ⅲ層	8.2	7.2	2.4	139.5	略完	須恵器甕胴部破片を素材とする
191	転用研削具	10L17		Ⅱ層	4.5	5.0	1.1	20.1	略完	珠洲甕×壺T胴部破片を素材とする
192	転用研削具	18F6		Ⅱ層	2.3	2.5	1.1	7.1	略完	珠洲甕×壺T胴部破片を素材とする
193	不明	18F23		Ⅱ層	3.6	4.7	1.1	22.9	過半欠	酸化硬質

小峯遺跡石製品観察表

No.	器種	グリッド	遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	遺存状況	備　考
194	巡方				2.9	4.3	0.8	15.8	蛇紋岩	下部欠	
195	砥石	17H3		Ⅱ層	8.4	3.5	1.8	61.7	砂岩	下部欠	上部に貫通する小孔あり
196	砥石	8L23		Ⅲb層	8.0	3.7	2.8	130.5	凝灰岩	略完形	
197	砥石	11M15		Ⅲb層	6.1	4.3	3.2	96.9	流紋岩	上下欠	
198	石錘				7.9	8.1	2.3	202.2	安山岩	略完形	B区不明、縄文時代
199	叩き石		SD9		10.0	6.7	4.5	381.0	安山岩	過半欠	

小峯遺跡金属製品（銭貨）観察表

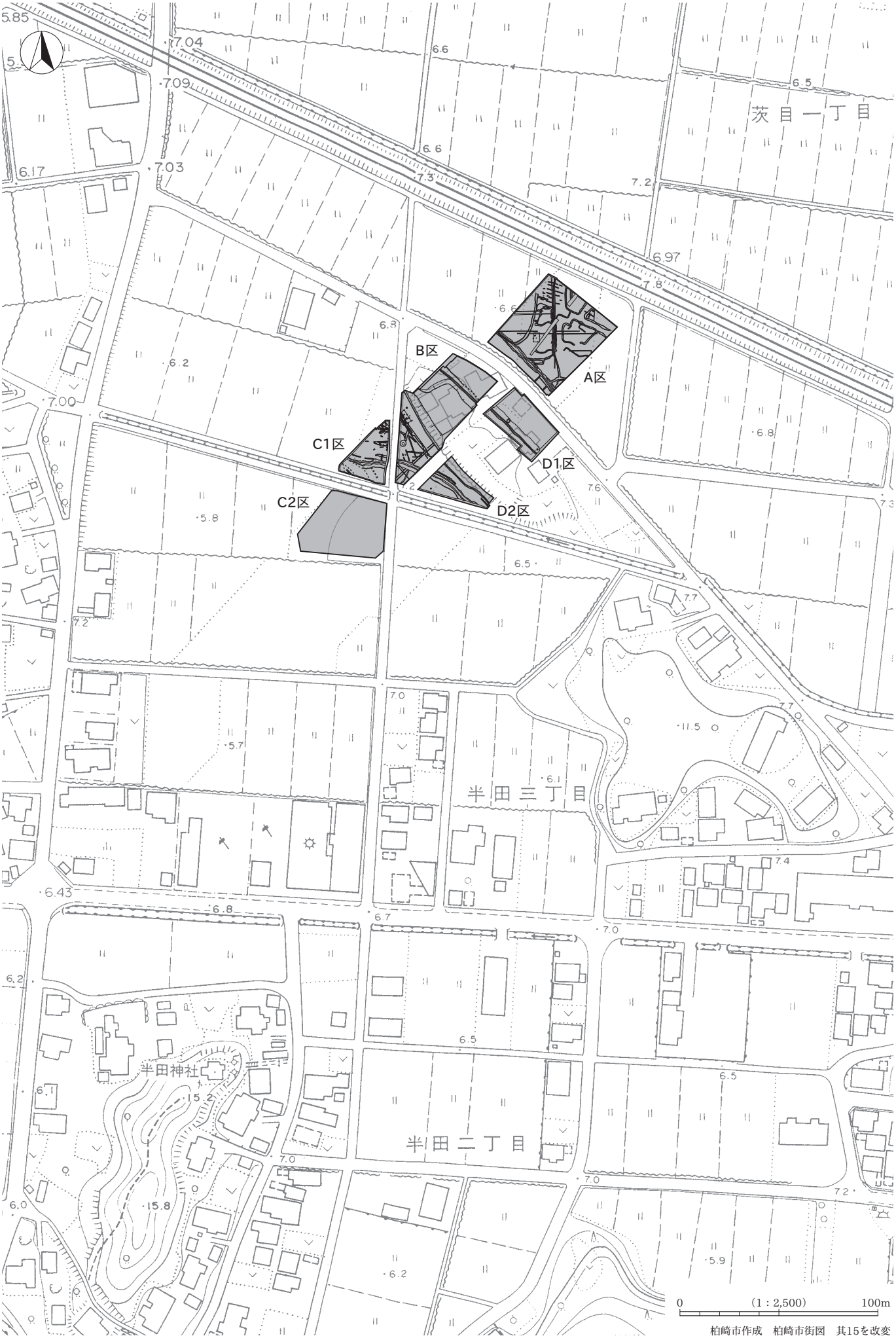
No.	銭貨	グリッド	遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	重量（g）	初鋳	国名	備　考
200	元豊通寶	15M14			2.40	2.40	3.0	1078年	北宋	
201	元豊通寶	18G2		Ⅱ層	2.45	2.45	2.8	1078年	北宋	
202	咸平通寶	12M18		Ⅱb層	2.30	2.30	2.0	998年	北宋	
203	元祐通寶	10M6		Ⅱ層	2.40	2.40	2.0	1086年	北宋	一部腐蝕
204	政和通寶	10M6		Ⅱ層	2.10	2.20	1.2	1111年	北宋	一部欠損
205	天聖元寶	10N8		Ⅱ層	2.45	2.45	2.6	1023年	北宋	
206	永楽通寶				2.45	2.45	2.4	1408年	北宋	D2区
207	朝鮮通寶				2.35	2.35	2.9	1423年	朝鮮王朝	C2区調査区西端

小峯遺跡木製品観察表

No.	器種	グリッド	遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	木取り	遺存状況	備　考
208	連歯下駄				20.8	7.6	台座：0.9 歯：1.7	柾目	約1/2欠?	表面の腐蝕が顕著
209	連歯下駄				21.6	9.6	台座：0.9 歯：2.1	板目	略完形	鋸痕あり
210	円形板				15.0	8.5	1.0	柾目	約1/2欠	直径17～18cm前後の円形板か?
211	漆器椀	18F20			3.8	4.6	0.5	横木　板目	過半欠	外面黒色漆、内面赤色漆

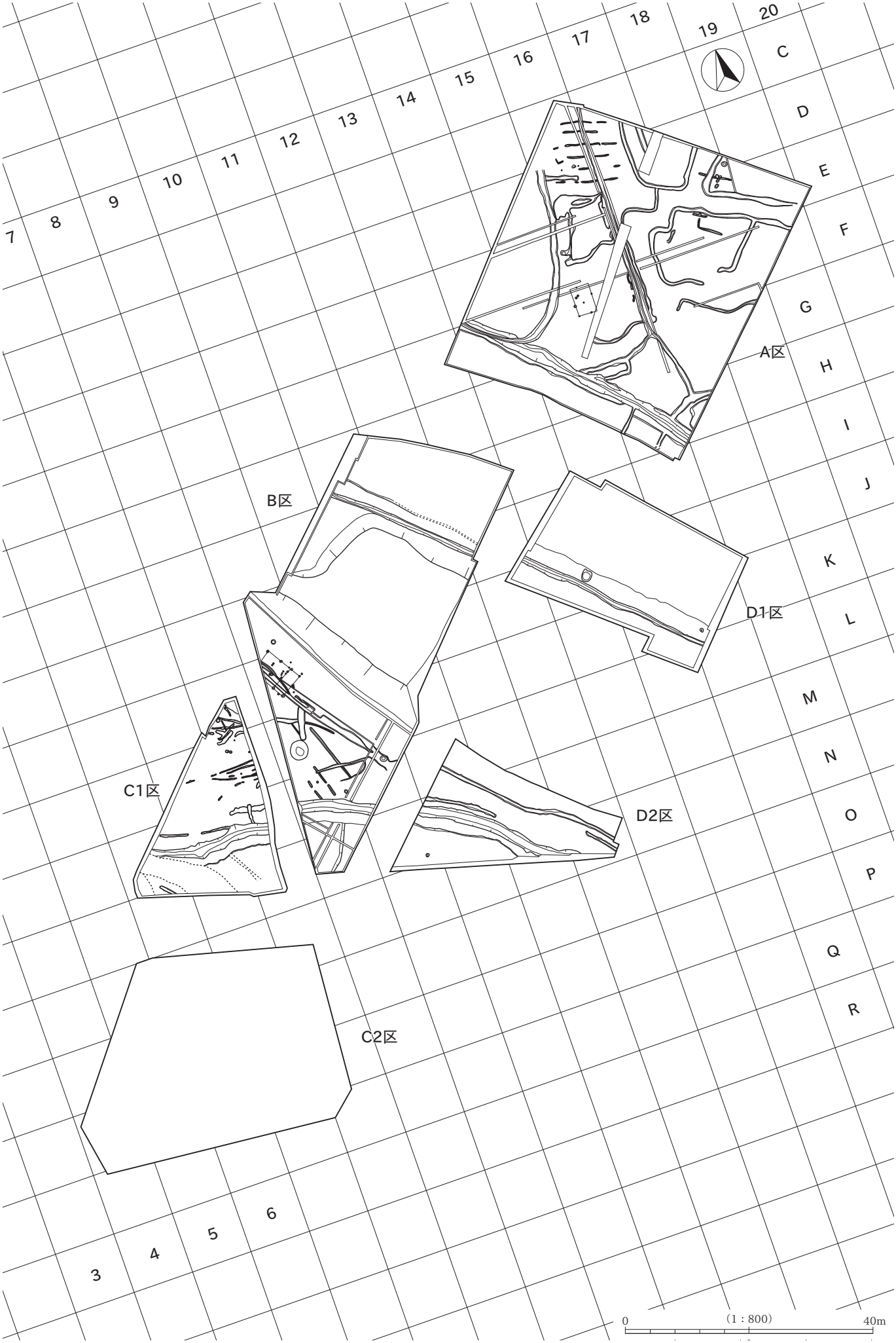
調査区位置図

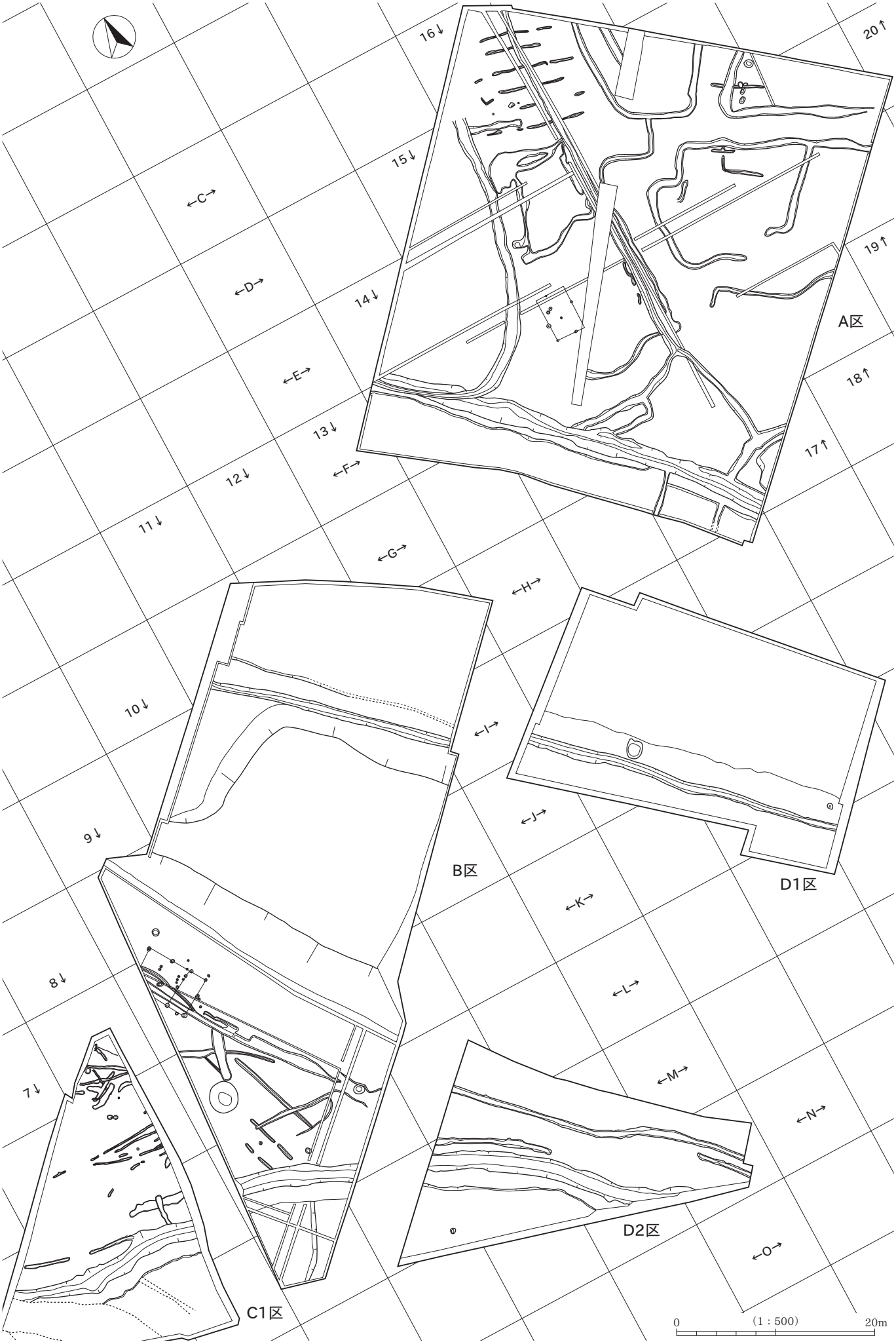
図 版 1



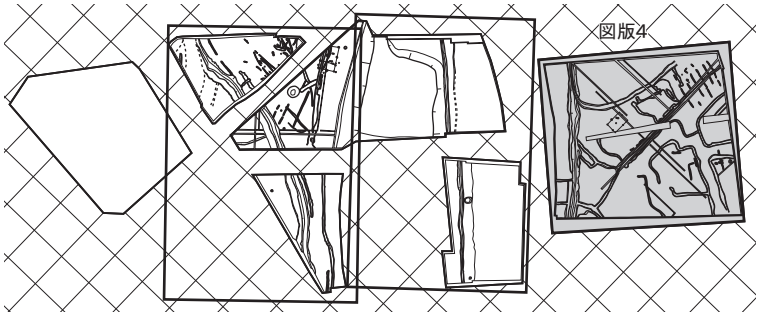
柏崎市作成　柏崎市街図　其15を改変

全体図

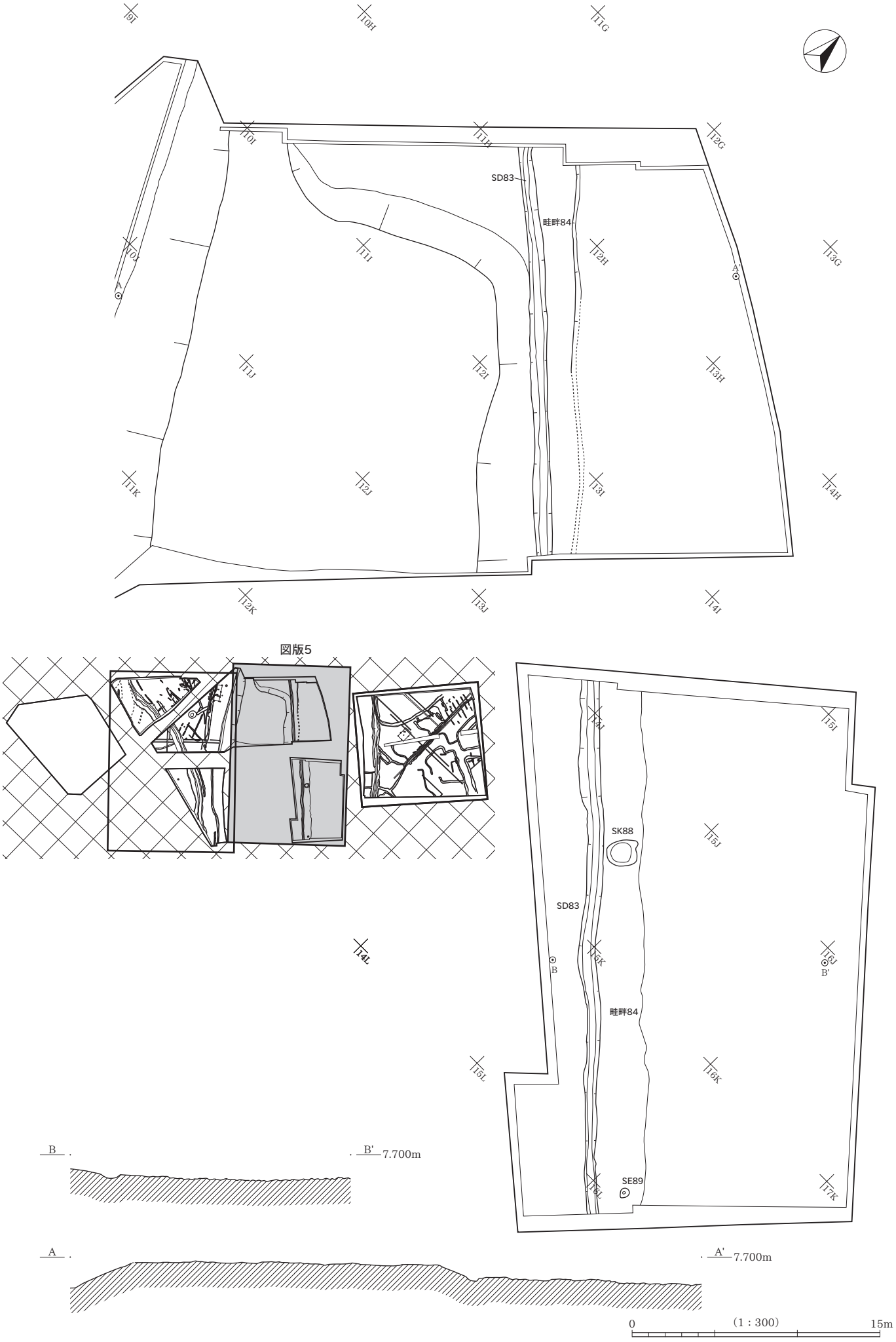

A区
B区
C1区
C2区
D1区
D2区
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
0
(1 : 800)
40m


A区
B区
C1区
D1区
D2区
7↓
8↓
9↓
10↓
11↓
12↓
13↓
14↓
15↓
16↓
17↑
18↑
19↑
20↑
←C→
←D→
←E→
←F→
←G→
←H→
←I→
←J→
←K→
←L→
←M→
←N→
←O→
0
(1：500)
20m

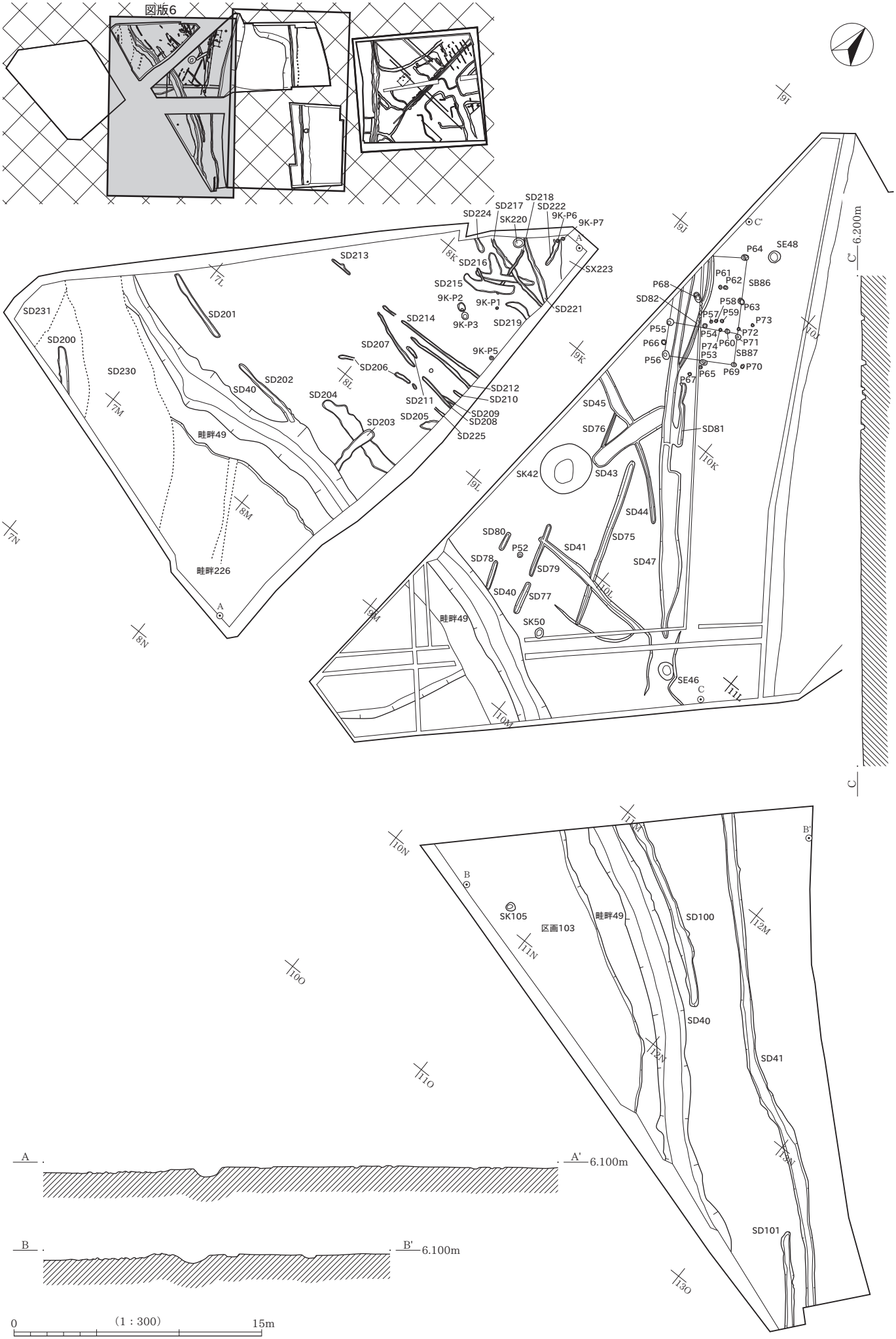
分割図2（A区）

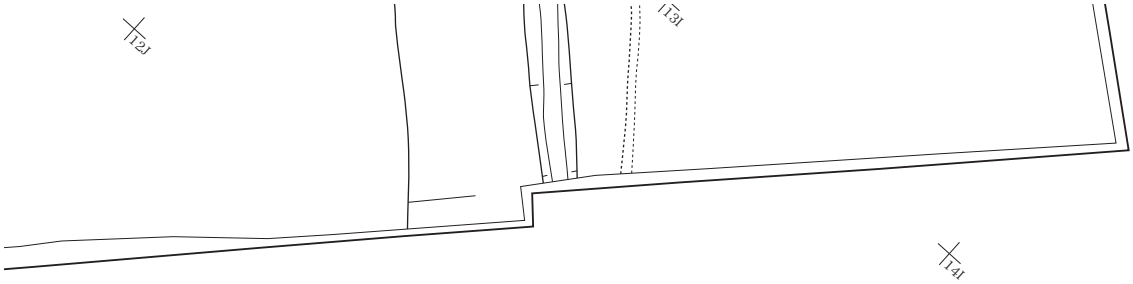


0 （1：300） 15m

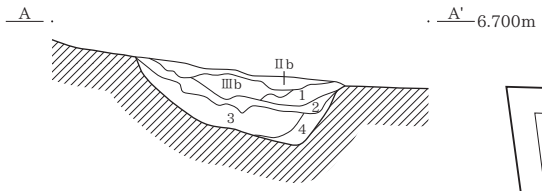

I9I
I10H
I11G
I10I
I11H
I12G
SD83
畦畔84
I10J
I11I
I12H
I13G
A
A'
I11J
I12I
I13H
I11K
I12J
I13I
I14H
I12K
I13J
I14I
図版5
I14J
I15I
SK88
I15J
SD83
I14L
I15K
I16J
B
B'
畦畔84
I15L
I16K
SE89
I14M
I17K
B
B'
7.700m
A
A'
7.700m
0
(1：300)
15m

分割図４（B 区・C1 区・D2 区）



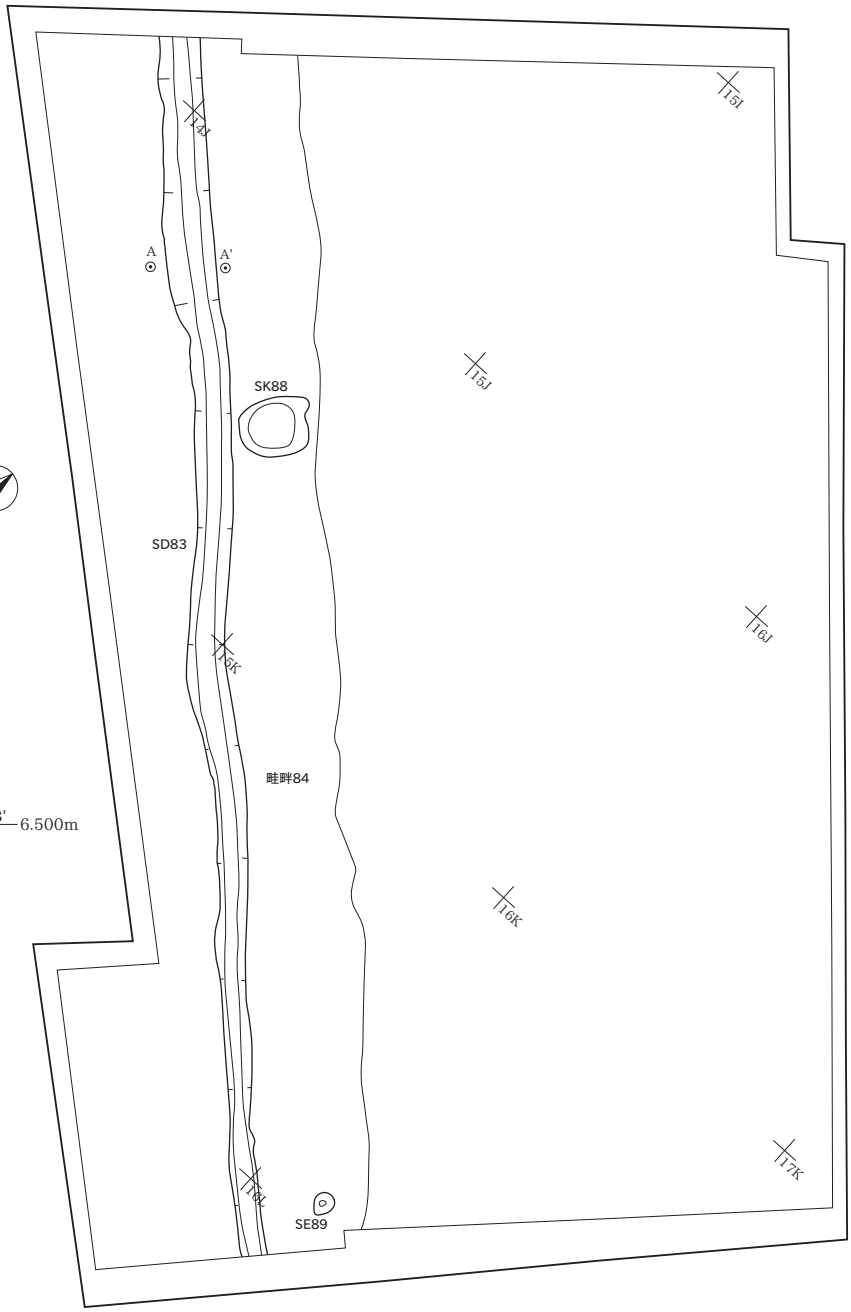


SD83

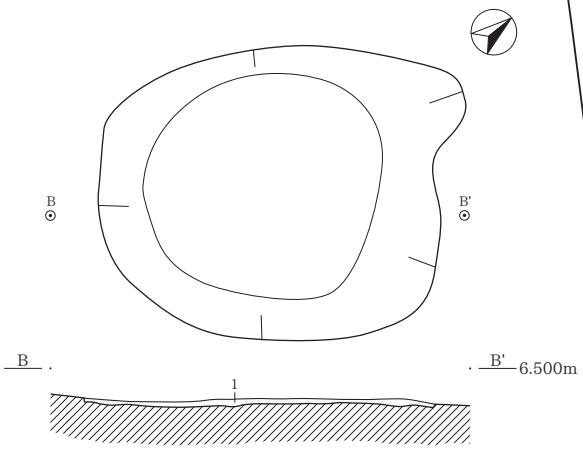


SD83
Ⅱb 層 褐灰色（10YR5/1）粘土
Ⅲb 層 黒褐色（10YR3/1）粘土　しまり強　酸化鉄粒多量・炭化物粒少量含む
1　褐灰色（10YR5/1）粘土　明褐灰（10YR7/6）粘土ブロック混じる
2　黒褐色（10YR3/1）粘土　しまり強　炭化物粒少量含む
3　黒褐色（10YR3/1）粘土　明褐灰（10YR7/6）粘土ブロック多量に混じる
4　黒褐色（10YR3/1）粘土　しまり強　炭化物粒少量含む

0　分割図（1：200）　10m

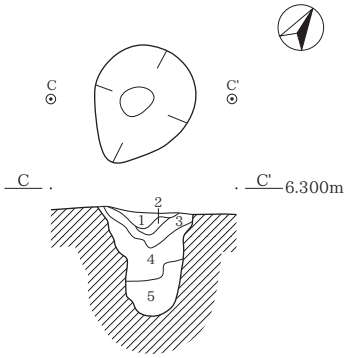


SK88



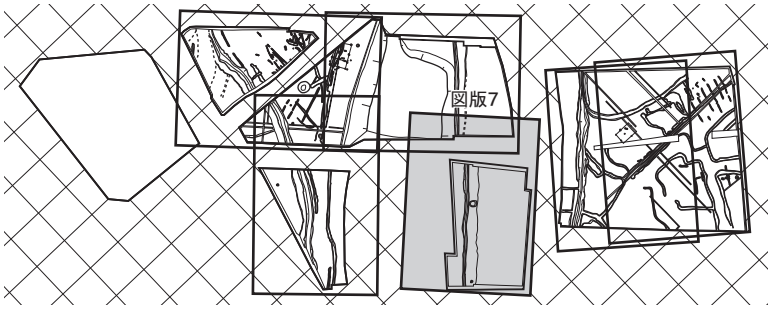
SK88
1　暗灰色粘土　土師器片含む　基本層序Ⅲb 層

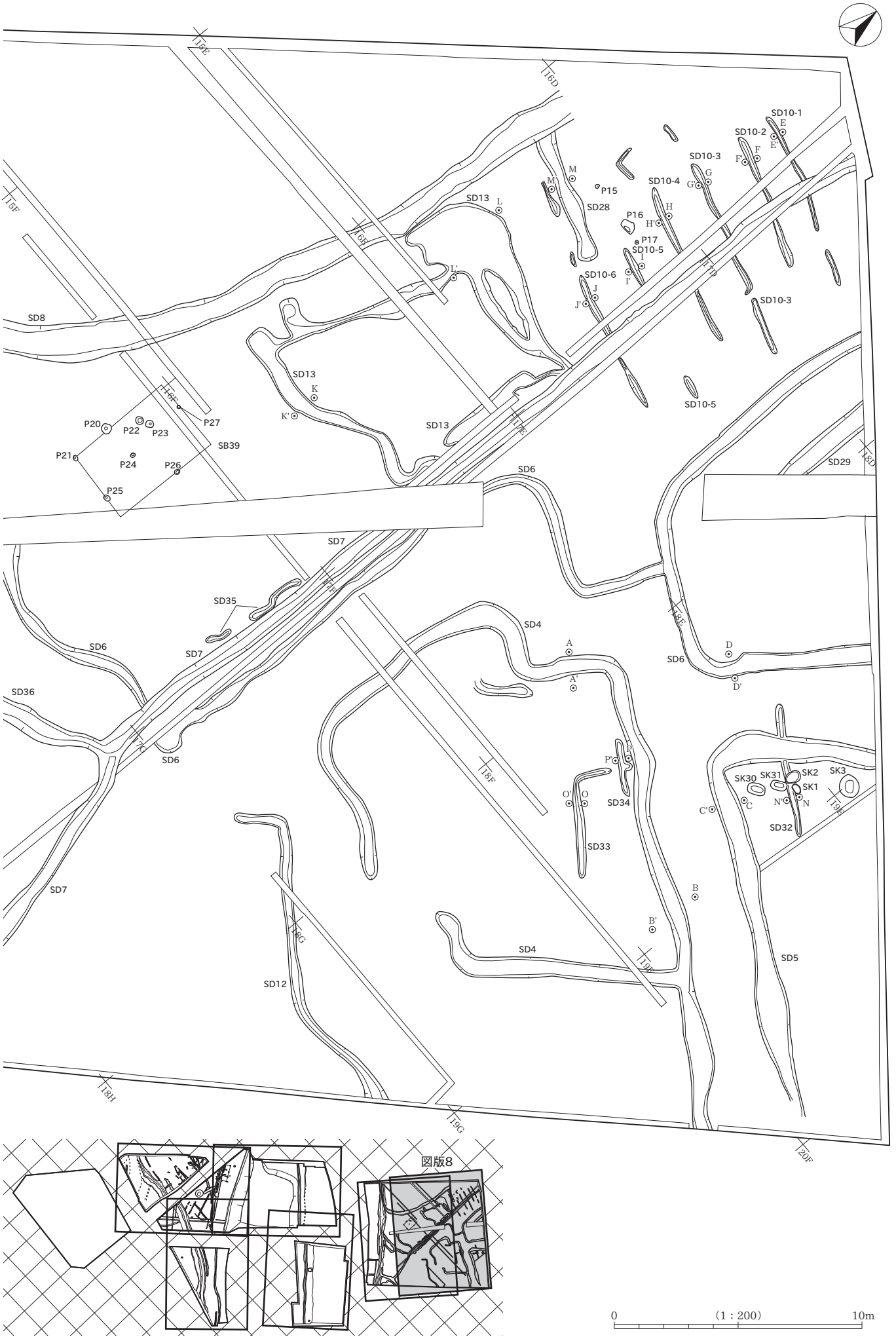
SE89



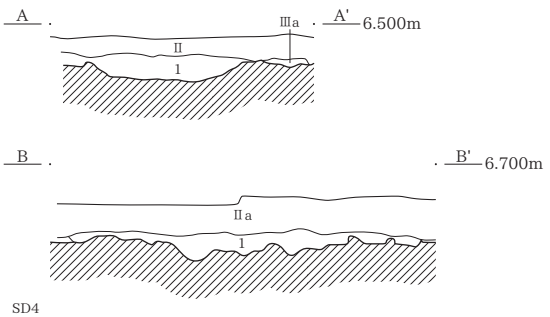
SE89
1　黒褐色（7.5YR3/1）粘土　灰オリーブ粘土ブロック少量含む
2　黒褐色（7.5YR3/1）粘土　混入土ほとんどなし
3　灰オリーブ色（7.5Y6/2）粘土　黒褐色土混じる
4　黒褐色（7.5YR3/1）粘土　5との境に鉄分沈着　白色粘土ブロック（1～5mm）混じる
5　黒褐色（7.5YR3/1）粘土

0　個別図（1：40）　2m



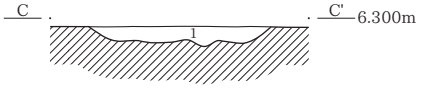

15E
16D
15F
16E
SD8
SD13
L
L'
M
M'
P15
SD28
P16
H'
H
P17
SD10-5
I
I'
SD10-6
J
J'
SD10-4
G'
G
SD10-3
F'
F
SD10-2
E'
E
SD10-1
SD10-3
SD10-5
SD13
K
K'
SD13
16F
P27
P20
P22
P23
P21
P24
P26
P25
SB39
17E
SD6
SD29
16D
SD7
17F
SD35
SD6
SD7
SD36
17C
SD6
SD4
A
A'
18E
D
D'
SD6
18F
P'
P
O'
O
SD34
SD33
SK30
SK31
SK2
SK1
SK3
C'
C
N'
N
19E
SD32
B
B'
SD4
19F
SD5
SD7
18G
SD12
18H
19G
20F
図版8
0
(1 : 200)
10m

SD4



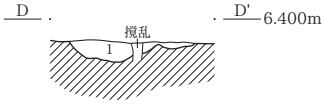
SD4
Ⅱa 層 青灰色（10GB5/1）粘土　明褐色（7.5YR7/2）粘土ブロック混　近・現代の水田耕作土
1　黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）含む　土器片多量に含む　基本層序Ⅲa 層

SD5



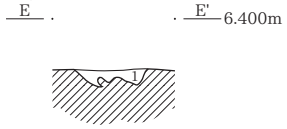
SD5
1　黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）・土器片含む　基本層序Ⅲa 層

SD6

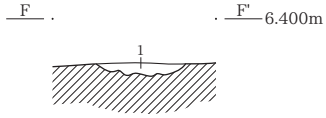


SD6
1　黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）・土器片含む　基本層序Ⅲa 層

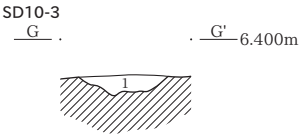
SD10-1



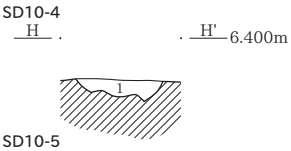
SD10-2



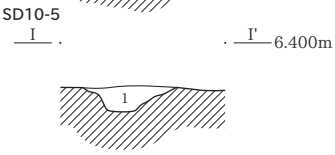
SD10-3



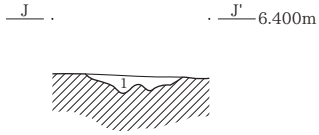
SD10-4



SD10-5

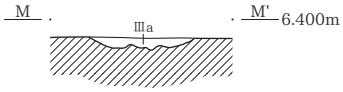


SD10-6



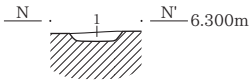
SD10-1～6
1　灰白色（5Y7/1）粘土
炭化物粒（径 1～5mm）含む

SD28



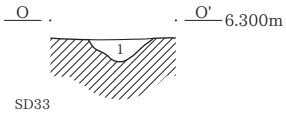
SD28
Ⅲa 層 黒褐色（5YR3/1）粘土
炭化物粒（1～10mm）含む　基本層序Ⅲa 層

SD32



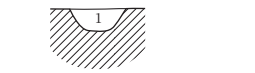
SD32
1　灰白色（2.5Y7/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）含む

SD33



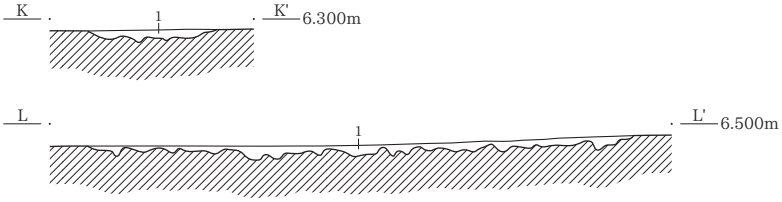
SD33
1　灰白色（2.5Y7/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）含む

SD34



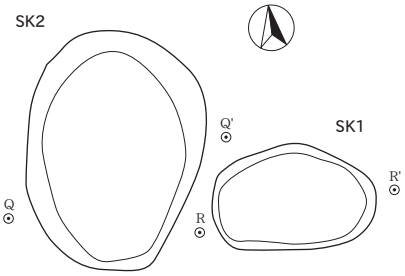
SD34
1　灰白色（2.5Y7/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）含む

SD13

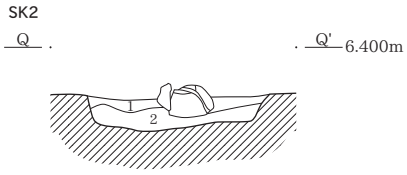


SD13
1　黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）・土器片含む　基本層序Ⅲa 層

SK2

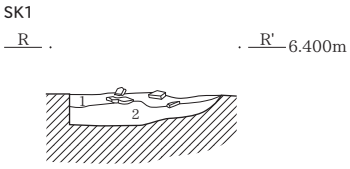


SK2



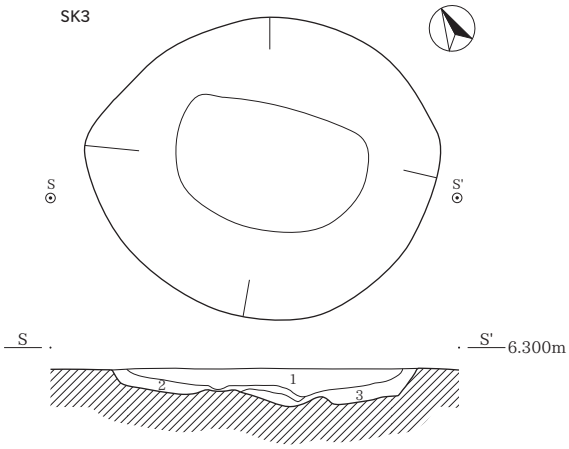
SK2
1　灰褐色（5YR4/2）粘土　粘性強　炭化物粒（径 1～2mm）・土器片多量に含む
2　褐灰色（7.5YR5/1）粘土 粘性強　炭化物粒（径 1～10mm）・土器片多量に含む

SK1



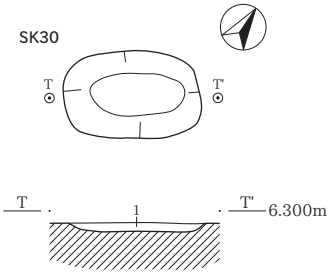
SK1
1　灰褐色（5YR4/2）粘土　粘性強　炭化物粒（径 1～2mm）・土器片多量に含む
2　褐灰色（7.5YR5/1）粘土 粘性強　炭化物粒（径 2～3mm）含む

SK3



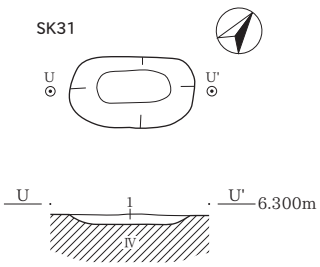
SK3
1　褐灰色（7.5YR4/1）粘土　土器片少量・炭化物粒（径 1～10mm）多量に含む
2　黒色（7.5YR1.7/1）炭化物層　土器片含む
3　灰黄褐色（10YR6/2）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）・土器含む

SK30



SK30
1　灰白色（2.5Y7/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）含む

SK31

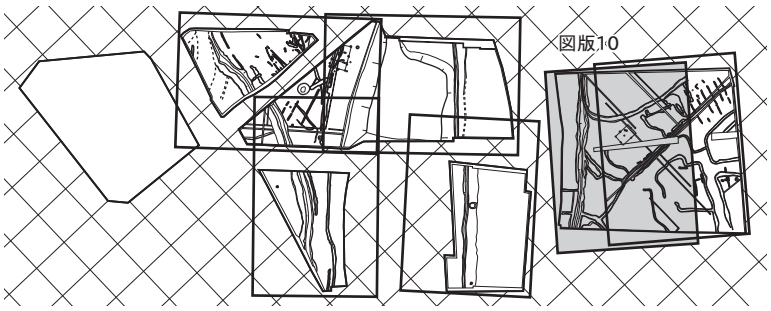


SK31
1　灰白色（2.5Y7/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）含む

0　SK1・2・3（1：20）　1m

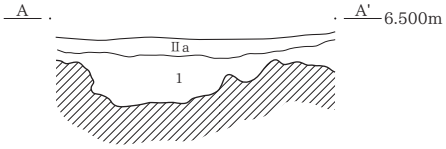
0　その他（1：40）　2m

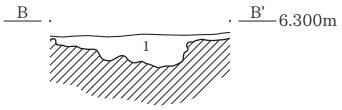
14F
15E
16D
15F
16E
SD13
SD8
C'
C
15G
16F
P27
SD9
P20
P22
P23
SB39
P21
P24
P26
P25
SD6
畦畔18
SD7
16G
A'
I
SD35
SD6
SD7
SD36
SD4
SD12
16H
H'
H
17G
18F
G'
G
D
D'
B'
B
SD7
17H
畦畔18
18G
E'
SD11
SD4
畦畔19
SD12
F'
E
F
畦畔14
17I
18H
19G


図版10

0　（1：200）　10m

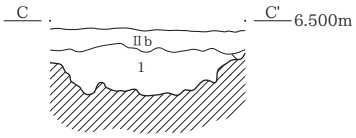
SD7





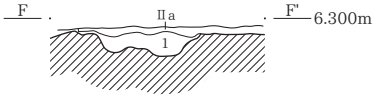
SD7
Ⅱa 層 青灰色（10BG5/1）粘土
明褐色（7.5YR7/2）の酸化した粘土ブロック混
近・現代の水田耕作土
1　黒褐色（5YR3/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）・土器片含む
基本層序Ⅲa 層

SD8



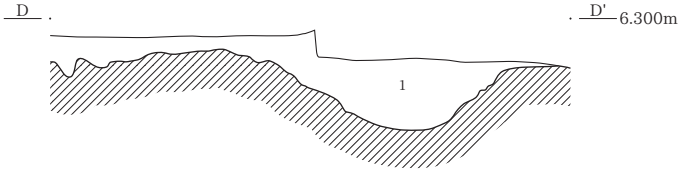
SD8
Ⅱb 層 暗青灰色（10BG4/1）粘土
Ⅱa 層より酸化が強く全体的に赤味が増す
1　暗青灰色（10BG4/1）粘土
明褐色（7.5YR7/2）粘土ブロック混

SD12



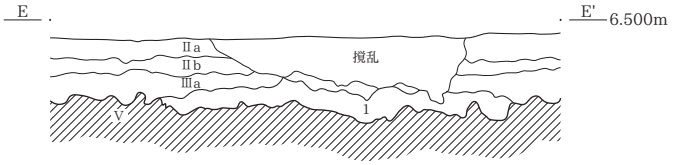
SD12
Ⅱa 層 青灰色（10GB5/1）粘土
明褐色（7.5YR7/2）粘土ブロック混
近・現代の水田耕作土
1　黒褐色（5YR3/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）含む
基本層序Ⅲa 層

SD9



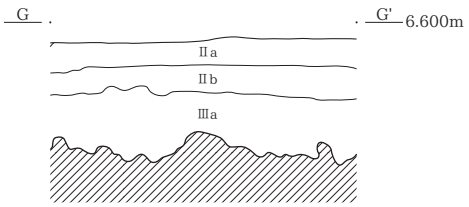
SD9
1　暗灰色（N3/）粘土　しまり強　酸化鉄粒多量・炭化物粒少量含む　基本層序Ⅲb 層

SD11



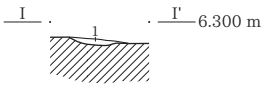
SD11
Ⅱa 層 青灰色（10BG5/1）粘土　明褐色（7.5YR7/2）粘土ブロック混　近・現代の水田耕作土
Ⅱb 層 暗青灰色（10BG4/1）粘土　Ⅱa 層より酸化が強く全体的に赤味が増す
Ⅲa 層 黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）含む
1　暗灰色（N3/）粘土　しまり強　酸化鉄粒多量・炭化物粒少量含む　基本層序Ⅲb 層

畦畔19



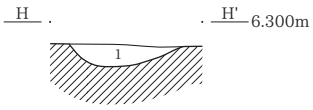
畦畔 19
Ⅱa 層　青灰色（10GB5/1）粘土　明褐色（7.5YR7/2）
粘土ブロック混　近・現代の水田耕作土
Ⅱb 層　暗青灰色（10BG4/1）粘土　Ⅱa 層より酸化が強く
全体的に赤味が増す
Ⅲa 層　黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）・
土器片含む

SD35



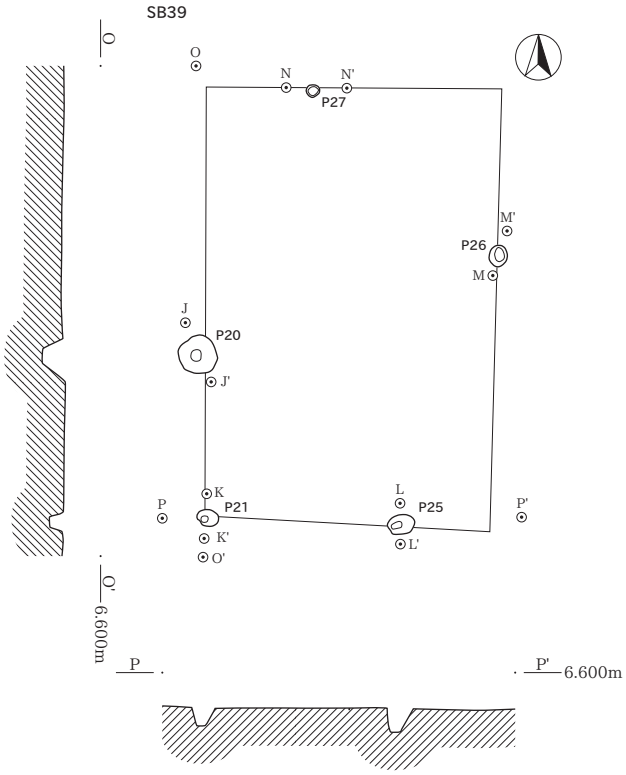
SD35
1　灰白色（2.5Y7/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）含む

SD36

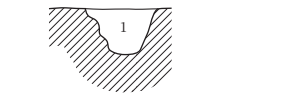


SD36
1　暗灰色（N3/）粘土
しまり強　酸化鉄粒多量・
炭化物粒少量含む
基本層序Ⅲb 層

SB39

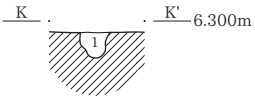


P20

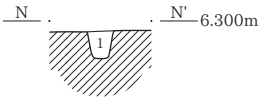


P26

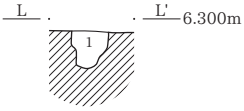
P21



P27



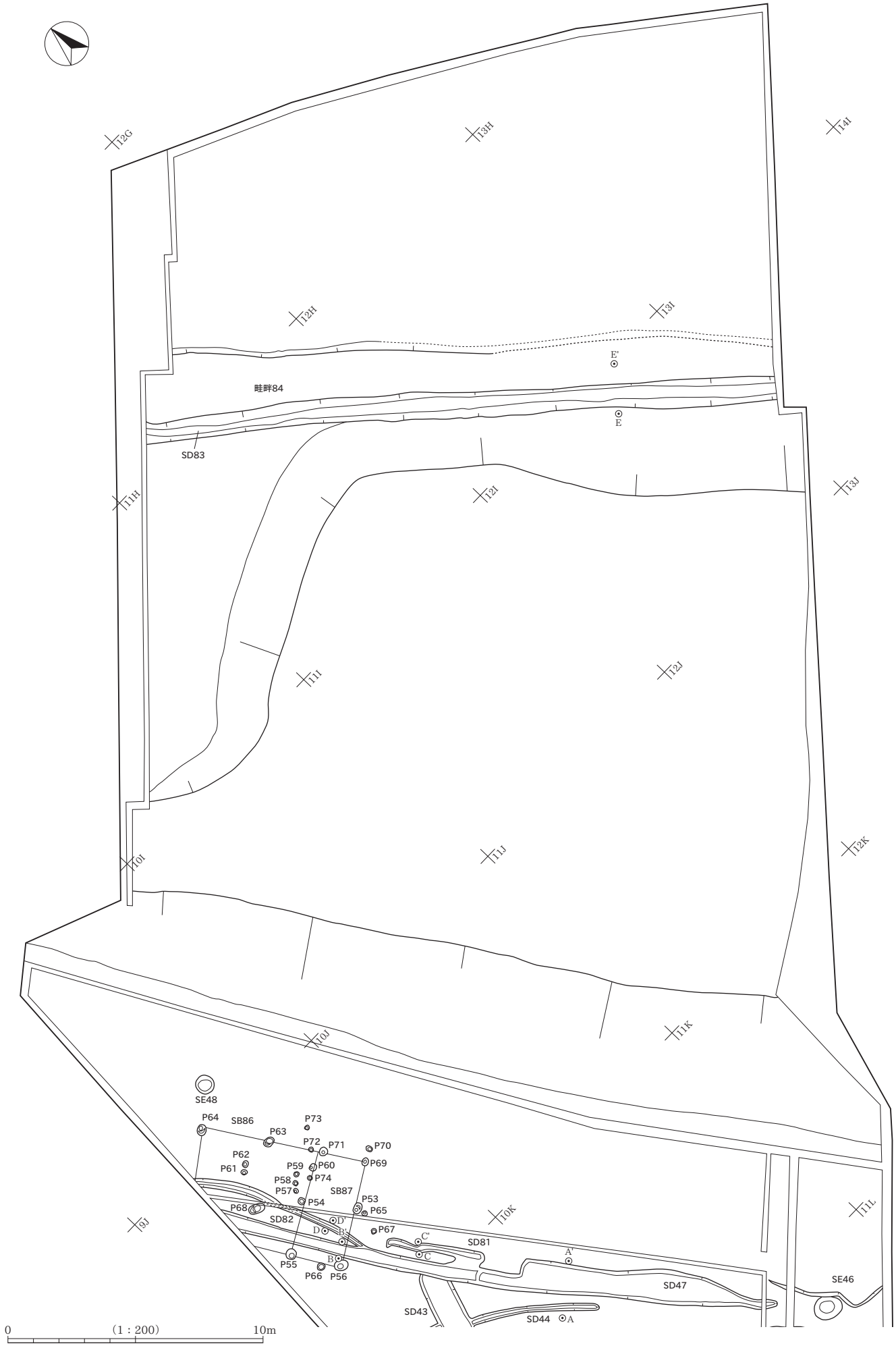
P25



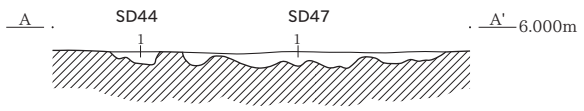
P20・21・25・26・27
1　灰白色（5Y7/1）粘土　炭化物粒（径 1～5mm）含む

0　SB39平面図・エレベーション図（1：80）　4m

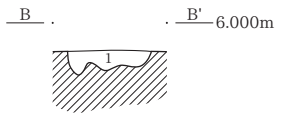
0　その他（1：40）　2m


12G
13H
14I
12H
13I
E'
畦畔84
E
SD83
11H
12I
13J
11I
12J
10I
11J
12K
10J
11K
SE48
P64
SB86
P63
P73
P72
P71
P70
P62
P61
P59
P60
P69
P58
P74
P57
SB87
P54
P53
P68
P65
SD82
D'
D
B'
P67
C'
SD81
C
A'
B
P55
P66
P56
10K
11L
9J
SD47
SE46
SD43
SD44
A
0
(1：200)
10m

SD44・47



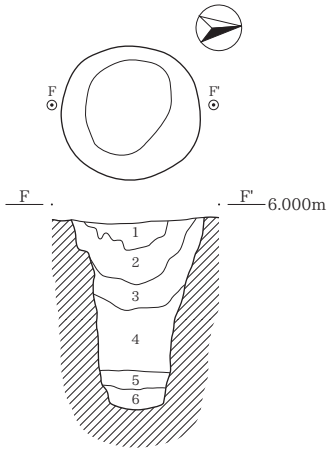
SD47



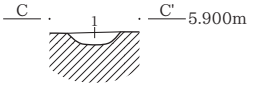
SD44
1　黒褐色（5YR3/1）粘土
　炭化物粒（径 1～10mm）・
　土器片含む　基本層序Ⅲa 層

SD47
1　暗灰色（N3/1）粘土
　基本層序Ⅲa 層

SE48

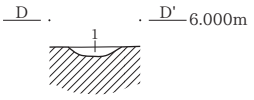


SD81



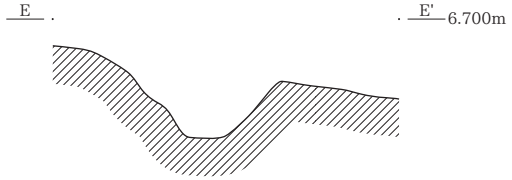
SD81
1　灰色（5Y5/1）粘土
　炭化物粒（径 1～20mm）
　多量含む

SD82



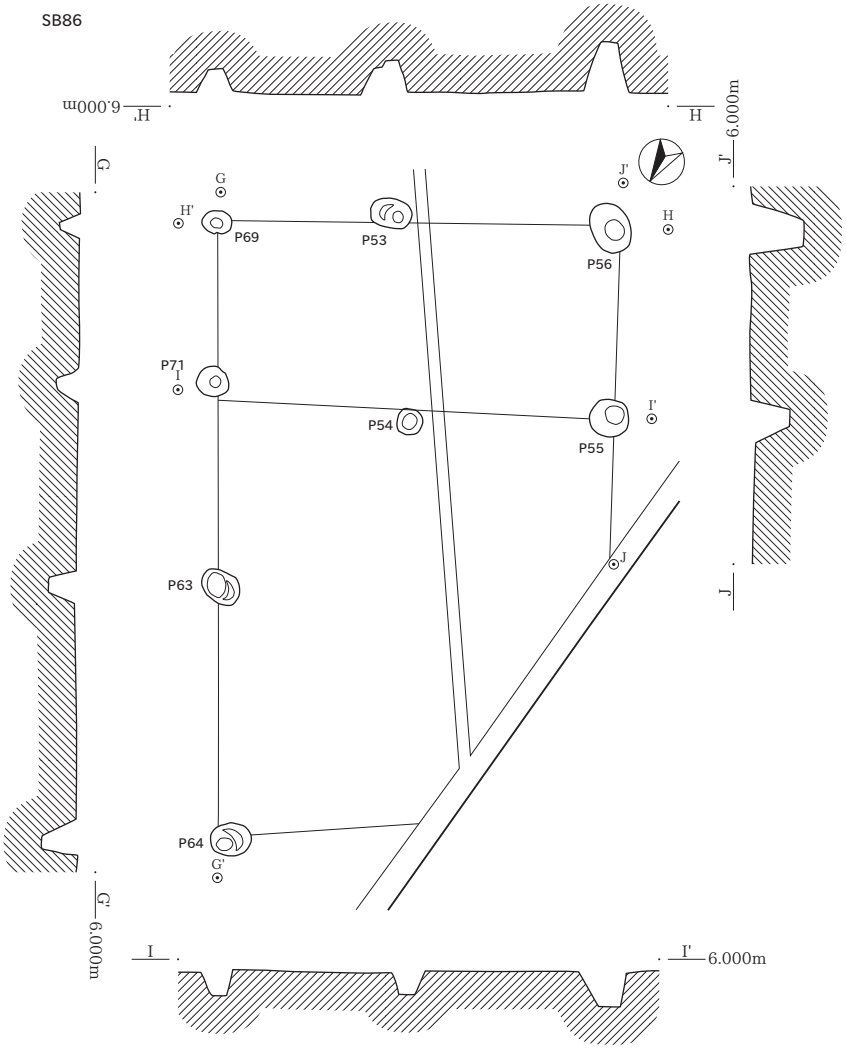
SD82
1　灰色（5Y5/1）粘土
　炭化物粒（径 1～20mm）
　多量含む

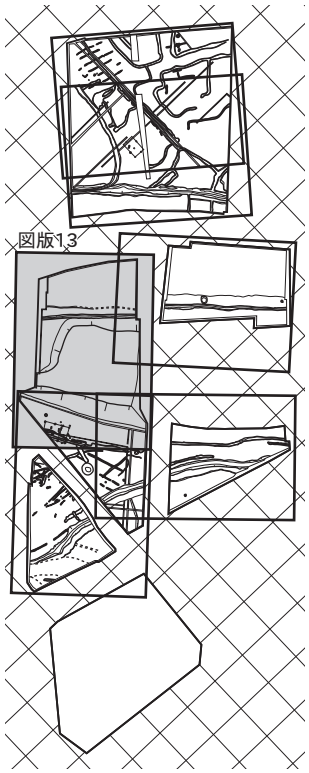
SD83



SE48
1　明褐灰色（7.5YR7/1）土 黄橙色（10YR8/8）粘土ブロック多く混じる
　しまり弱酸化鉄粒・炭化物粒含む
2　黒褐色（10YR3/1）粘土 灰白色（10YR8/1）粘土ブロック混　しまりや
　や強　酸化鉄粒・炭化物粒微量に含む
3　黒褐色（10YR3/1）粘土 灰白色（10YR8/1）粘土ブロック・砂粒が混じ
　る　しまり弱酸化鉄、炭化物粒少量含む　土器片が出土
4　黒褐色（10YR3/1）粘土 しまり弱
5　イネ科植物茎（葦・藁など）の堆積層
6　明青灰色（5B7/1）粘土

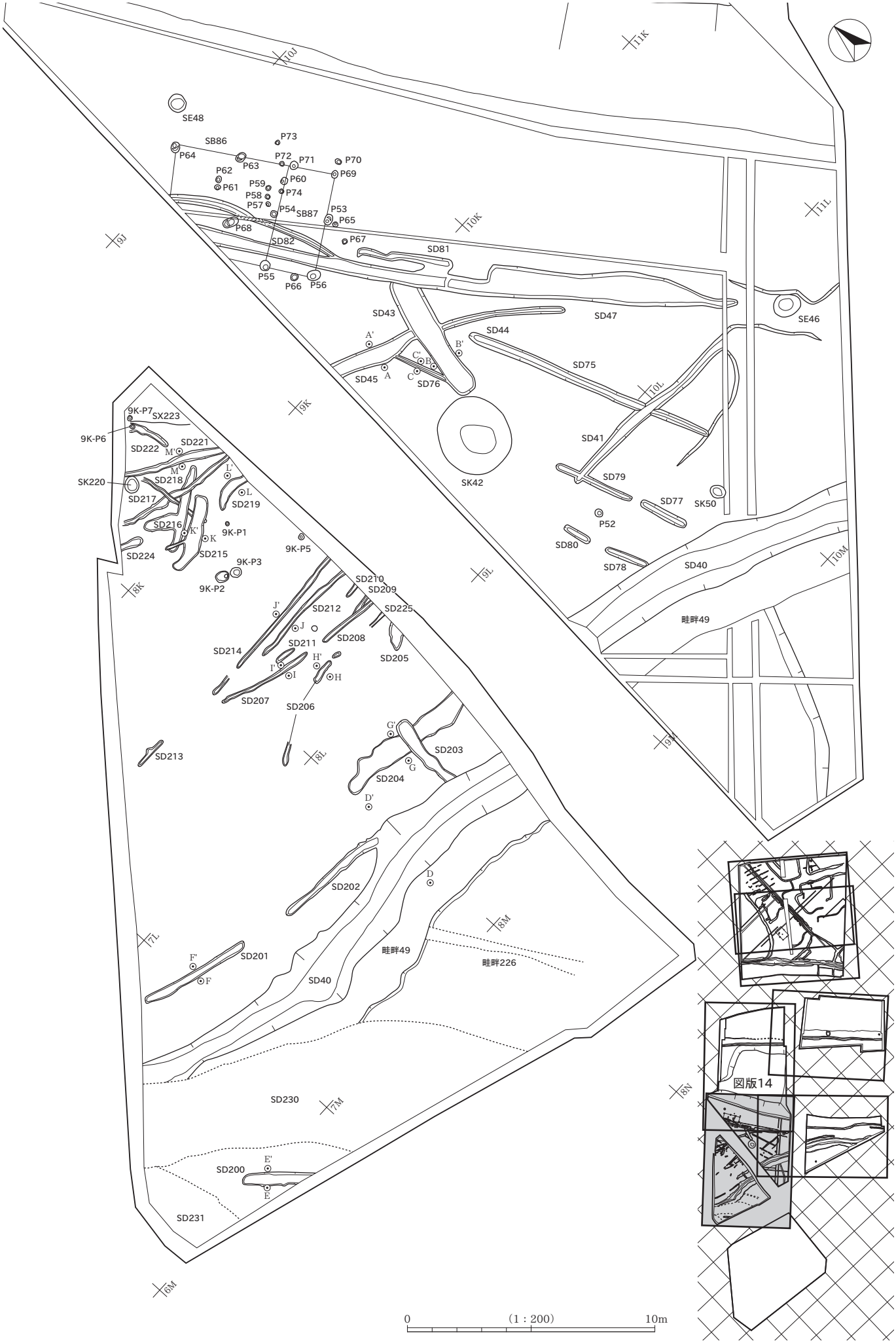
SB86



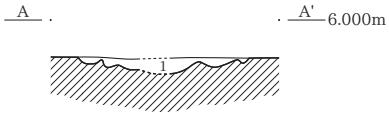


0　SB86平面図・エレベーション図（1：80）　4m

0　その他（1：40）　2m

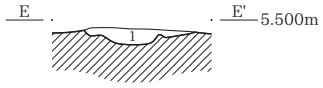

SE48
SB86
P73
P64
P63
P72
P71
P70
P62
P69
P61
P59
P60
P58
P74
P57
P54
SB87
P53
P65
P68
SD82
P67
SD81
P55
P66
P56
SD43
SD47
SE46
SD44
SD75
SD45
SD76
SD41
SK42
SD79
SD77
SK50
P52
SD80
SD78
SD40
畦畔49
9K-P7
SX223
9K-P6
SD222
SD221
SK220
SD218
SD217
SD219
SD216
9K-P1
SD224
SD215
9K-P5
9K-P3
9K-P2
SD210
SD209
SD212
SD225
SD211
SD208
SD214
SD205
SD207
SD206
SD213
SD203
SD204
SD202
畦畔49
畦畔226
SD201
SD40
SD230
SD200
SD231
図版14
0
(1：200)
10m

SD43



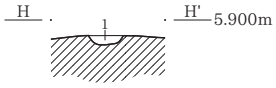
SD43
1　黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）・土器片含む　基本層序Ⅲa 層

SD200



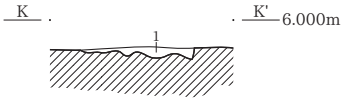
SD200
1　黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
明青灰色（10BG7/1）粘土ブロック（Ⅳ層）
混じる　炭化物粒（径 1～5mm）少量含む

SD206



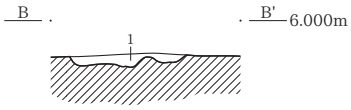
SD206
Ⅲb 層 黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
明青灰色（10BG7/1）粘土ブロック（Ⅳ層）混じる

SD215



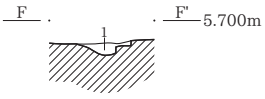
SD215
1　黒褐色（10YR3/2）粘土　混入物少ない
炭化物粒（径 2～10mm）・土器片含む
基本層序Ⅲb 層

SD45



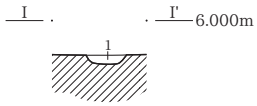
SD45
1　黒褐色（5YR3/1）粘土
炭化物粒（径 1～10mm）・土器片含む
基本層序Ⅲa 層

SD201



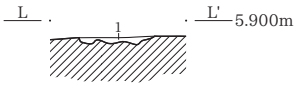
SD201
1　黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
明青灰色（10BG7/1）粘土ブロック（Ⅳ層）混じる　炭化物粒（径 1～2mm）微量に含む

SD207



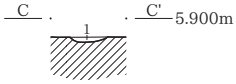
SD207
1　黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
明青灰色（10BG7/1）粘土ブロック（Ⅳ層）
混じる　炭化物粒（径 2～10mm）多く含む

SD219



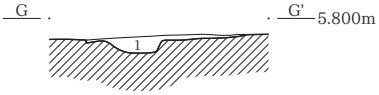
SD219
1　黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
明青灰色（10BG7/1）粘土ブロック（Ⅳ層）
混じる　炭化物粒（径 1～5mm）含む

SD76



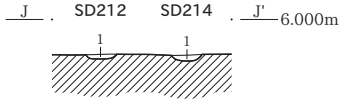
SD76
1　灰色（5Y5/1）粘土
炭化物粒（径 1～20mm）多量含む

SD204



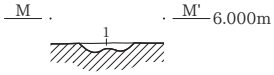
SD204
Ⅲb 層 黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
明青灰色（10BG7/1）粘土ブロック（Ⅳ層）
混じる

SD212・214



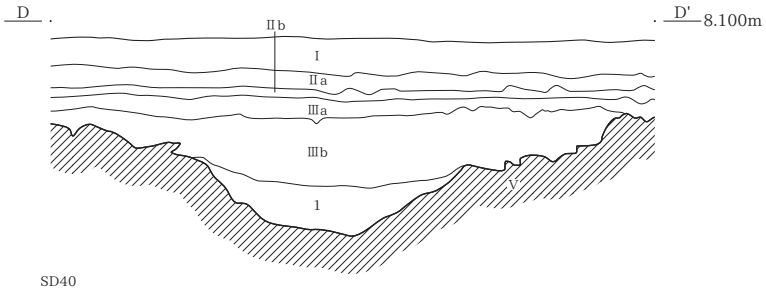
SD212・214
1　黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）　明青灰色（10BG7/1）粘土小ブロック（Ⅳ層）多く混じる　炭化物粒（径 2～10mm）多く含む

SD221



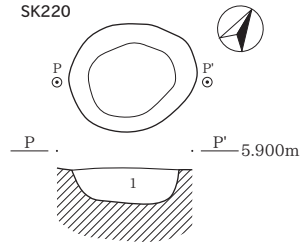
SD221
1　黒褐色（10YR3/2）粘土　炭化物粒（1～5mm）・土器片含む　基本層序Ⅲb 層

SD40



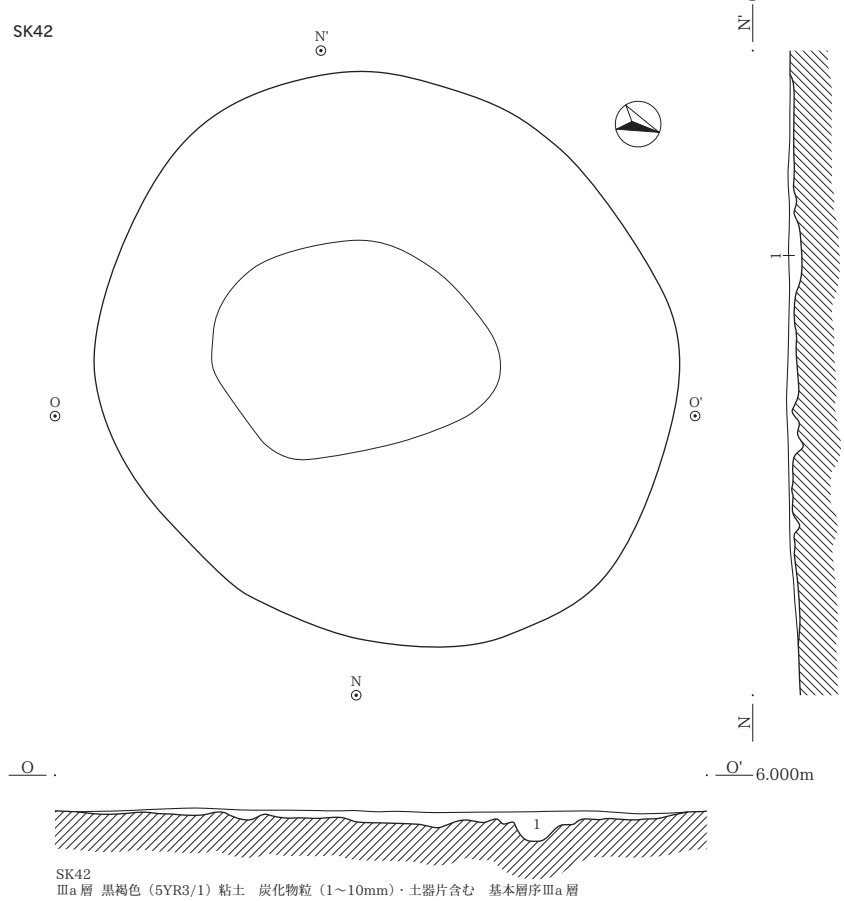
SD40
Ⅰ層　表土
Ⅱa 層 青灰色（10BG5/1）粘土　明褐色（7.5YR7/2）粘土ブロック混　近・現代の水田耕作土
Ⅱb 層 褐灰色（10YR4/1）粘土
Ⅲa 層 黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）含む
Ⅲb 層 黒褐色（10YR3/2）粘土　しまり強　酸化鉄粒多量・炭化物粒少量含む
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘土しまり弱・粘性中　明青灰色（10BG7/1）粘土ブロック多量に混じる
植物遺体多く含む

SK220



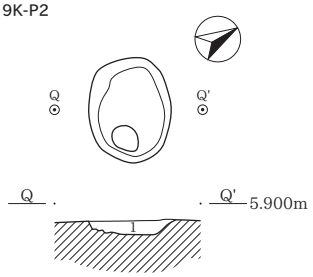
SK220
1　黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
明青灰色（10BG7/1）粘土ブロック（Ⅳ層）多く混じる　炭化物粒（径 5～10mm）少量含む

SK42



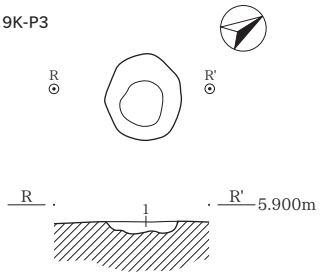
SK42
Ⅲa 層　黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（1～10mm）・土器片含む　基本層序Ⅲa 層

9K-P2



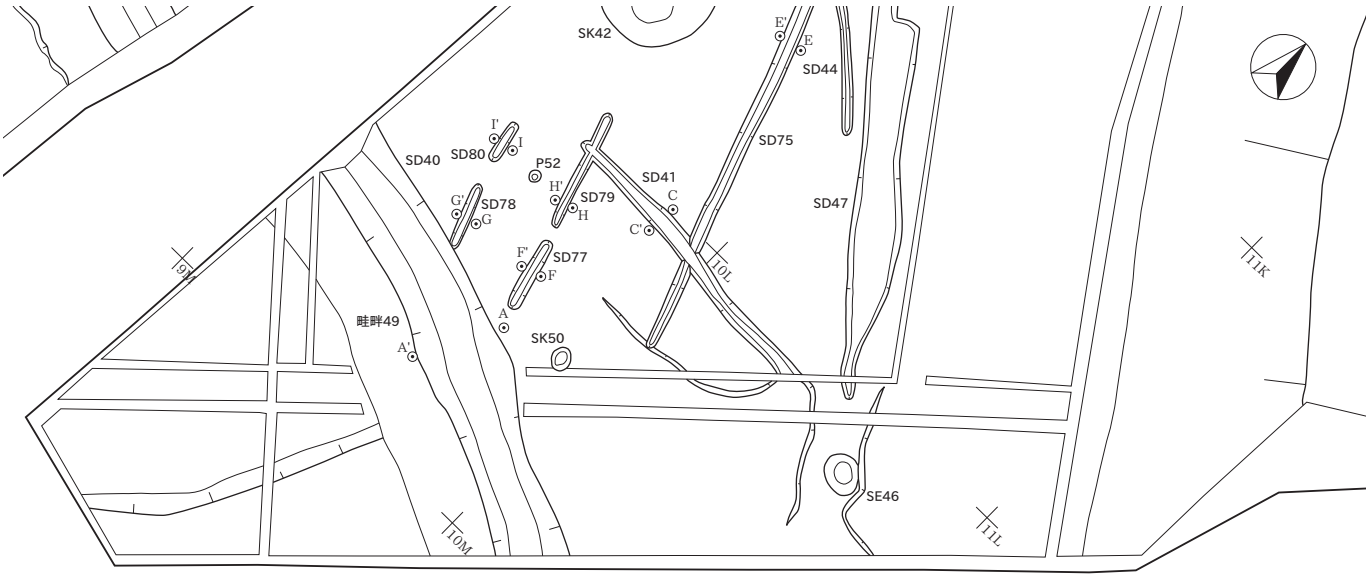
9KP2
1　黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
しまり強　明青灰色（10BG7/1）
粘土ブロック（Ⅳ層）混じる
炭化物粒（径 5～20mm）多く含む

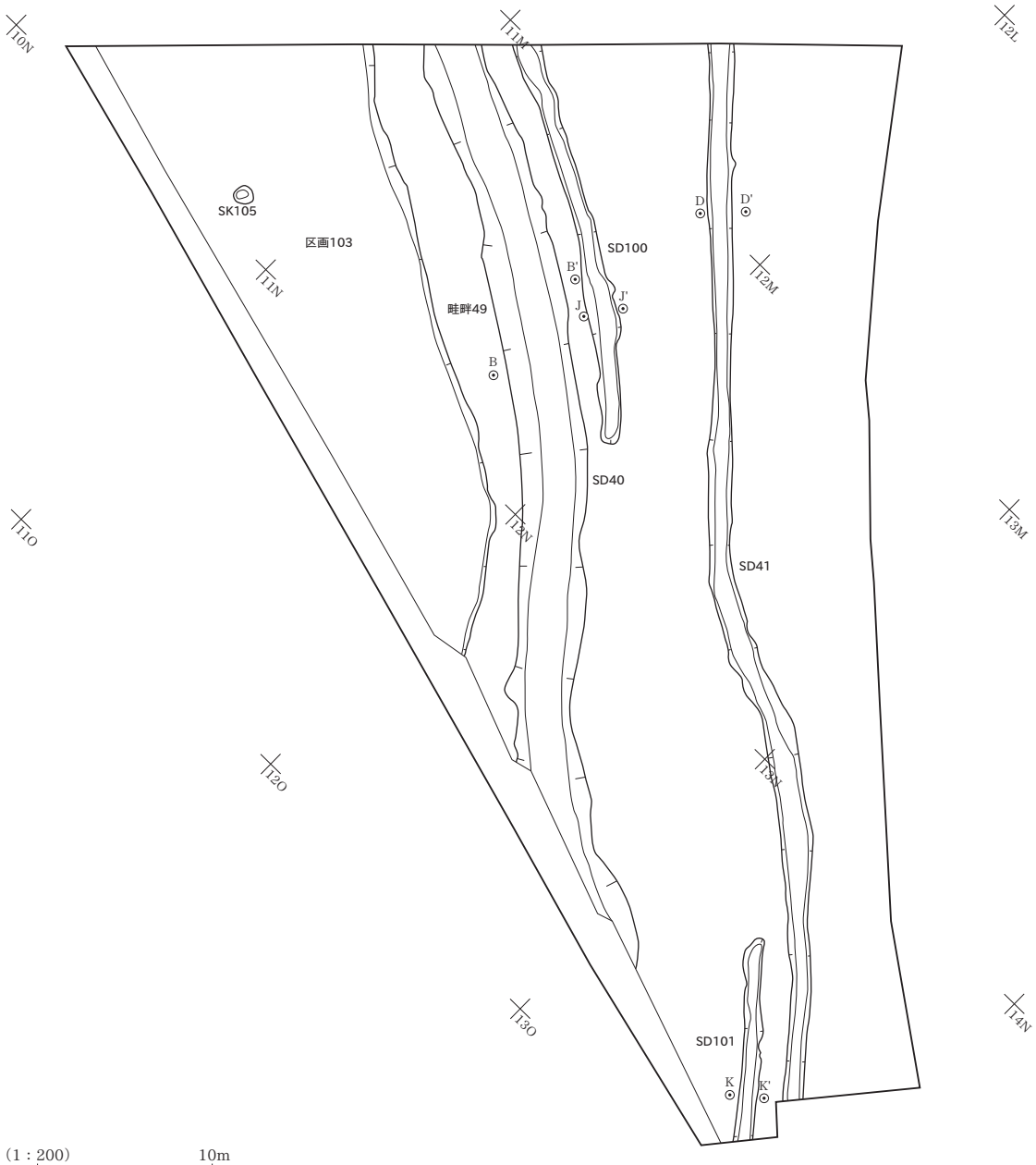
9K-P3



9KP3
1　黒褐色（10YR3/2）粘土（Ⅲb 層）
しまり強　明青灰色（10BG7/1）
粘土ブロック（Ⅳ層）混じる
炭化物粒（径 5～10mm）多く含む

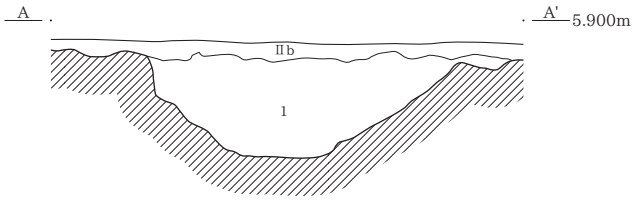
0　(1：40)　2m


SK42
E'
E
SD44
SD75
I'
I
SD80
SD40
P52
H'
SD79
H
SD41
C
C'
SD47
G'
SD78
G
F'
SD77
F
A
A'
畦畔49
SK50
9M
10L
11K
10M
SE46
11L

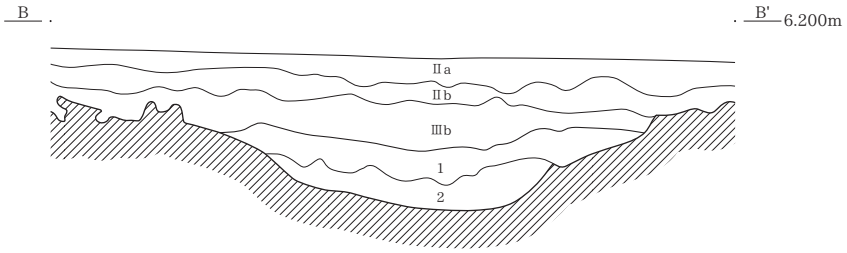

10N
11M
12L
SK105
区画103
11N
D
D'
SD100
B'
J'
J
12M
畦畔49
B
SD40
11O
13N
13M
SD41
12O
13O
14N
SD101
K
K'

0　（1：200）　10m

SD40

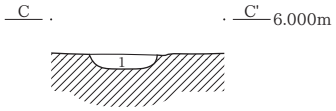


SD40-1
Ⅱb 層 暗青灰色（10BG4/1）粘土　Ⅱa 層より酸化が強く全体的に赤味が増す
1　黒褐色（5YR3/1）粘土　炭化物粒（径 1～10mm）・土器片多く含む　基本層序Ⅲa 層



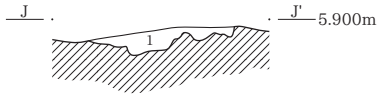
SD40
Ⅱa 層 青灰色（10GB5/1）粘土　明褐色（7.5YR7/2）粘土ブロック混　近・現代の水田耕作土
Ⅱb 層 褐灰色（10YR4/1）粘土
Ⅲb 層 黒褐色（10YR3/2）粘土　しまり強　酸化鉄粒多量・炭化物粒少量含む
1　黒褐色（10YR3/2）粘土　しまり弱 粘性中　白色粘土ブロック（径 5～34mm）多量混じる
炭化物を多量に含む
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘土　しまり弱・粘性中　微細な炭化物を多量に含む

SD41



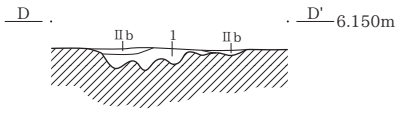
SD41
1　黒褐色（5YR3/1）粘土
土器片含む　基本層序Ⅲa 層

SD100



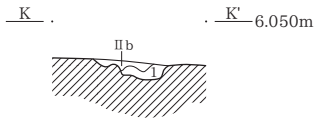
SD100
1　黒褐色（10YR3/1）粘土　炭化物粒少量含む
基本層序Ⅲb 層

SD41



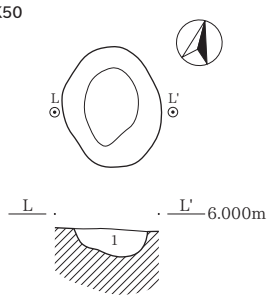
SD41
Ⅱb 層　褐灰色（10YR4/1）粘土
1　黒褐色（10YR3/2）粘土
しまり強　酸化鉄粒多量・炭化物粒少量含む
基本層序Ⅲb 層

SD101

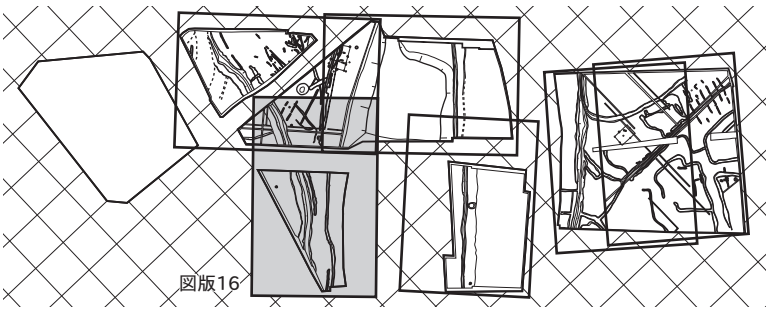


SD101
Ⅱb 層 褐灰色（10YR4/1）粘土
1　黒褐色（10YR3/1）粘土
炭化物粒少量含む
基本層序Ⅲb 層

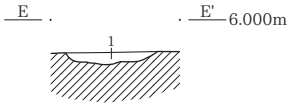
SK50



SK50
1　灰色（5Y5/1）粘土　炭化物粒（径 1～20mm）含む

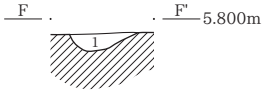


SD75



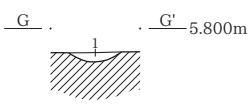
SD75
1　灰色（5Y5/1）粘土　炭化物粒（径 1～20mm）多量含む

SD77



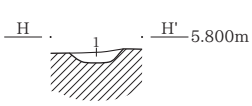
SD77
1　灰色（5Y5/1）粘土　炭化物粒（径 1～20mm）多量含む

SD78



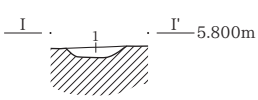
SD78
1　灰色（5Y5/1）粘土　炭化物粒（径 1～20mm）多量含む

SD79



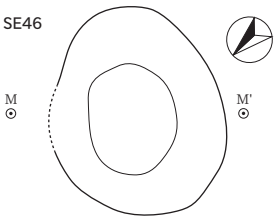
SD79
1　灰色（5Y5/1）粘土　炭化物粒（径 1～20mm）多量含む

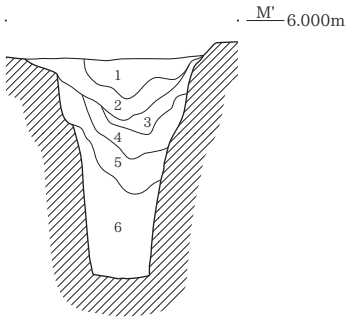
SD80



SD80
1　灰色（5Y5/1）粘土　炭化物粒（径 1～20mm）多量含む

SE46

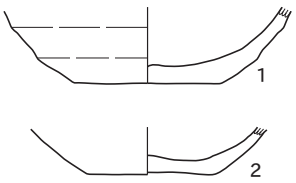




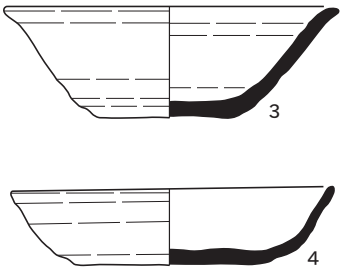
SE46
1　黒色（10YR1.7/1）粘土　灰色（5Y5/1）粘土ブロック混　しまり弱
酸化鉄粒・炭化物粒含む
2　黒色（10YR1.7/1）粘土　灰白色（10YR7/1）粘土ブロック混
しまり弱　酸化鉄粒・炭化物粒含む
3　灰白色（5Y7/1）粘土　酸化鉄粒・炭化物粒微量に含む
4　黒色ピート層（10YR1.7/1）　酸化鉄粒・炭化物粒少量含む
5　灰色（7.5Y5/1）粘土　黒色（10YR1.7/1）ピートブロック混
6　灰色（10Y4/1）粘土

0　(1：40)　2m

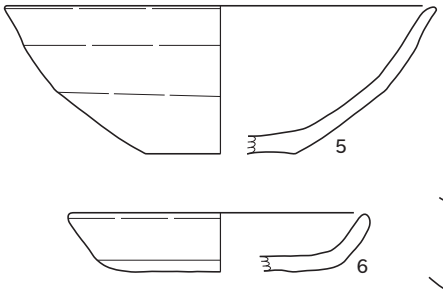
SK1（1・2）



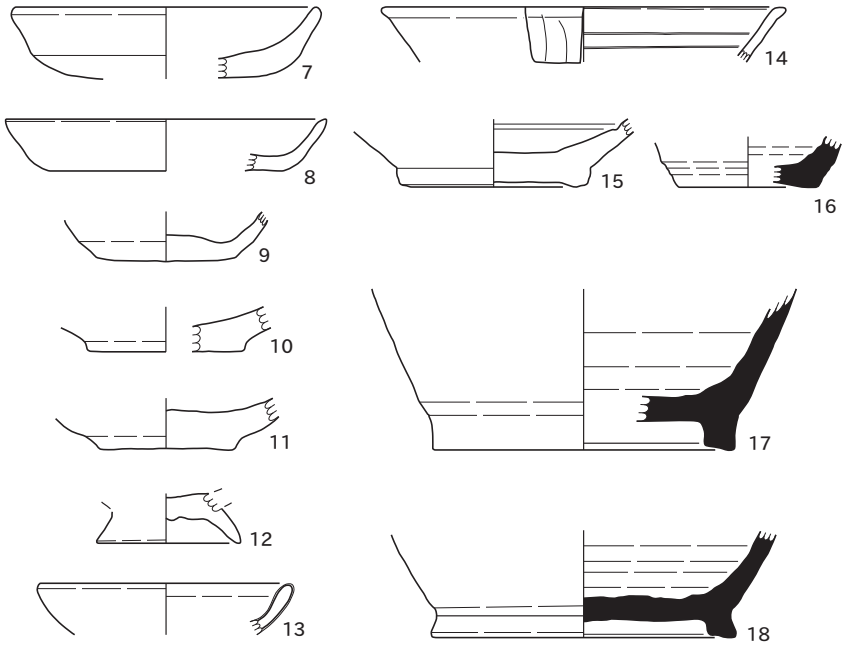
SK2（3・4）



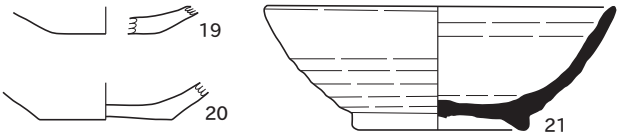
SK3（5・6）



SD40（7～18）

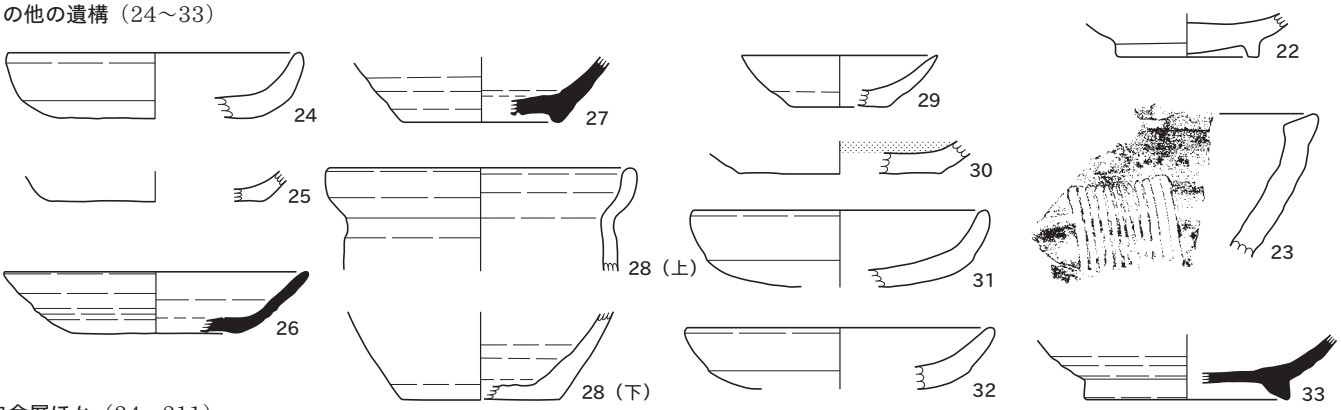


SD5（19～21）



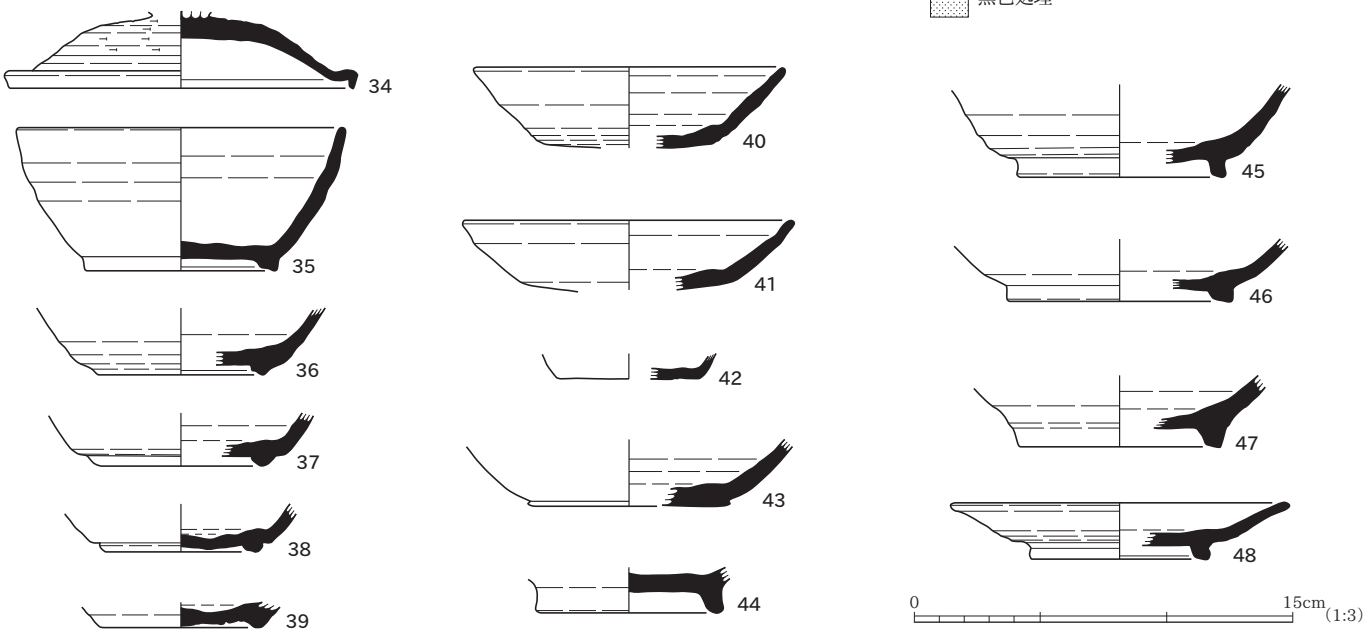
SD41（22・23）

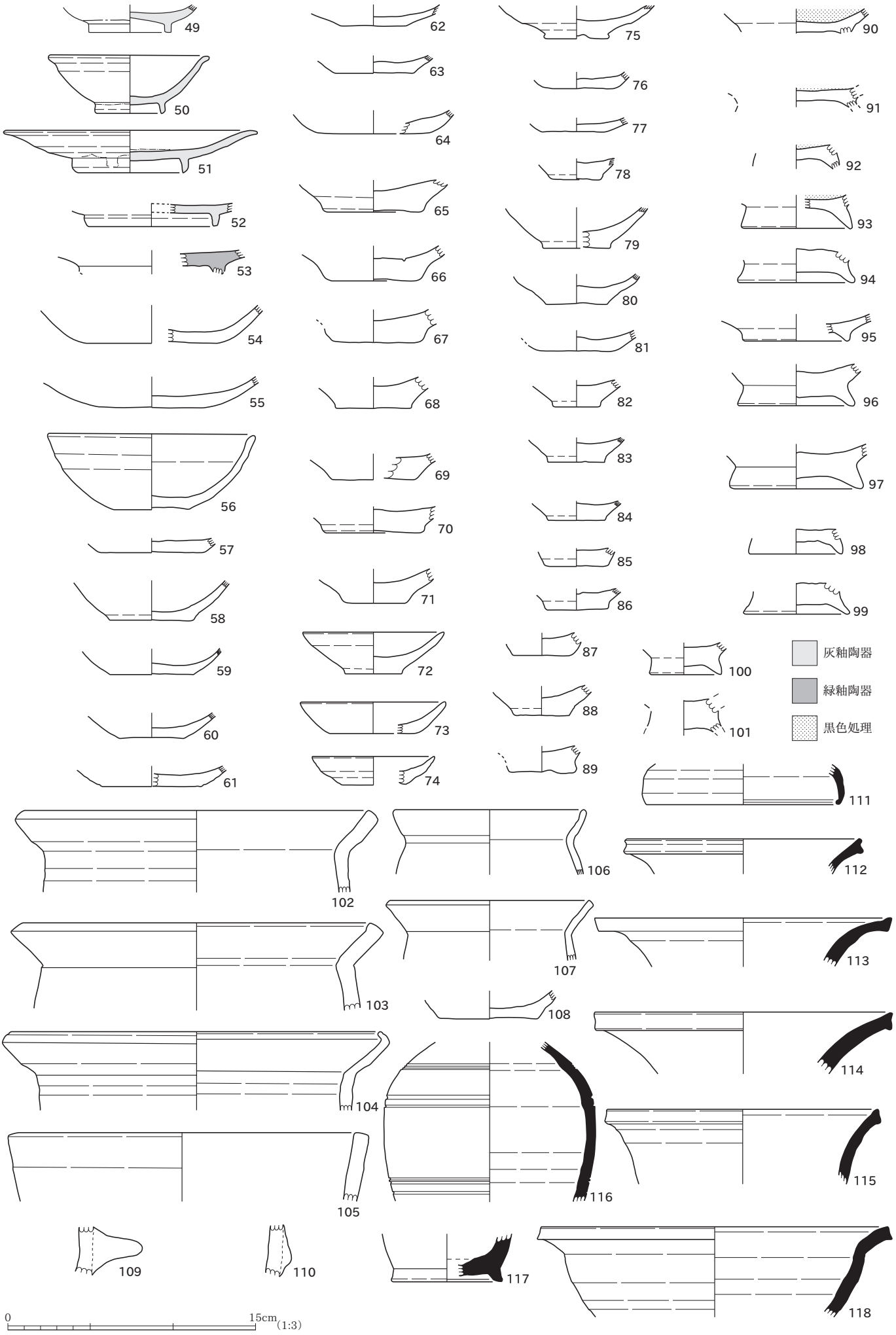
その他の遺構（24～33）

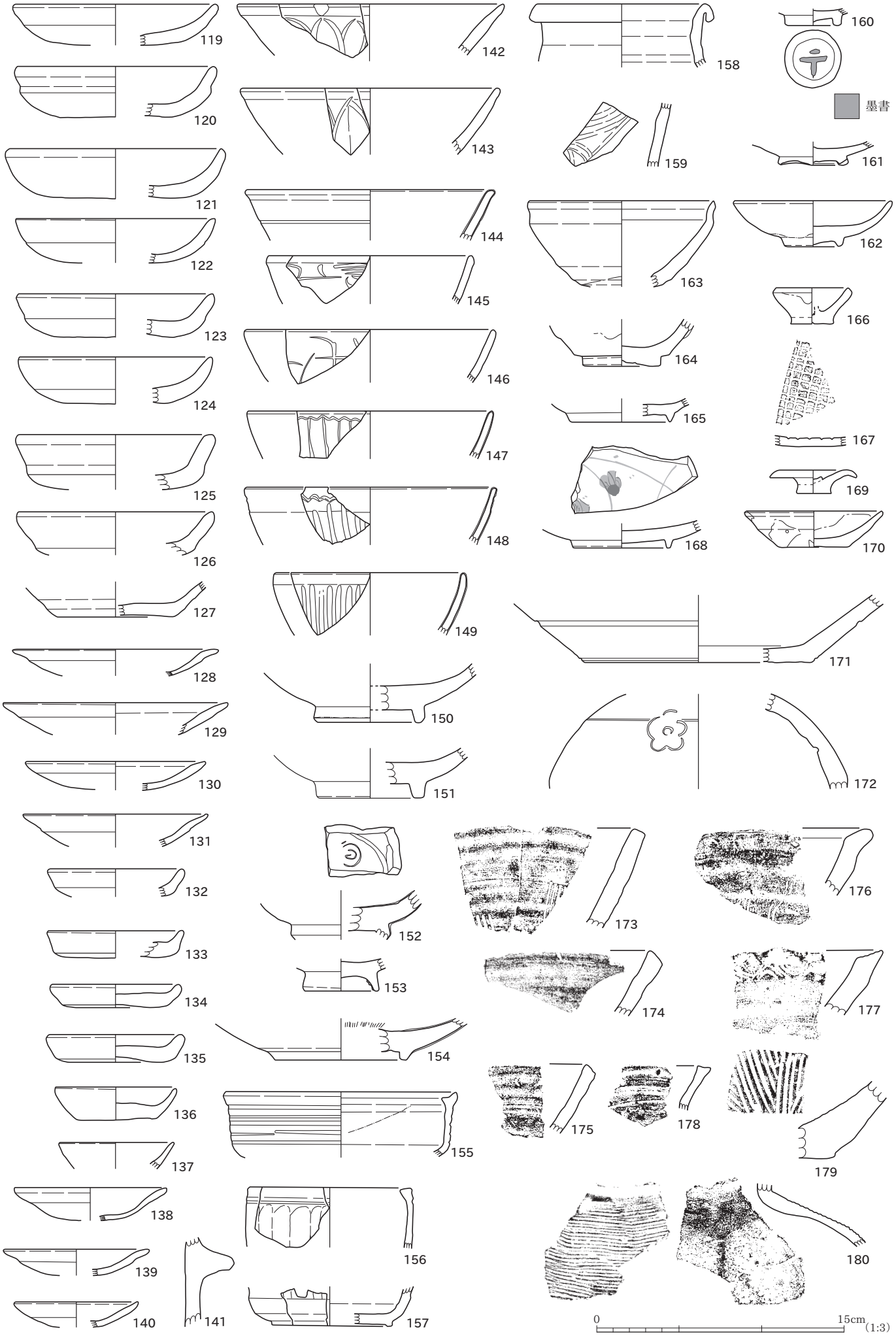


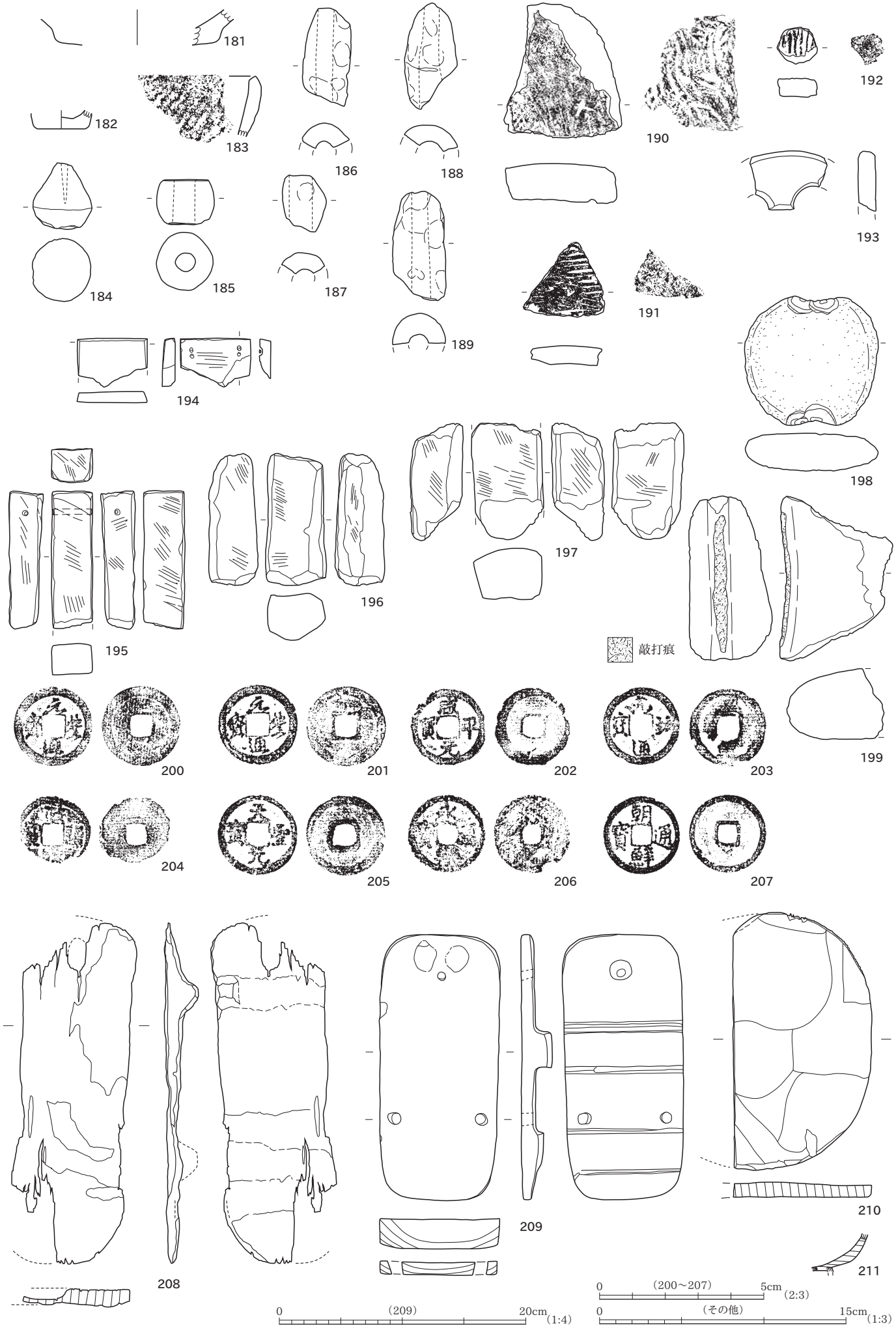
包含層ほか（34～211）

黒色処理




49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
111
112
113
114
115
116
117
118
102
103
104
105
106
107
108
109
110
灰釉陶器
緑釉陶器
黒色処理
0
15cm
(1:3)


119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
墨書
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
0
15cm
(1:3)

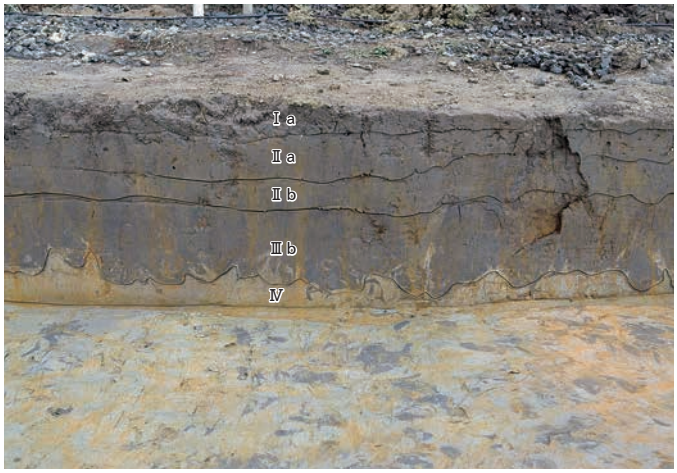

181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
敲打痕
0 (200～207) 5cm (2:3)
0 (209) 20cm (1:4)
0 (その他) 15cm (1:3)

調査区近景（東から）

A 区全景（南東から）

A 区南北ベルト断面（東から）

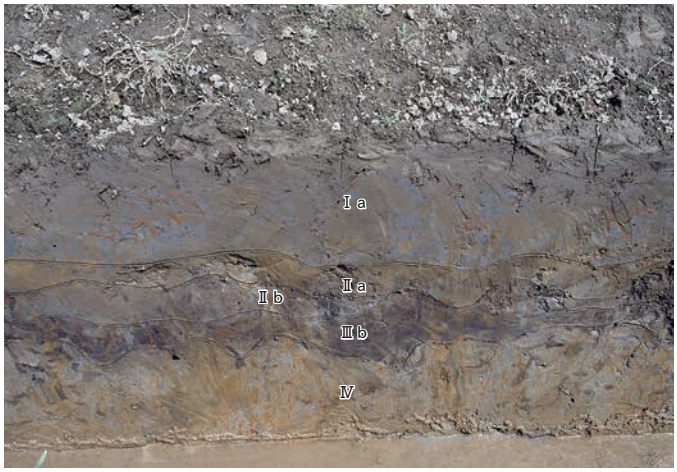
A 区南西壁断面（北東から）



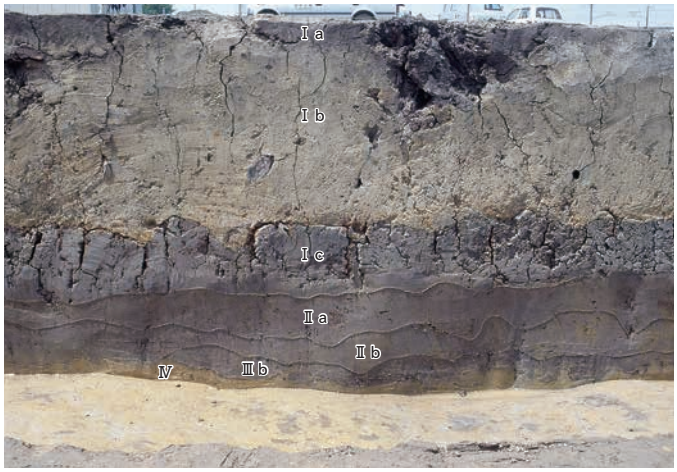
B 区北西壁断面（南東から）

B 区南北ベルト断面（東から）

B 区北西壁断面（南東から）



C1 区南北ベルト（東から）



D1 区南北ベルト断面（東から）

D2 区北東断面（南西から）

SK1 断面（南から）

SK1 完掘（南から）

SK2 断面・土器出土状況（南から）

SK2 完掘（南から）

SK2 須恵器出土状況（北東から）

SK3 断面（南から）

SK3 炭化物出土状況（南から）

SK3 完掘（南から）

18E4 土器出土状況

SD4 断面（南から）

SD6 断面（南から）

SD12 断面（南東から）

SD13 完掘（北西から）

SD10 完掘（東から）

SD10-4 断面（東から）

SD10-5（東から）

SD7 断面（南から）

SD7 完掘（南から）

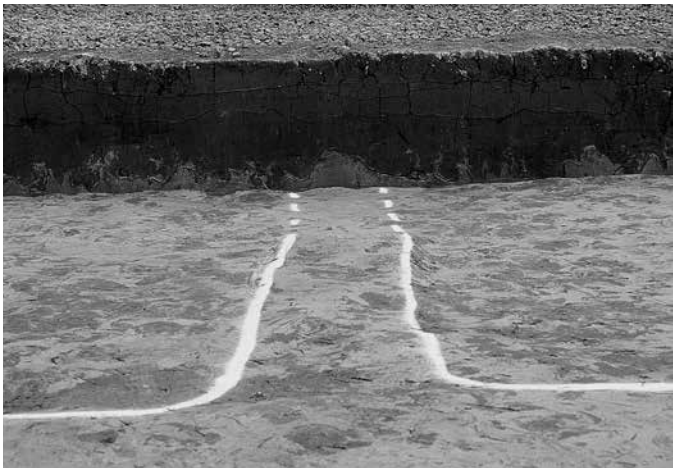
SD11 畦畔 14 完掘（南から）

SD36 完掘（西から）

SD9・畦畔 18 検出状況（北西から）

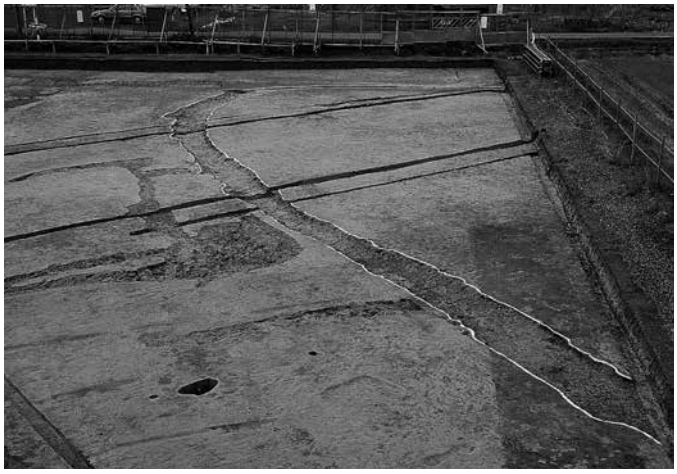
SD9 断面（北から）

SD9・畦畔 18 完掘（西から）

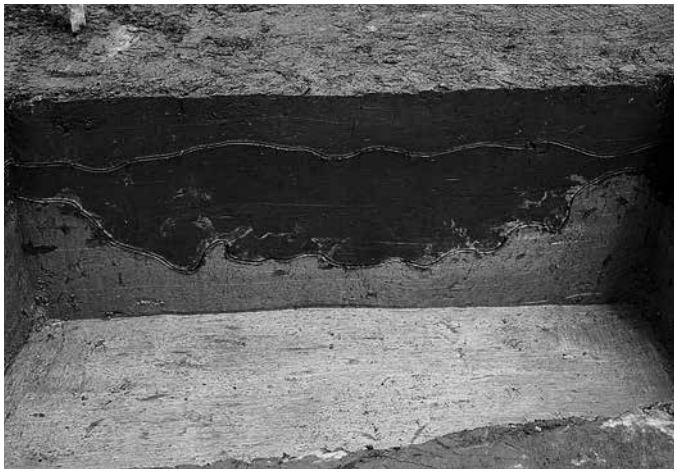


畦畔 19 断面（南から）

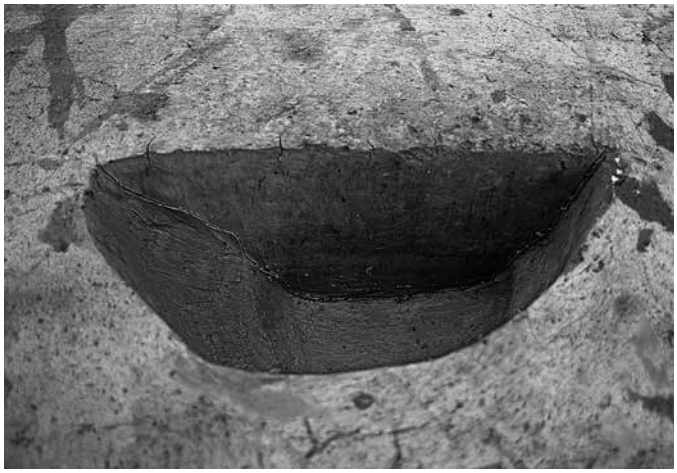
SD8 検出状況（南から）



SD8 完掘（北から）

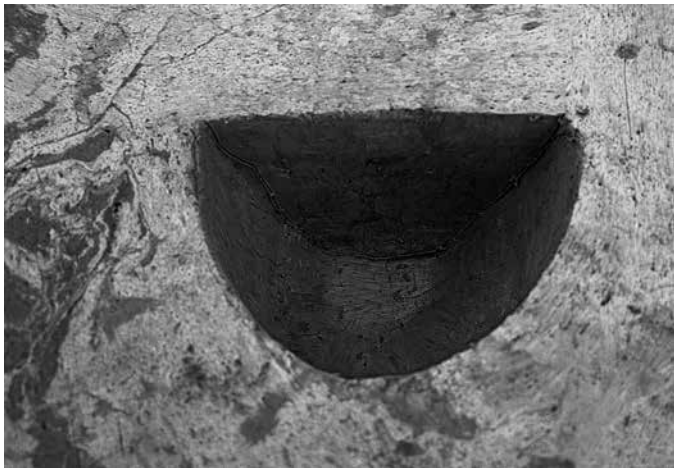


SD8 断面（南から）



P20（SB85）断面（西から）

P21（SB85）断面（西から）



P25（SB85）断面（西から）

P26（SB85）断面（西から）

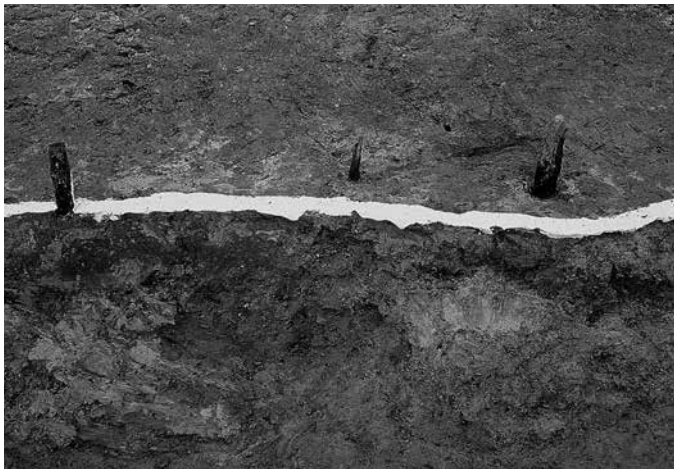
P16 断面（南から）

D1・D2 区近景（北西から）

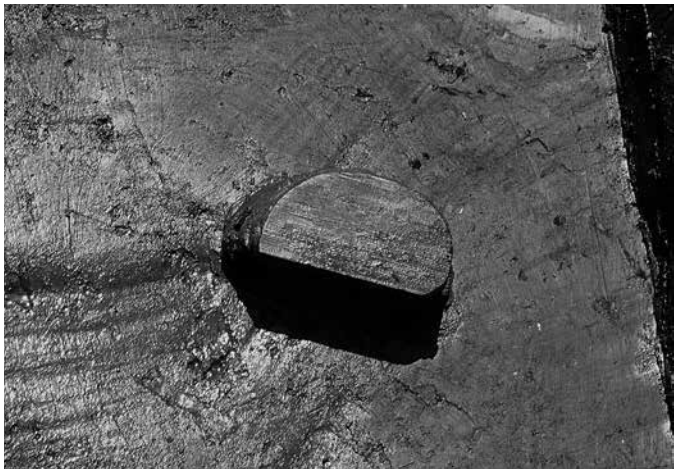
D1 区完掘（北西から）

SD83（D1 区）断面（北西から）

SD83（D1 区）完掘（北西から）



杭（D1 区 SD83 周辺）検出状況（南西から）



円形板出土状況（東から）

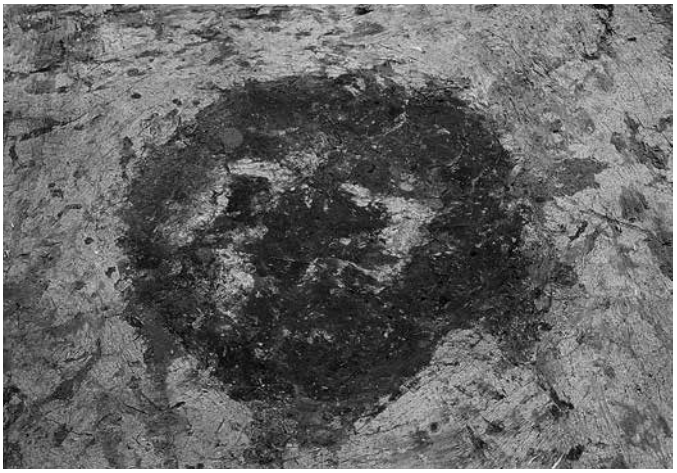
SD83（B 区）断面（北西から）

SD83 完掘（南東から）

畦畔 84（B 区）検出状況（南から）

作業風景（D1 区）

B 区近景（南西から）



SE48 検出状況（東から）

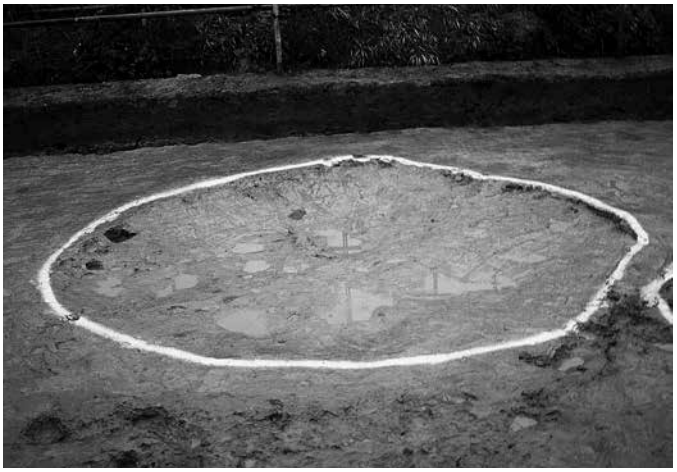
SE48 断面（東から）

SE48 完掘（東から）

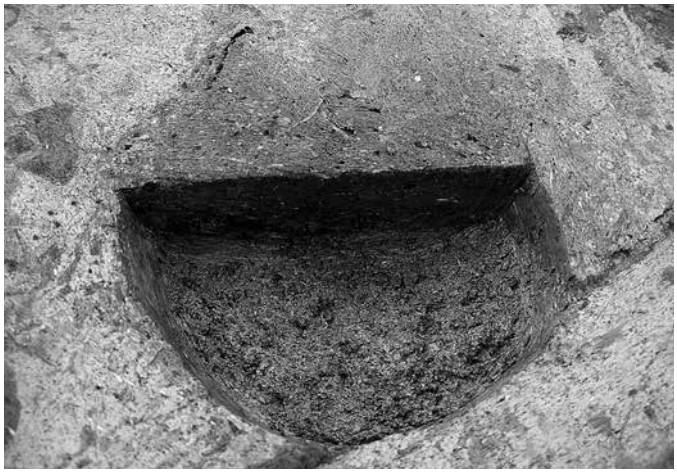
SE46 断面（東から）

SE46 完掘（東から）

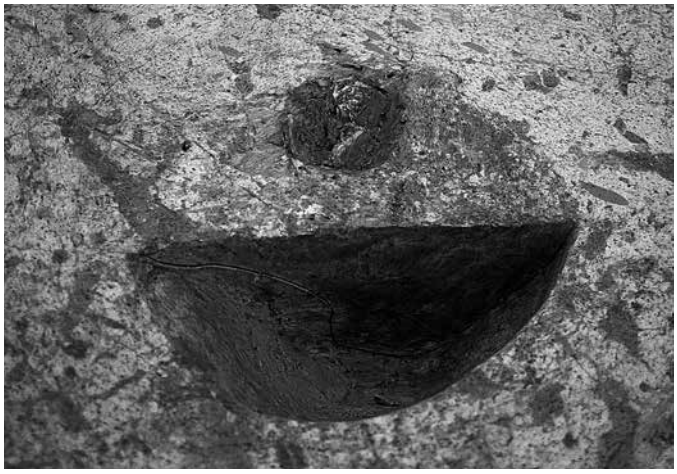
SK42 検出状況（南西から）



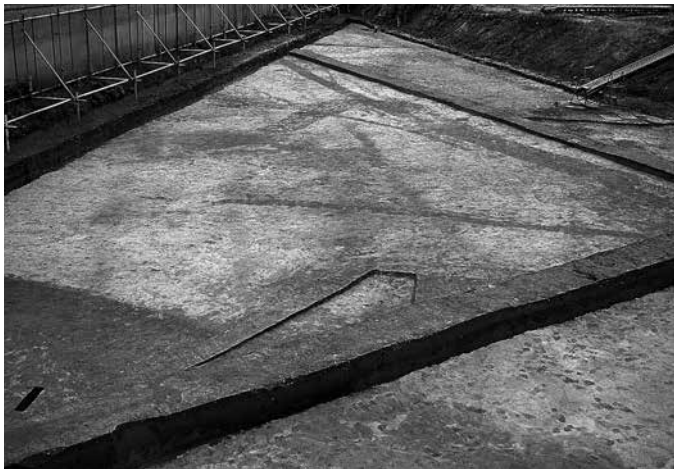
SK42 完掘（北東から）



SK50 断面（西から）



P52 断面・遺物出土状況（東から）



9・10JKL 周辺遺構検出状況（南から）

9・10JKL 周辺遺構完掘（南から）

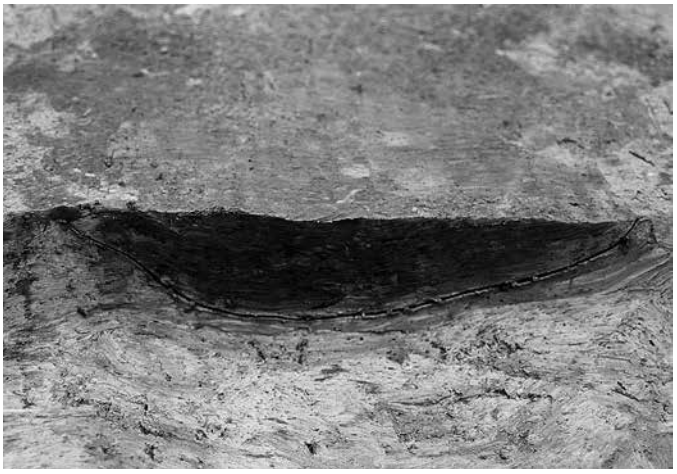
9・10KL 周辺遺構検出状況（北西から）

9・10KL 周辺遺構完掘（北東から）

9K 周辺遺構完掘（北から）

SB86 完掘（南東から）

9・10IJKL 遺構完掘（西から）



SD41（B 区）断面（東から）

SD41（B 区）完掘（東から）

SD43 断面（北から）

SD44 断面（南から）

SD45 断面（南から）

SD47 断面（南から）

SD47 完掘（南から）

SD75 完掘（南から）

SD77 完掘（南から）

SD78 完掘（南から）

SD40・畦畔 49（B 区）検出状況（東から）

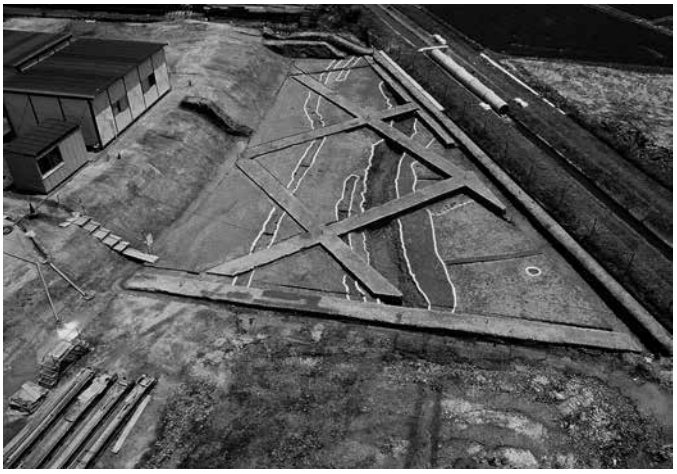
SD40（B 区）断面（東から）

SD40（B 区）完掘（東から）

SD40・畦畔 49（B 区）完掘（南から）

C2 区完掘（北から）

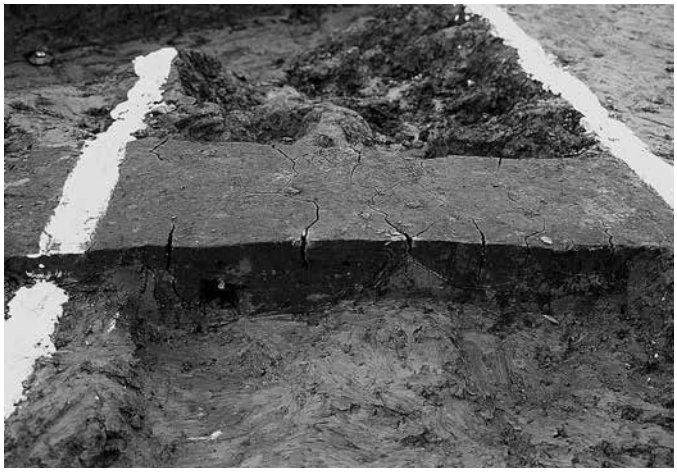
D2 区遺構検出状況（北西から）



D2 区完掘（北西から）

SD40（D2 区）断面（東から）

SD41（D2 区）断面



SD100 断面（東から）

SD101 断面（北西から）

SK105 断面（東から）

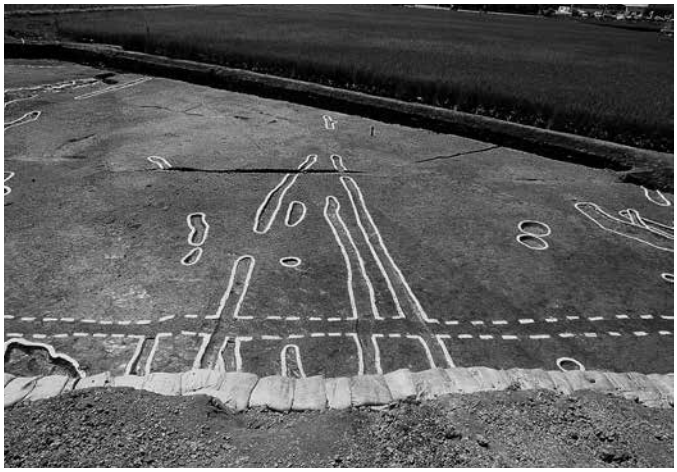
SK105 完掘（北から）

C2 区完掘（東から）

7KL・8JKL 遺構検出（南東から）

7KL・8JKL 遺構完掘（南東から）

8K 遺構検出（東から）



8K 遺構完掘（東から）

8KL 遺構検出（北東から）

8KL 遺構完掘（北東から）

8JK 遺構検出（東から）

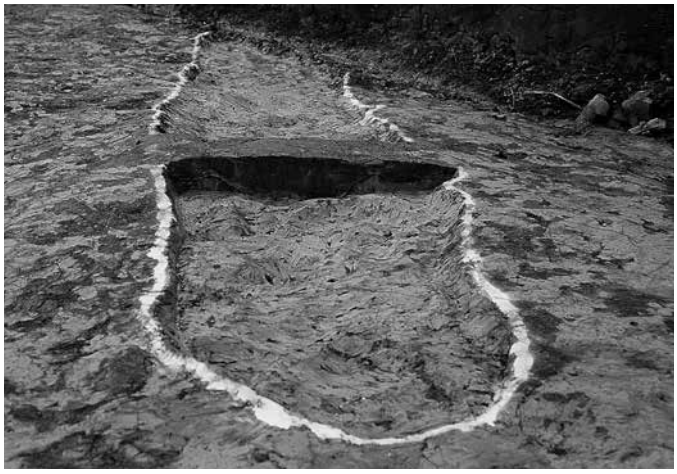
8JK 遺構検完掘（東家ら）

SK220 断面（北東から）

SK220 完掘（北東から）

SD40（C1 区）断面（東から）

SD40・201・202、畦畔 49・226 完掘（東から）

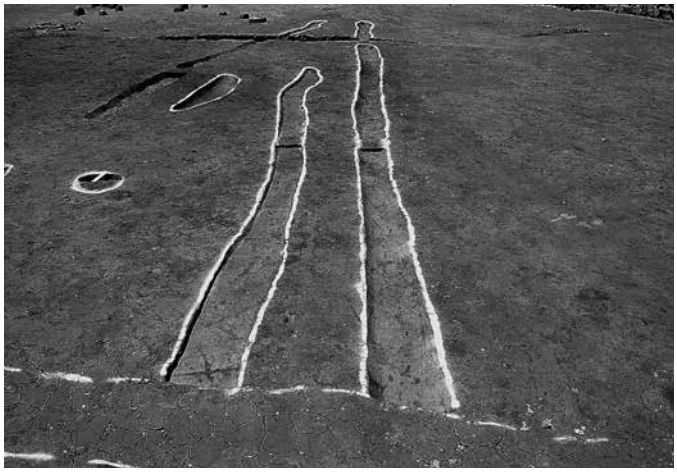


SD200 断面（西から）

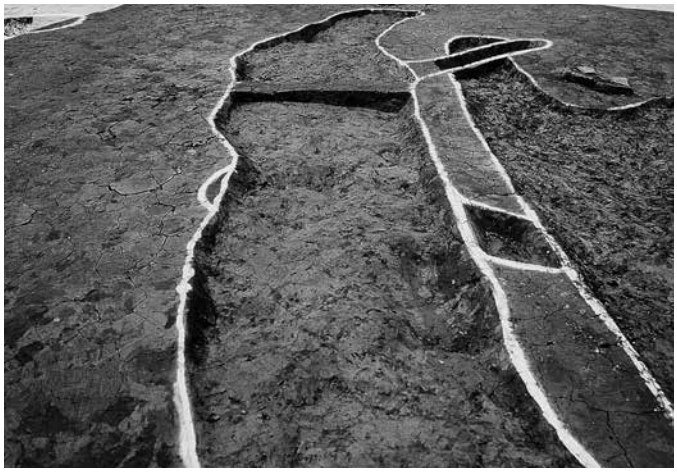
SD201 断面（東から）

SD203・204 完掘（東から）

SD207 断面（東から）



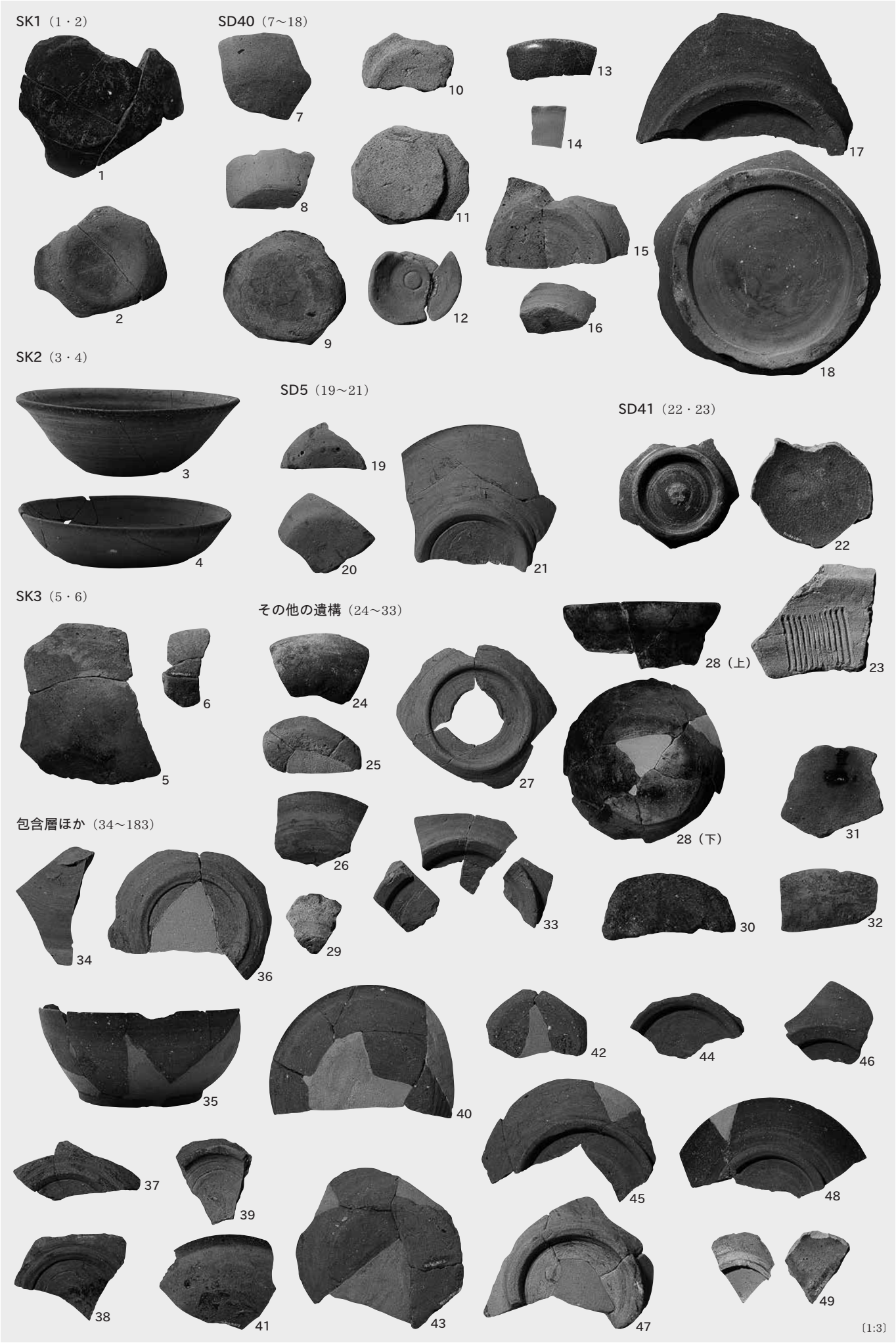
SD212・214 断面（東から）

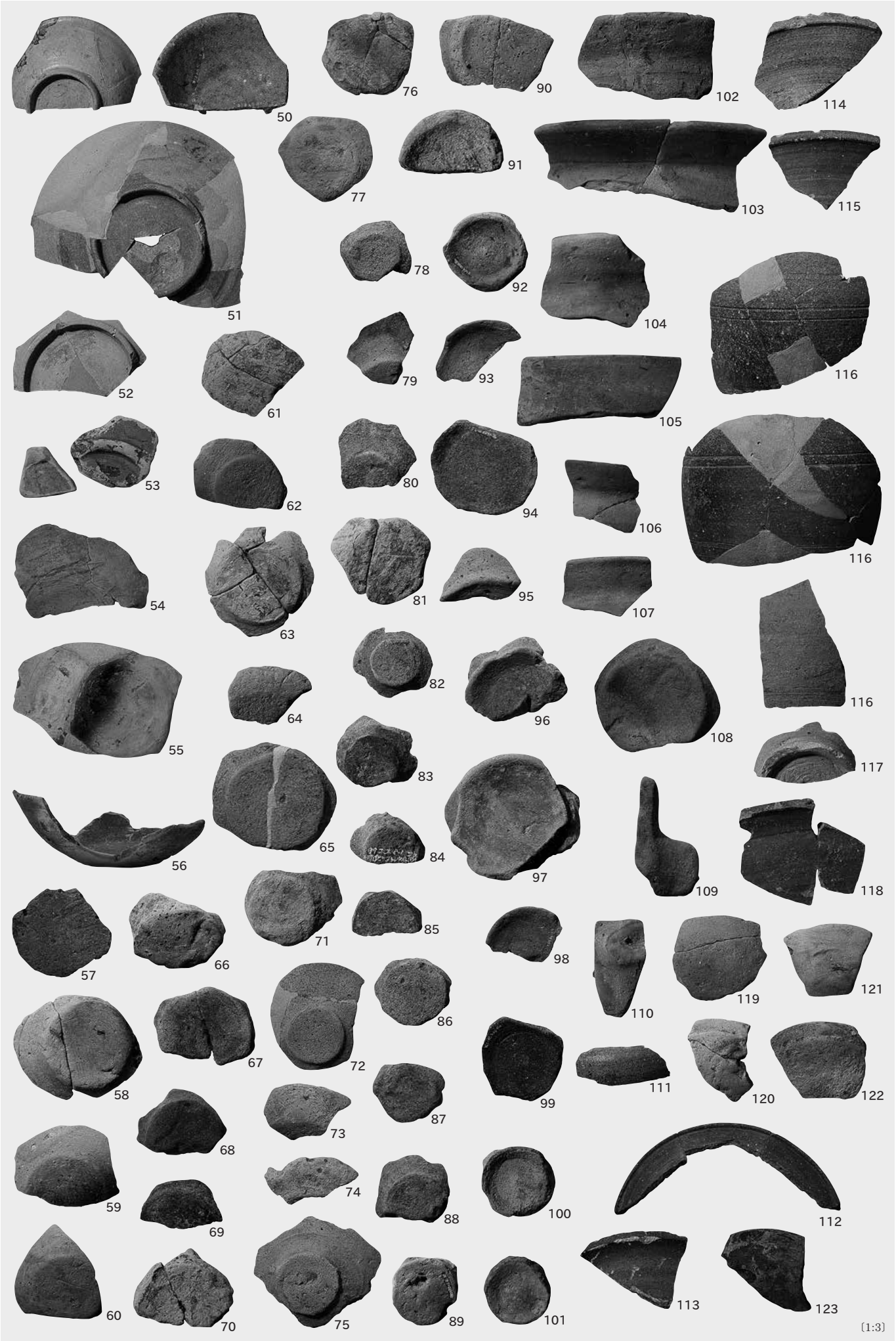


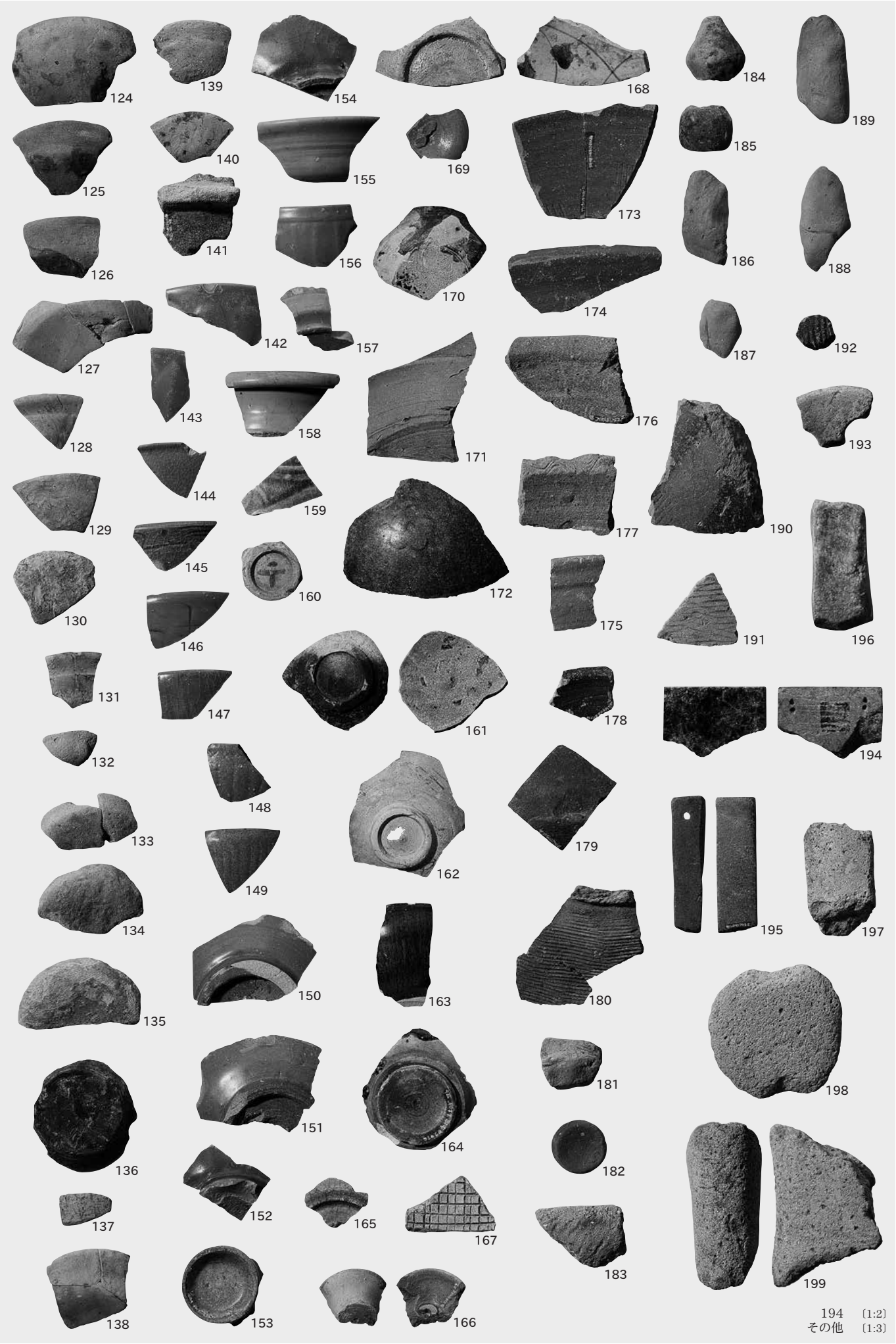
SD215 断面（北東から）

SD219 断面（東から）

SD221 断面（東から）


SK1（1・2）
SD40（7～18）
SK2（3・4）
SD5（19～21）
SD41（22・23）
SK3（5・6）
その他の遺構（24～33）
28（上）
28（下）
包含層ほか（34～183）
〔1:3〕

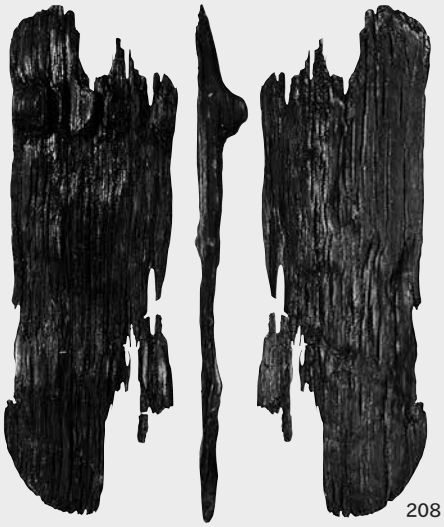

50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
116
117
118
119
120
121
122
123
〔1:3〕

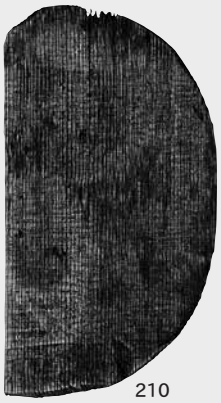

124
139
154
168
184
189
125
140
155
169
173
185
126
141
156
170
174
186
188
127
142
157
187
192
128
143
158
171
176
193
129
144
159
177
190
130
145
160
172
175
191
196
131
146
147
161
178
194
132
148
133
162
179
134
149
195
197
135
150
163
180
198
136
151
164
181
137
152
165
167
182
138
153
166
183
199

194　〔1:2〕
その他　〔1:3〕

200

204


208


210

201

205

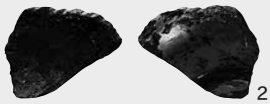
202

206

203

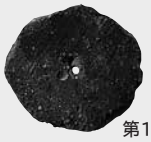
207

209


211

第13図1

第13図2


第13図3

201～207　〔2:3〕
その他　〔1:3〕

報告書抄録

ふりがな	こみねいせき
書名	小峯遺跡
副書名	一般国道８号柏崎バイパス報告書
巻次	X
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第259集
編著者名	春日真実（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、鈴木　茂（株式会社パレオ・ラボ）
編集機関	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津93番地１　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2015（平成27）年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小峯遺跡	新潟県柏崎市半田３丁目10番地10	15205	347	37°21′36″	138°34′38″	19980610～19981216 19990419～19990803	9,000㎡	一般国道８号柏崎バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	出土遺物	特記事項
小峯遺跡	遺物包蔵地	縄文時代		縄文土器・石錘	縄文土器と縄文時代の石器が少量出土した
	集落・生産遺跡	平安時代～中世（9～16世紀）	掘立柱建物２ 井戸３ 土坑10 畑作溝 溝 ピット 杭	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・土師質土器・珠洲焼・瀬戸焼・美濃焼・青磁・白磁・青白磁、土製品（土錘・紡錘車？・転用研削具）、石製品（巡方･砥石･敲石）、金属製品（銭貨）、鉄滓、木器（下駄･円形板･漆器椀･杭）	須恵器水瓶、灰釉陶器椀・皿、緑釉陶器皿、白磁四耳壺、青磁盤・香炉、青白磁梅瓶、瀬戸焼・美濃焼瓶子・燭台、石帯などが出土した。

要約	９世紀前葉から16世紀中葉まで連綿と続く集落・生産遺跡（耕地）で、検出した２棟の掘立柱建物は小規模な建物だが、出土土器・陶磁器には優品があり、石帯の巡方も確認できる。遺跡は長期間存続した可能性が高く、貧しく不安定な村落ではなく、近隣に有力な集落が存在したか、有力な在地勢力（が所在する集落）の出村的な性格の可能性がある。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第259集
一般国道８号　柏崎バイパス関係発掘調査報告書X

小　峯　遺　跡

2015(平成27)年３月30日印刷
2015(平成27)年３月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950－8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956－0845　新潟市秋葉区金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒950－2022　新潟市西区小針１丁目11番８号
電話　025（233）0321

第259集　小峯遺跡　　正誤表

ページ	行など	誤	正
奥付(抄録)	コード 遺跡番号	347	680